調査研究活動報告

歴博国際研究集会「日韓先史時代の集落研究」開催報告

Report on Investigation and Research Activities

藤尾慎一郎・李 昌熙　編

はじめに

本報告は，2009 年 10 月 24 日～ 25 日の 2 日間にわたって同志社大学今出川キャンパス「寒梅館」を会場に行われた 2009 国立歴史民俗博物館国際研究集会「日韓先史時代の集落研究」（代表　藤尾慎一郎）の開催報告である。

本研究集会は，3 年間の共同研究の開催，『国立歴史民俗博物館研究報告』による共同研究成果報告の刊行に続く第三弾として企画したもので，国立歴史民俗博物館（以下，歴博）が実践している博物館型研究統合の一環として位置づけることができる。研究成果報告書の刊行が共同研究員からの一方的な成果公表とするならば，本研究集会は研究コミュニティ側から共同研究員への応答である。研究集会を催すことにより自分たちの共同研究が研究史上にどのように位置づけられ，研究者にどのように受け取られたのかを直接知ることができる。研究集会の内容を誌上報告することで参加されなかった研究者にも広く知っていただき，日韓先史時代集落研究の今後の進展に寄与できれば幸いである。

本報告の構成は，開催目的，参加メンバー，発表内容の概要を報告したあと，韓国側と日本側の報告，および総合討論の模様を資料編としてそのまま掲載した。なお，韓国側の発表内容の記録と翻訳は李昌熙氏と李智瑛氏にお願いした。

一　概要

1. 開催の経緯と目的

本研究集会は，2005 年～ 2007 年に実施した歴博基盤研究「縄文･弥生集落遺跡の集成的研究」（研究代表藤尾）の成果報告書『国立歴史民俗博物館研究報告』刊行後に，共同研究員の世代より前の世代の研究者や共同研究員とは立場を異にする人たちが，この共同研究の成果・内容をどのように受け取ったのかを直接知る機会を持てないか，という外部の共同研究員の声［114 頁左段 3 行目参照］から始まった。

歴博の共同研究は，3 年の研究期間終了後 1 年ぐらいで成果報告書を出すことが義務づけられていて，ほとんどの共同研究の成果が『歴博研究報告』特集号として刊行される。しかし刊行後に自分たちの研究成果に対する評価を知る機会はわずかしかないため，実質的には出しっぱなしと同じ

国際研究集会ポスター

国立歴史民俗博物館研究報告第149集

である。

それが先の外部共同研究員の発言につながるのである。そこで共同研究員同士で話しあいを行った結果，刊行後半年後ぐらいを目処に研究成果を直接議論する機会をシンポジウム形式で設けることにした。研究代表者の藤尾は弥生集落と深い関係にあり時期的に併行する韓国青銅器時代の集落研究の現状報告とあわせて，2009 年度の国際研究集会として開催することを企画した。

弥生集落というテーマで開く以上，この分野の研究者人口が多い東海から九州にかけてのどこかで行うことがふさわしいと考え，共同研究員である同志社大学の若林邦彦と相談の上，京都市今出川の同志社大学キャンパスを会場に開催することを決定した。

成果報告書である『歴博研究報告』第 149 集が 2009 年 3 月に刊行されることが確実になった時点で，刊行後半年目にあたる 2009 年 10 月に開催することが決まった。

シンポジウムは 2 日間の日程をくみ，1 日目は韓国青銅器時代の集落・墳墓研究の現状を 3 人の韓国人研究者に発表をお願いすることとした。京畿道や忠清道など韓国西南部の集落研究について韓神大学校博物館の李亨源氏，慶尚道蔚山地域を中心とする韓国東南部の集落研究について蔚山文化財研究院の李秀鴻氏，無文土器時代前期の墓制については国立中央博物館（当時）の裵眞晟氏である。韓国青銅器時代の集落にみられる二大地域性と弥生時代開始直前の韓国の墓制をあつかったテーマ設定である。

2 日目は共同研究員が『研究報告』に発表した論文の概要報告とそれを手がかりに会場の研究者と質疑をおこなう総合討論からなる。参加者がすでに『研究報告』所収の論文を読んだ上で参加しているという前提にたち，複数のテーマごとにセッションを組んで参加者と議論し，最後に総合討論をおこなうこととした。

2. 四つのセッションテーマ

2009 年 5 月に共同研究員の石黒立人，若林，柴田昌児，藤尾が議論の末，次のようにテーマと趣旨，セッションリーダー，コメンテーター案を定め，共同研究員全員に諮った上で決定した。また 9 月

には先の4人に共同研究員の小澤佳憲・濵田竜彦，コメンテーターの豆谷和之，桑原久男を加えた会合を持ち，事前打ち合わせをおこなった。以下，4つのテーマの概略である。

① AMS－炭素14年代測定の進展により土器型式ごとの存続幅に長短のあることが明らかになってきたことをうけて，同時併存住居の認定をどのように行うのか。考古学的に土器型式内の細かい時期差を突きつめて同時併存遺構の絞り込みを行う具体的な方法など，集落論の基礎的な方法論についての整理をおこなうセッションで，藤尾と濵田をセッションリーダーとした。またこうした問題に早くから直面して対処してきている縄文集落論の立場から共同研究員の小林謙一にコメンテーターをお願いした。

② 人びとはなぜ集まって集落をつくるのか，彼らをつなぎ止めていたものは何かをめぐり，出自や血縁を重視する立場から，独立棟持柱建物やお墓と集落との関係を手がかりに集落の形成要因と統合原理（祭祀・経済）について議論するセッションで，設楽博己と小澤をセッションリーダーとした。コメンテーターを奈良県唐古・鍵遺跡で大形建物の発掘調査に携わった豆谷和之氏にお願いした。

③ 環壕集落，拠点集落，弥生都市，複合型集落，など，いろいろな呼称と概念が提出されている弥生時代の大規模集落の構造を，伊勢湾周辺の弥生集落をケーススタディに，集落構造や集落・集団間関係を通じて，地域社会の中で一貫した弥生集落の景観モデルを抽出するセッションで，柴田と石黒をセッションリーダーとした。コメンテーターは，愛媛県文京遺跡を調査している田崎博之氏と，集落構造は大きな幅のある広がりの中で地域や時間によってバリエーションを持つと考える桑原久男氏にお願いした。

④ 2000年以前の弥生集落論は，まず単位集団を見つけてからその動態の分析をおこなう手法がほとんどであったが，そういう手法を採らない弥生集落論をめざして実践してきた若林と小澤をセッションリーダーとして，自らまな板の上のコイになるセッションである。コメンテーターは関東地方を中心に史的唯物論の立場から伝統的な弥生集落論を実践してきた安藤広道氏にお願いした。

なお，司会・進行は石黒と若林とした。

3. スケジュール

① 第1日　2009年10月24日（土）　記念講演

李亨源　韓神大学校博物館　「集落構造からみた韓国中西部地域の青銅器社会」

李秀鴻　蔚山文化財研究院　「蔚山地域の青銅器時代集落について」

裵眞晟　韓国国立中央博物館　「無文土器時代前期の墓制」

② 第2日　2009年10月25日（日）　研究発表

藤尾慎一郎・濵田竜彦（鳥取県埋蔵文化財センター）　「集落論の基礎的な方法論について」

設楽博己（駒澤大学）・小澤佳憲（福岡県教育庁文化課）

「集落の形成要因と統合原理（祭祀・経済）」

石黒立人（愛知県埋蔵文化財センター）・柴田昌児（愛媛県埋蔵文化財調査センター）

「集落構造―平面構成と集落・集団間関係―」

小澤佳憲・若林邦彦（同志社大学）　「単位集団論」
司会：石黒立人・若林邦彦
コメンテーター：豆谷和之（田原本町役場），桑原久男（天理大学），田崎博之（愛媛大学），
安藤広道（慶應義塾大学）
通訳：李昌熙（総合研究大学院大学・大学院生）

4. 主な参加者

報告者，コメンテーターを除くと，現在行っている歴博の基幹研究「農耕社会の成立と展開」（研究代表藤尾）の共同研究員と近畿地方を中心とした研究者，約70人である。

高瀬克範（明治大学），野島永（広島大学），吉田広（愛媛大学），小椋純一（京都精華大学），坂本稔（本館），上野祥史（本館），森岡秀人（芦屋市教育委員会），森井貞雄（大阪府教育委員会）ほか

5. 事務局（◎は代表者）

◎藤尾慎一郎　本館・研究部・教授　　李昌熙　総合研究大学院大学・大学院生

6. 成果と課題

1日目は韓国の若手研究者3人による，韓国青銅器時代集落遺跡と前期の墓制に関する現状と課題について報告を受けた。韓国でもソウル，京畿道や忠清道のように歴博の新年代への関心が高い地域と，釜山を中心とした南部地域のように従来の年代観を採用する地域では，当然のことながら年代観が異なる。今回のシンポでは年代観の違いが原因で議論が混乱することはなかったが，歴博の新年代が日本よりも浸透している点は興味深い。

2日目は成果報告書の内容をめぐる質疑をおこなった。共同研究では若い研究者が現状を打開しようといろいろな試みをおこない，それを論文にして世に問うたのに対して，会場からはこれまでのやり方や方法がベストであって，まずそれから始めるべきだという意見は出たが，こちらからの提案に対する対案の提示はないなど，一方通行に終わった感が強い。今後，こうした世代間のギャップや立場の違いはより大きくなるのではないかと予想するが，両者の溝をどのように埋めていくのか，課題を残したといえよう。

本シンポジウムは，共同研究→成果報告書→シンポジウムを通して研究者に直接呼びかける，という新しい研究スタイルを実践したものである。成果報告書を出して自己満足に終わるのではなく，直接研究者の意見を聞き，応答し，浮き彫りになった問題点をさらなる出発点として，次の研究につなげていく所存である。

なお，当日は配付資料としてレジメ集『日韓先史時代の集落研究』（日韓両言語版132頁）を刊行した。

二　韓国青銅器時代の集落研究の現状

李亨源　韓神大学校博物館　「集落構造からみた韓国中西部地域の青銅器社会」
李秀鴻　蔚山文化財研究院　「蔚山地域の青銅器時代集落について」
裵眞晟　韓国国立中央博物館　「無文土器時代前期の墓制」

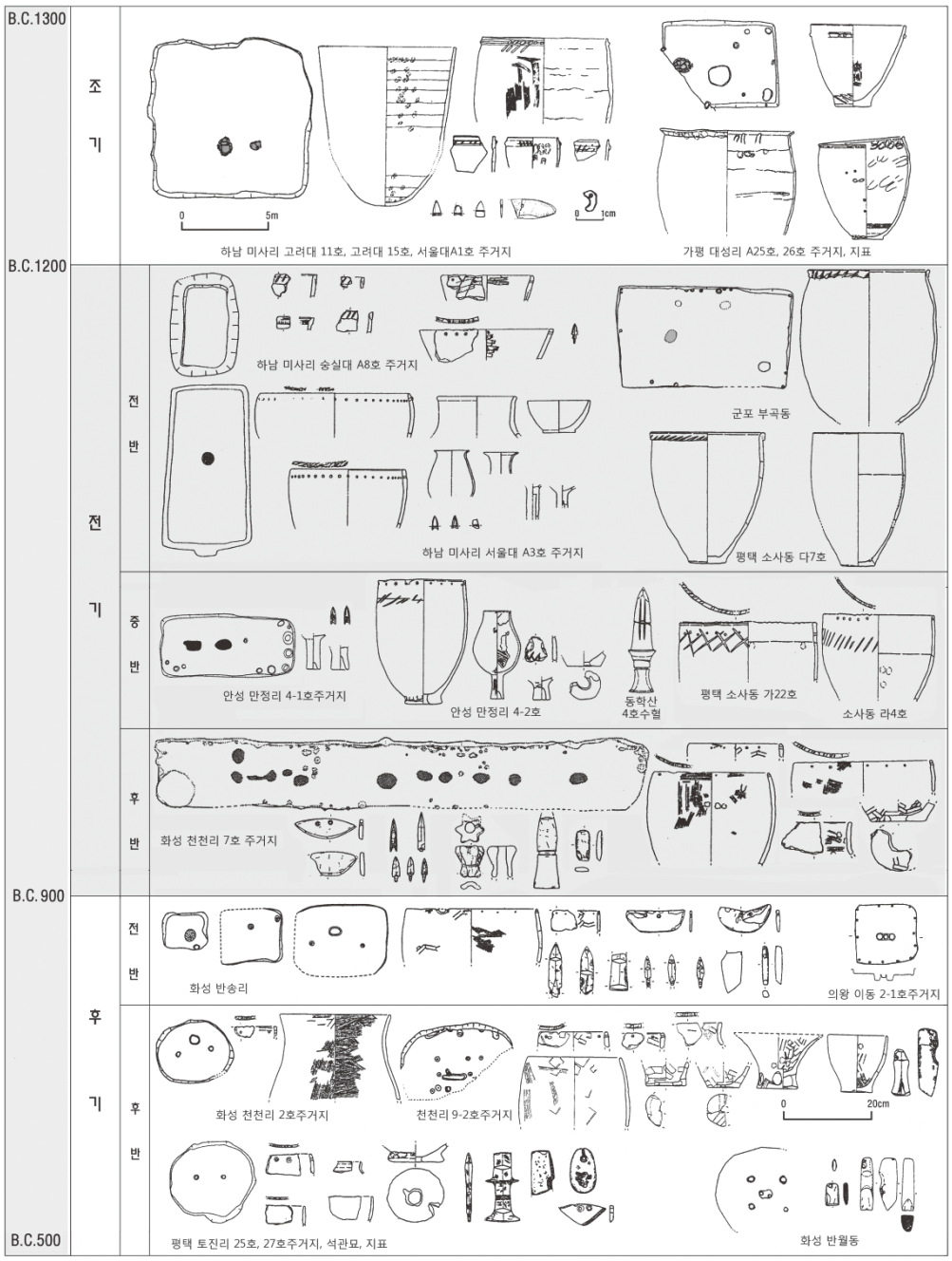


図1　京畿地域青銅器時代の編年（李亨源案）

1. 時代区分と文化類型

2000年以降急激に進んだ発掘調査によって韓国国内における無文土器時代の集落・墳墓研究は大幅に進展し，その影響は新たな時代名称の創出や複数の文化類型の設定，新しい年代観の採用にまで至っている。

2006年に安在晧は「青銅器時代」という時代名称を提案して，それまでの無文土器時代早期から中期にあてるとともに，従来の無文土器時代後期を初期鉄器時代と呼んだ［安在晧 2006］。今回の発表でも李亨源と李秀鴻が青銅器時代の名称を採用した。

韓国において青銅器は無文土器時代前期の孔列文土器段階に出現するので，早期の突帯文土器

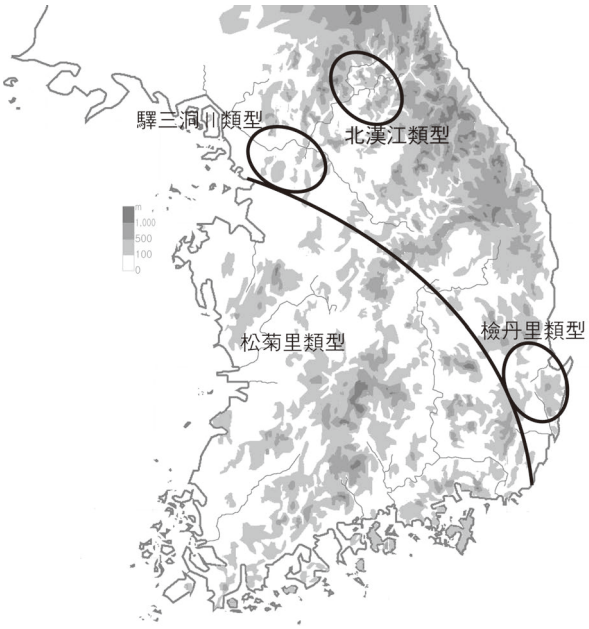


図2　韓国における青銅器時代後期の地域性（李秀鴻作成）

段階には認められないし，水田稲作も前期から始まるので青銅器時代という名称を与えるのは時期尚早との意見もあって，青銅器時代という時代名称を採用しない研究者も多い。しかしそうした考古学的な事実よりも，むしろ松菊里式文化と時間的に後続する粘土帯土器文化との間にみられるような，いわゆる従来の無文土器時代中期と後期の間の文化的な断絶や系譜の違いの方がより大きいため，必ずしもそぐわないけれども「青銅器時代」という名称を仮に使うことで，松菊里式以前と粘土帯土器以降を別の時代であることを強調する研究者に分かれているようだ。若い世代の研究者を中心に青銅器時代という名称は確実に浸透しつつある。

歴博が主導するAMS－炭素14年代測定にもとづく較正年代は，九州北部の弥生前期・中期の土器の実年代を大幅にさかのぼらせるにとどまらず，併行する韓国無文土器の年代にも大きな影響を与えている。従来の年代観をそのまま用いる釜山地域に近い蔚山ではまだ従来の年代観を用いており，李秀鴻の年代観も明記されてはいないものの従来どおりである。一方，考古学と自然科学の学際研究を指向する李亨源は今回，較正年代による年代観を示し（図1），それにもとづく発表をおこなった。裵眞晟は中間的な立場で，青銅器が出現する以前の無文土器時代早期の年代は炭素14年代にもとづく紀元前15～13世紀説をとるが，遼寧式銅剣が出土するようになる前期以降は従来の年代観である紀元前8世紀説をとる。したがって，早期の存続幅が500年と異様に長いわりには前期以降の存続幅が短いという整合性のとれない存続幅をもつ年代観となっている。

次が文化類型の設定である。1990年代前半までは韓国全体で突帯文土器→孔列文土器→松菊里式土器→円形粘土帯土器→三角形粘土帯土器と変遷する無文土器編年が考えられてきたが，調査が進むにつれ孔列文土器に後続する松菊里式土器が認められない地域の存在が知られるようになっ

表1　集落空間構造の変遷（李亨源作成）

集落の空間構成	早期	前期	後期	農耕地	農業の集約度	定住度	手工業生産
住居空間	■	■	■	生産空間	低	低	一般
住居＋墳墓空間（疎）		□	■	生産空間	低	低	一般
住居＋墳墓空間（密）			■	生産空間	低	低	一般
住居＋貯蔵空間			■	生産空間	低	低	一般
住居＋貯蔵＋墓域（疎）			■	生産空間	低	低	一般
住居＋貯蔵＋墓域（密）			■	生産空間	高	高	一般
住居＋貯蔵＋墓域＋儀礼空間			■	生産空間	高	高	全文
環濠		□	■				
木柵			■				

た（図2）。松菊里文化の存在が認められるのは西部地域（京畿道南部と釜山を結ぶ線の西側）で，突帯文土器→孔列文土器→松菊里式土器という変遷をこれまで同様に追うことができるが，松菊里式が認められない東部地域では，孔列文土器に後続して，漢江流域，江原道，蔚山を含む東南海岸に，それぞれ驛三洞Ⅱ類型，北漢江類型，検丹里類型という文化類型が設定されている。

今回，李亨源は松菊里式文化が認められる西部地域を，李秀鴻は検丹里類型が認められる蔚山地域を中心に報告した。まずは二人の報告をもとに韓国における青銅器時代の集落研究の現状を見てみよう。

なお無文土器時代前期の墓制を全国的に取り上げた裵眞晟の報告はあとで取り上げる。

2. 集落研究の現状

時期ごとに住居構造，炉の形や位置，伴う土器と石器の特徴，威信財的な遺物の共伴の有無などの組み合わせをもとに類型を設定する点で，李亨源と李秀鴻の方法は共通している。いわば韓国青銅器時代研究の典型的な方法である。西部地域と東部地域では見つかる遺構の種類が異なっていることがわかっている。貯蔵穴や掘立柱建物が検出され，威信財としての磨製石剣や星形石器が伴う松菊里式文化に対して，このような要素が認められないかわりに環壕をもつ集落を特徴とする検丹里類型がある。松菊里類型，検丹里類型，双方の要素が当初より認められる九州北部の弥生文化との比較が実に興味深い。

李亨源は西部地域における青銅器時代集落の時期別変遷を表１のようにまとめている。

住居以外の貯蔵穴や掘立柱建物，墳墓など遺構が豊富に見つかっているために，集落を機能が複合した統一体として捉えることができる。

早期に居住域だけで始まった青銅器時代の集落は，前期になると一部の遺跡で墳墓が認められるようになり，後期には，居住域と墓域，居住域と倉庫群，居住域，倉庫群，墓域がセットになる集落が認められるようになり，集落の機能が複合化していく状況が明らかになるという。また松菊里遺跡にように儀礼空間を伴う集落も後期には成立している。

李亨源は時期を追うごとに集落が持つ機能が複合していく理由を生産基盤の安定に伴う遊動生活から定住生活への変化に求める。焼畑を含む畑作中心の生業を持つ前期前半までは居住が安定せず移動を繰り返すと理解する。

前期後半になると比來洞遺跡のように遼寧式銅剣を副葬する墓を持つ集落が出現することから階層化が顕著化するとみる。

そして後期になると，大規模な儀礼空間を備え，青銅器生産をおこない，大規模な拠点集落といえる松菊里遺跡が出現し，周辺集落との間で従属的な関係が構築されていたと理解する。

それに対して蔚山地域は西部地域のような土器編年網がまだ整備されていないことに加えて，集落出土の遺物が少なく時期ごとの編年をくむことが難しいため，李秀鴻は前期から後期にかけてみられる以下の五つの要素の変化に注目して，Ⅰ期からⅤ期に細別した。

Ⅰ期　住居形態と規模の変化　大型長方形・細長方形から長方形・方形への変化と床面積の小形化。

Ⅱ期　炉の数の減少　複数から単数へ。

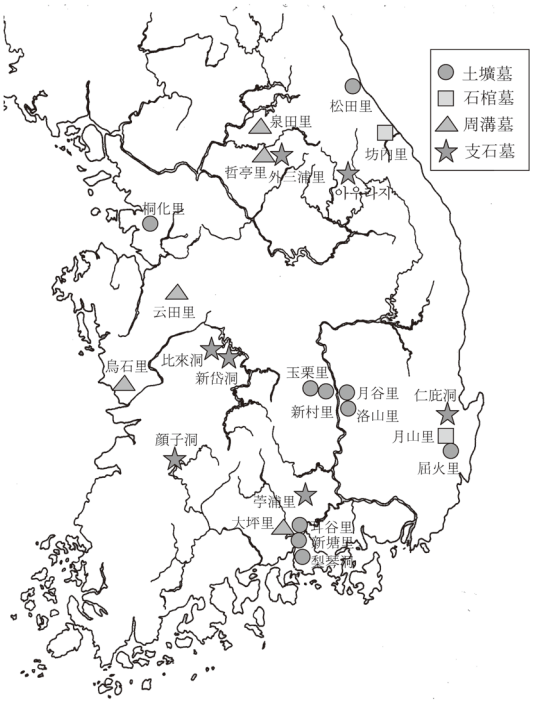


図3　韓国青銅器時代前期の墓制

Ⅲ期　土器文様の無文化・簡略化　複数の文様単位の組み合わせから単独文，無文化へ。

Ⅳ期　石鏃の形態変化　無頸式から一段頸式へ。

Ⅴ期　居住域と墳墓域が群集化　企画性や強制性の強化が背景に。

検出できる遺構の種類が少ないため李亨源のように集落を複数の機能が集まった複合体として捉えられないことから，環壕を持つ集落に複数の集落が結合した集落群をセットとして認定する。

Ⅰ期とⅡ期は2～3基の細長方形住居が丘陵の稜線上や丘陵に沿って並ぶ程度で，住居以外の遺構は認められない。Ⅲ期になると住居の数が10棟以上に増え，丘陵の稜線上を空けて広場状の空間を作るようになる。この地域に特徴的な蔚山型住居が一般化する時期である。Ⅳ期になっても集落構造は変わらないが環壕集落が出現する。細長形住居は完全に消滅し蔚山型住居のみとなる。Ⅴ期になると住居数の減少と小形化が見られるようになり，Ⅵ期にはさらに小形化して規格化する。大形住居が丘陵の頂上部近くに配置されるようになり，小形住居とセットとなる集落構造が成立する。

環壕は，①立地的に周辺からよく見えるところにあり，②環壕内部の最高位点と環壕部との比高差をもつ，傾斜が急な斜面につくられ，③環壕内の住居の数は少なく，④河川と広い平野を前面に見る交通路に立地する。

階層化は人口が急増するⅢ期には始まっていたと考えられ，Ⅳ期からⅥ期にかけて集落構造が安定化，構造化する中で進行していくものとした。

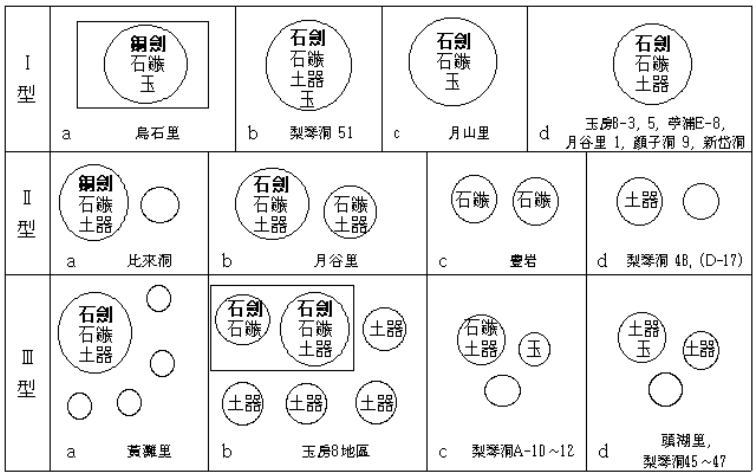


図4　副葬品と墓制のあり方

環壕を備えた集落と環壕集落を見ることができる可視圏内にある集落との複合体を，蔚山地域の拠点集落と捉える集落間関係を指摘した。環壕の機能は防御用ではなく，儀礼的な意味を持つ祭場を区画したものと考える。これらが8～10kmごとに分布し，

拠点集落の面積は直径 3 km 内外と考えられている。

3. 無文土器時代前期の墓制

裵眞晟はこれまであまり知られていなかった前期の墳墓を取り上げた。前期の墳墓には土壙墓，石棺墓，周溝墓，支石墓の四つがあり，地域的な偏りは見られない（図 3）。

副葬品は図 4 に示したように石剣や銅剣を中心に見られるが，すべての被葬者に副えられる訳ではないため階層性が存在した証拠と考えられている。Ⅰは単独墓の場合，Ⅱは二基並列の場合，Ⅲは，3 ～ 4 基が群集する場合に副葬品がどのようにはいるのかを示したものである。

無文土器時代の墳墓は前期後半ごろ，中国東北地方の遼寧地域との関係の中で農耕社会の進展を背景に造られるようになったと考えられていて，これを機に松菊里文化のような農耕文化に発展する起爆剤になったと理解されている。

前期後半のような墓制に見られる画期は，首長制社会の達成に伴う人びとの移動現象をもたらし，九州北部に向かって渡海を決意した人びとを生み出すきっかけになったという安在晧の指摘［安在晧 2009］とも符合する。

4. 青銅器時代の集落―まとめ―

李亨源が報告した京畿道や忠清道の集落構造のうち青銅器時代前期の集落構造は，福岡県の小郡市三国丘陵に展開する弥生前期～中期にかけての弥生集落構造と比較せざるを得ない印象を持った。京畿道や忠清道では住居を中心とする居住域に，徐々に貯蔵域，墳墓域，儀礼域が加わっていき複数の機能を統合した集落構造ができあがるのに対し，小郡地域で私たちが目にするのは，丘陵ごとに機能が分かれていたとしても最初から複数の機能が組み合わされて一つの有機体となっているかのようにみえることであった。実態がどうであったのか今後検証する必要がある。

李秀鴻が報告した蔚山地域の環壕をもつ集落を中核とする 3 km 内外四方の集落群は，環壕をもつ小郡市横隈山遺跡を中心とした遺跡群などと共通性する部分もあるが，それまで縄文人の生活空間でなかった平野の真ん中に忽然と現れる板付環壕集落とはかなり異なっている。李秀鴻編年のⅣ期に出現する環壕集落と，夜臼Ⅱａ式に出現する九州北部の環壕集落との時間的関係も，蔚山地域における土器編年の進展とともに明らかになってくるであろう。

このように集落構造一つをとってみても九州北部の弥生初期集落とまったく同じというものはない。まだ調査が進んでいない全羅道など韓国西南部地域の青銅器時代集落の構造と共通しているのか，九州北部で在地性が反映された集落構造が創出されたのかはまだわからない。九州北部弥生早期の集落構造がわかる遺跡が見つかっていないことも原因の一つである。

いずれにしても大きく見て九州北部における弥生前～中期の集落構造が韓国青銅器時代前期の集落構造の系譜上に連なることに間違いはない。今後の調査の進展に期待したい。

墓制については前期後半にみられた四つの墳墓形式のうち，支石墓が弥生早期の九州北部でかなり目立つ状況は，韓国の故地とそこからの渡来集団という視点で説明されることが多かったが，今のところ特定の地域に支石墓が偏って分布するといったような地域性を韓国南部で見て取れない以上，数ある韓国の墳墓形式の中から，選び取られたという説明もまだ成り立つというのが現状では

なかろうか。

副葬品に石剣が副えられるようになるのは夜臼Ⅱａ～板付Ⅰ式段階で，福岡市雑餉隈遺跡が裵眞晟分類のⅢ型に相当するとすれば，集団の内部に階層性を持つ渡来集団が含まれていたという推定も成り立つ。九州北部で始まった水田稲作の発展によって弥生社会に階層性が生まれてくるという自立発展的な考え方だけではもはや説明できない段階に来ているといえよう。

三　歴博研究報告報告会

現在の弥生時代の集落研究は，1990年代終わりの広瀬和雄による弥生都市論［広瀬1998］をめぐり，反対の立場から諸説が提示されることで展開しているといっても言いすぎではないであろう。大首長に統率され，〈政治的・経済的・宗教的センター機能が一ヶ所に集められ，それらを担った人びとが集住した場〉を都市とし，農業生産物などの物資を中心とした必需財を外部に大きく依存するとする弥生都市論に対して，首長による諸機能の統合はおこなわれておらず，むしろ竪穴住居や高床倉庫群，生産地などを単位とする複数の集団が分節している自立的な大規模農耕集落だと捉える見解とに大きく分かれている。第4セッションはそうした弥生都市論の根拠とされた首長による統合性か，その対極に位置する分節性か，という問題を，単位集団の認定問題や，視覚的に見える単位から（たとえば若林の基礎集団）考えていきませんか，という提言とからめて論じたものである。

弥生人の統合性を推し量る考古資料の中で近年，注目されているものの一つが大型掘立柱建物を象徴とする祖先祭祀論である。人びとはなぜ集まり集落をつくるのか。水田稲作という経済的な理由だけではなく祖先祭祀や出自による説明を試行する議論である。それまで人びとが住んでいなかった平野の真ん中に，突然農耕集落が現れ本格的な水田稲作が始まる場合，小規模に分散していた在来系の園耕民たちが集まって集落を造る根拠に祖先祭祀を象徴化した大形建物や墳丘墓をあてる設楽報告の南関東の事例である。

また炭素14年代測定の進展に伴い，土器型式ごとに存続幅が異なることがわかったことをふまえて同時併存遺構の認定の行く末と，精粗混ざった存続幅を単位とした集落構造相互比較に関する基本的な考え方について提言をおこなったのが第1セッションである。

以上の三つが2000年代後半以降に既存の集落論に対する疑問として新しく出された集落論のテーマとすれば，第3セッションの集落構造論はそれ以前から続く本格的な弥生集落論である。遺物や遺構など目の前の資料からまず何がいえるかを，特に生産関係に注目して集団間の関係を復原し，集落構造を認定して，弥生集落の基本的な命題に迫る堅実なテーマである。しかもその根拠は土器や石器，木製農具などの生産具に関わる資料に求められる。

共同研究員よりも会場に集まった上の世代にはこの第3セッションが一番なじみやすく，最後の総合討論でも肯定的な意見が多かったが，それ以外のセッションについては概して批判的な対応が多かったような印象を受けた。まずは遺跡や遺構，遺物の調査をふまえて帰納的に積み上げていってそれが何を意味しているのかを考えるべきだという学問姿勢を基本的なよりどころとしている批判者に対して，対極に位置するのが早い段階でテーマを設定しながら演繹的に論を積み上げていく大学など研究機関の研究者に多い学問姿勢である。

以下，各セッションの要点を総合討論での発言も含めてまとめておこう。

【第 1 セッション】集落論の基礎的な方法論について

九州北部では土器一型式の存続幅が前期末の約 30 年から前期中頃の約 170 年まで均等ではないことが明らかにされているが，こうした前提に基づいて同時併存住居を認定していけるケースはごくわずかなので，できるところはやればいいし，難しいところでは従来通りの前提で，できることをやっていくしかない，という石黒の発言にあるように，与えられた条件の中でやるしかない，という雰囲気が会場を支配していた。

確かにそれはそうで，閉ざされた一つの地域の中で比較検討するだけならそれでもよいが，東海と近畿とか九州北部といった単位で集落構造を比較検討する際には，存続幅がバラバラなものを比較してもあまり意味がないとの疑問もわく。明治初年から現代までの累積結果（約 150 年）を同時併存の遺構と認定して導き出された集落構造と，平成に入ってからの 20 年間を同時併存の遺構と認定して導き出された集落構造を，同じ土俵の上で比較検討することなどできない訳で，早急に何らかの取り決めなり前提をもうける必要があるのではないか。せめて，研究者自らが何年の存続幅で解析したのかを明示するべきではないだろうか。歴博側から具体的な提案がなされない以上，存続幅が何年とか，些末な議論に陥るだけだという会場からの発言もあったが，具体的な提案がなされていないからといって簡単に切り捨てるのではなく，前向きな姿勢を見せていただけなかったことは残念であった。その意味で将来の方向性を示すと考えられるのが濵田の報告であった。

濵田は土器一型式内における細別にもとづいて最大何棟の住居が同時併存するのかを認定しようと，大別型式と細別型式では変遷に明らかな違いが出ることが明らかにしており，その結果，妻木晩田遺跡における集落変遷像に変化をもたらしたことは大きな成果であって，会場の参加者もその違いを認識できた模様である。あくまでもある時間幅の中での累積結果を見ているのに過ぎないと濵田はいうが，少なくとも 10 年，30 年，50 年，100 年の中の累積結果という前提で自分は考えているのだ，ということを自覚し，それを明言した上で報告をおこなった濵田の姿勢こそ，本来であると考える。

そういう前提を共有し，議論した上で初めて，何かが見えてくるのであろうか。これでますます単位集団の認定が難しくなったと深刻に捉える小澤のような研究者もいたことは将来に一筋の光明も見いだすものである。

特に集落の規模を重視した議論をおこなう場合には，累積結果で判断するべきではないことから少なくとも何年幅の累積結果であることを明示した上で議論すべきであると考える。

【第 3 セッション】集落構造

集落構造を明らかにするといいながら集落構成しか議論されていないのではないかという厳しい批判が田崎から出された。構造というためには構成要素・単位の関係性が明らかにされていなければならないはずだがそうはなっていない。関係性は生産関係をもとに捉えるのがもっともやりやすく，生産関係をめぐるサブシステムやサブユニットを捉え，規模を明らかにしてそれらの関係性をもとに，次第に抽象化していきモデル化を図る。そして弥生集落論で何を目的にして，何をしたいのかを明らかにすべきであるという意見であった。

この中で住居域と墓域のセットを構成単位の一つと見なして分析の単位とすることの有効性が再認識され，そういうものが顕在化している九州北部や近畿では相互比較も可能だし，そういうものが認めにくい地域では別のレベルで考える必要があることが明らかになった。

【第4セッション】単位集団論

いわゆる単位集団と言われているものを現状では視覚的に捉えられないという小澤と，単位集団は捉えられなくても，視覚的に捉えられるものを使って弥生集落論を行おうという若林がセッションリーダーをつとめる本セッションに対しては，やはり厳しい意見が出された。

単位集団が捉えられないとか，単位集団論がいけないとか言う前に，自分がもっている構成単位のイメージを明らかにすべきとする田崎，生を支える食糧生産のあり方，生活必需品の製作・流通・消費という側面が，議論と有機的に結びついていないために，親族組織や祖先祭祀といった側面だけで統合・維持の論理を因果律的に説明するだけでは，実は何も説明していないのと同じであるという厳しい意見を述べた安藤広道がその代表である。

【第2セッション】集団統合

大久保徹也は，埋葬という行為とそれに伴う儀礼的な側面を，いとも簡単に祖先祭祀に置換してしまう発想の危険性を指摘した。縄文から古墳，古代までの長いスパンの中で日本列島社会の変化を考えていくときに，はじめて埋葬という行為に儀礼が関わりだしてくるかどうかを知ることが出来る問題だからである。弥生時代という閉ざされた時間の中だけでなく，縄文から古代までの先史時代全般の中で幅広く考えていくことが必要ではないかという指摘であった。

九州大学の田中良之や溝口孝司が進める複数のクラン，あるいはサブクランで集落や集落のまとまりのあり方を説明するモデルがはやっている現状を憂う安藤は，生の生産と再生産とリネージ・クランの形成要因との関係や，親族組織の中に生産と再生産の関係が組み込まれていないことに対する懸念が示された。

第2セッションはそうした集団統合の論理を論じるセッションである。板付遺跡や高知県田村遺跡もそれまで縄文人が住んでいなかった平野の真ん中に環壕を持つような本格的な農耕集落が突然出現する問題とも関わってくるだけに設楽の提案は重要であった。

以下，国際研究集会での議論を記録化して資料編として掲載する。

（文責　藤尾慎一郎）

参考文献

安在晧 1996：『青銅器時代集落研究』釜山大学校博士論文
安在晧 2009：「松菊里文化成立期の嶺南社会と弥生文化」（『弥生文化誕生』弥生時代の考古学2，pp.73－89，同成社）
広瀬和雄 1998：「弥生都市の成立」（『考古学研究』45－3，pp.34－56）

資料編

国際研究集会の記録

李秀鴻氏

李亨源氏

裵眞晟氏

資料編目次

第 1 部　韓国青銅器社会の集落と墓制

李 亨源　「集落構造からみた韓国中西部地域の青銅器社会」
李 秀鴻　「蔚山地域の青銅器時代集落について」
裵 眞晟　「無文土器時代前期の墓制」

第 2 部　歴博研究報告第 149 集の意義と課題

藤尾慎一郎・濵田竜彦　「集落論の基礎的な方法論について」
設楽博己・小澤佳憲　「集落の形成要因と統合原理―祭祀・経済―」
石黒立人・柴田昌児　「集落構造―平面構成と集団間序列を含む―」
小澤佳憲・若林邦彦　「単位集団論」

第 3 部　総合討論

第1部　韓国青銅器社会の集落と墓制

集落構造からみた韓国中西部地域の青銅器社会

李 亨源（韓神大学校博物館）

はじめに

皆さんこんにちは。韓国からきた李亨源と申します。藤尾先生から紹介いただきましたように私は京畿道烏山にある韓神大学校博物館に勤務しております。今日私は韓国青銅器時代の集落についてお話ししたいと思います。ここ10年間，韓国では大規模な開発工事に伴って多くの発掘調査が行われましたが，その中でもっとも活発におこなわれたのが青銅器時代遺跡の調査です。まず最近の発掘成果をもとに集落構造について検討し，集落内部の社会組織について報告したいと思います。

韓国の中西部地域は行政区域ではソウルを含む京畿道と忠清道地域になります。皆さんもよくご存じの松菊里遺跡はここにあります。これまで松菊里文化が形成された地域として忠清道と全羅道が注目されてきましたが，ここ数年で京畿道南部地域から青銅器時代の資料がたくさん見つかったことを受けて，京畿道南部地域も松菊里文化の起源地の一つとして考えられるようになりました。もちろん松菊里文化が盛行して発展する中心地域は忠清道，全羅道，慶尚道地域であることに変わりはありません。

皆さんの理解の前提となる韓国青銅器時代の時期区分について簡単に紹介したあと，集落の話へと続けていきましょう。

Ⅰ　青銅器時代の時期区分と集落の概要

最近は，1996年に安在晧が提唱した青銅器時代という名称を用い，早期，前期，後期に区分する傾向が強くなっています。早期の住居構造は方形あるいは長方形で，囲石式炉跡をもちます（図1）。土器は刻目突帯文土器が主体で，新石器時代の影響を残す最末期の櫛文土器が共伴しています。石器には石刀や石鏃などがありますが，次の時期と比べ磨製石剣の出土例がまだないことに大きな特徴があります。

前期は可楽洞類型と驛三洞・欣岩里類型の二者があります。可楽洞類型の住居構造は長方形あるいは細長方形で，囲石式炉跡をもちます（図2）。礎石が設置されることも特徴といえるでしょう。土器は二重口縁の短斜線文をもつ可楽洞式土器が主流です。この時期から磨製石剣が出現し墓造りが始まります。驛三洞・欣岩里類型の住居には囲石式炉跡が確認できず，土坑型や無施設式炉跡が確認されています（図3）。礎石もありません。土器の文様は孔列文と口唇刻目文が中心をなします。二重口縁短斜線文と孔列文が結合した土器があることも重要な特徴です。

後期は松菊里類型です。住居構造は方形の休岩式と円形の松菊里式があります（図4）。中西部地域では楕円形竪穴の中に柱穴がある場合が多いですが，慶尚道地域や日本の九州地域には中心柱穴が楕円形竪穴の外側にある場合の方が多いといえます。石器には有溝石斧，三角形石刀，一段柄式石剣，一段頸式石鏃があります。

図5は京畿道地域を中心にした編年図です。早期の実年代は紀元前1300～1200年頃，前期は紀元前1200～900年頃と考えています。後期は紀元前900年から粘土帯土器が出現する紀元前500年頃までにあたります。もちろん地域によって差がありますが，私は早期の突帯文土器が前期まで共存していたと考えています。松菊里類型と係わる物質文化も紀元前500年以後まである程度存続しています。

Ⅱ　青銅器時代の集落

1　早期

今日は青銅器時代の前期集落と後期集落を中心に報告します。早期の集落の調査は最近始まったばかりで，報告された例も少なく本格的な研究をおこなうことが難しい状況です。

まず青銅器時代早期のもっとも代表的な遺跡である渼沙里遺跡ですが，住居址が4棟確認されました（図6）。床面積はかなり大きいほうで，50㎡，あるいは80㎡以上の住居址も確認されています。

加平大成里遺跡の住居址には床面に板石を置く囲石

図1　早期：渼沙里類型

図2　前期：可樂洞類型

図3　前期：驛三洞，欣岩里類型

図4　後期：松菊里類型

に1990年代中頃に調査されています。

この集落の一部の住居址は非常に長い細長方形の形態をもつものがあります（図8）。長さは10ｍ以上が多いですが，20ｍ以上のものもあります。住居址の内部は炉跡が複数設置されていることから，最初から細長い形態に作られた住居も存在したと思いますが，構成人員の増加にあわせて住居址を拡張しながらますます細長くなったと考えられます。

これまでこのような大型住居址が確認されると，集落内の共同集会所や共同作業場と考えられましたが，今は最初から大型で作られた普通の居住用の家屋と考えられています。このことから青銅器時代前期には一つの家に多くの人が住んでいたと考えられます。

京畿道泉川里遺跡の遺構配置図です（図9）。7号住居址は長さが約30ｍある大型住居址です。出土した遺物の量も多いですが，図9は石器を中心に作った図面です。写真は石器と玉製品の写真です。右の写真は星型石斧ですが，集落内でのリーダーの権威を象徴するものではないでしょうか。

大田官坪洞遺跡は非常に広い範囲の調査をおこないましたが，前期の前半から後半にかけての住居址が確認されました（図10）。墓は確認されていないので，やはり住居空間だけで構成された集落と思います。規模がもっとも大きい住居址からは磨製石剣が出土しているので他の住居址より優位であったと考えられます。

大田老隠洞遺跡も住居空間だけで構成される遺跡です（図11）。丘陵全体が調査され，他の地域も調査されましたが，住居址だけが確認されました。青銅器時代前期の可楽洞式住居址で，囲石式炉跡とともに礎石が設置されていました。

図5　京畿道・忠清道の青銅器時代時期区分

式炉跡が設置されていました。出土した土器は刻目突帯文土器と新石器時代の影響を残す最終末の櫛文土器でした。

2　前期

それでは本格的に青銅器時代前期と後期の集落についてみてみましょう。

前期集落のもっとも大きな特徴の一つは墓が少ないということです。

天安白石洞遺跡では約200棟の住居址が確認されましたが，墓は確認されませんでした（図7）。相当広い範囲を調査しましたが墓が確認されなかったので，住居空間だけで構成された集落とみてもよさそうです。遺跡の写真2をみると，中央の部分が2006年と2007年に調査された地点，左側の工場がみえる部分はすで

図6　河南・渼沙里集落

図8　白石洞集落の細長方形住居跡

図7　天安・白石洞集落

図9　華城・泉川里集落

図10　大田・官坪洞集落

図11　大田・老隠洞集落

図12　青原・大栗里集落
（現状で最古の環濠集落）

大栗里遺跡は現状では韓半島でもっとも古い環濠集落です（図12）。前期前半に比定された土器が出土し，炭素14年代測定による実年代も紀元前13～12世紀のものが中心です。環濠は内環濠と外環濠があり，内環濠の内部の丘陵の頂上部にはもっとも大きい2棟の大型住居址があります。内環濠と外環濠の間には中小型住居址が分布しています。

この遺跡は調査が限定的だったので集落全体の姿がよくわかりませんが，集落構造を考慮すると近隣地域に墳墓空間が存在する可能性が高いと考えられます。環濠は前期前半のものですが，現在までの調査成果からみる限りは前期後半，あるいは後期の松菊里文化に盛行する環濠集落とは直接的に結びつきません。例外的で，独特な遺跡と理解していますが，現段階では可楽洞式土器を中心にする可楽洞類型の起源地と推定されている西北韓地域や鴨緑江流域の住民が移住して出来た村と推定しています。

次に青銅器時代の集落では非常に例が少ない，墓が確認された集落を中心に報告します。

新岱洞遺跡では北側で住居群が，南側で支石墓1基と石棺墓1基からなる墓群が確認されました（図13）。写真では左側が住居空間で右側が墳墓空間です。あとでまた説明しますが，中西部地域の青銅器時代の集落はほとんどが丘陵に立地していて，丘陵と丘陵の間を境界に住居空間と墳墓空間に分ける事例が確認できます。墓は石槨の埋葬主体部を持つ支石墓と推定していますが，なかから土器および磨製石剣と磨製石鏃が出土しました。

写真1は新岱洞遺跡から南側に約4km離れた比来洞遺跡の支石墓から出土した遺物で，有名な遼寧式銅剣です。現在，この銅剣をめぐっては研究者の間に二つの見方があります。一つは青銅器時代前期後半に銅剣を副葬した比来洞集団と石剣を副葬した新岱洞集団の間に位相差があったとみる見方。もう一つは時期差とする見方です。つまり新岱洞遺跡の支石墓が比来洞遺跡の支石墓より若干古いとみる立場です。私の個人的な考えは後者であり，新岱洞支石墓は前期中頃，比来洞支石墓は前期後半とみています。

次は黄灘里遺跡です（図14）。左側の丘陵で住居址が確認され，反対側の丘陵で墓が確認されました。住居址は囲石式炉跡が設置された可楽洞式住居址であり，可楽洞類型段階の中でもっとも新しい前期後半に比定されます。墓から出土した磨製石剣は二段柄式石剣から一段柄式石剣に移行する過渡期的な型式にあたり，前期後半の墓の性格と考えられます。前期後半になっても墓の数は多くはなく，住居空間と墳墓空間がある程度分離される様相がみられます。計算したことはありませんが，青銅器時代前期の集落の中でも5%以内で墓が確認され，余りの95%は住居址だけで成り立った集落です。

云田里遺跡は道路区間に対する発掘調査であったため調査されたのは狭い範囲だけです（図15）。住居址を中心にした分布の広がりが2～3ヶ所あり，墓は1基だけ確認されました。住居址と墳墓から出た土器の型式と文様が類似していることをみれば，同時期に住居空間と墳墓空間が分かれて存在していたことがわかります。ここで確認されたような周溝をもつ石棺墓は青銅器時代前期後半～後期前半の一部の地域で確認されています。

3　後期

後期の集落で注目しなければならない施設としては掘立柱建物，貯蔵穴，井戸などがあります。図16は韓半島の中西部地域から確認された掘立柱建物です。6，7，8番は慶尚道地域から確認された大型掘立柱建物です。図面にはありませんが，松菊里遺跡でもこのような形態で規模が大きい掘立柱建物が確認されています。さらに日本の研究者が注目している棟持柱建物も確認できます。図17が日本にある棟持柱建物に関する資料および絵画からわかる棟持柱建物の関連資料です。

貯蔵穴は前期にも少し確認されていますが，群集するようになるのはやはり松菊里段階からです（図18）。貯蔵穴の性格については韓国と日本の研究者の間で議論になっていますが，重要な点は穀物を貯蔵したのかしなかったのかという問題です。日本でも炭化米が確認された例が多いですが，このような様相は中国やイギリスなどいろいろな地域で確認できます。私は基本的に韓国の松菊里段階の貯蔵穴も，穀物をはじめとしたさまざまな農耕生産物を貯蔵する施設であったと考えています。

青銅器時代の井戸として確実なものは論山馬田里遺跡の木造井戸と大邱東川洞遺跡で確認された石造井戸しかありませんでしたが（図19），木造や石造ではなくても普通の竪穴形態で作られた井戸もかなりあったと考えられますので，今後は発掘調査者が井戸に対する関心を持って調査するべきだと思います。日本の弥生時代の井戸集成で単純な竪穴式井戸があることを知り参考になりました。

図13　大田・新垈洞集落

図14　青原・黄灘里集落

図15　天安・云田里集落

図16　中西部地域の地上建物（掘立柱建物）

図18　青銅器時代の貯蔵穴

図17　弥生土器の絵画土器

図19　青銅器時代の井戸

図20　清原・雙清里遺跡

図21　天安・大興里遺跡

図22　大田・伏龍洞遺跡

図23　大田・大井洞遺跡

図24　舒川・梨寺里, 月岐里遺跡

つぎに後期集落の空間構成についてです。清原雙清里遺跡のいちばん上の部分では多くの円形竪穴が確認され貯蔵空間に当たります。黒い点で示したのが松菊里式住居址です（図20）。

天安大興里遺跡（図21）と大田伏龍洞遺跡（図22）でも大規模な竪穴群がみられますが，住居空間と貯蔵空間だけで構成された集落なのか，墳墓空間もあったのかどうかはまだわかりません。

大田大井洞遺跡は開発工事によって二つの丘陵とその間の谷部が全部発掘調査されました（図23）。住居空間の中心部は確認されませんでしたが，北側の丘陵に松菊里式住居址が多いので，ここが住居空間と考えられます。また南側の丘陵から約300ｍ離れた場所から支石墓や石棺墓で構成された墳墓空間が確認されています。谷部から農耕地が確認されることを期待しましたが残念ながら見つけることは出来ませんでした。もともとあったのかなかったのかはよくわかりません。

この遺跡（図24）も前の遺跡と同様の空間構造をもちます。北側の丘陵で支石墓が群集した墳墓空間が，南側の丘陵で環濠と住居址で構成された集落が確認されました。やはり谷部を間に置いて住居空間と墳墓空間が分離されている状況がみられます。

舒川烏石里遺跡（図25）でも北側に住居址が中心をなす生活空間があり，南側には墓を中心にした墳墓空間があり，両者から構成された集落と考えられます。

公州山儀里遺跡では真ん中に墳墓空間があり南側に住居空間があります（図26）。住居空間はさらに広がっている可能性があります。もっとも北側の丘陵には41基の貯蔵穴が分布しています。住居空間，貯蔵空間，墳墓空間の三つから構成された青銅器時代後期の代表的な集落といえます。この遺跡を理解するため日本の弥生時代の貯蔵空間を例に取り上げて説明してみます。

福岡県光岡長尾遺跡では直径約50ｍの環濠が見つかっていますが，環濠内部からは貯蔵穴だけが確認され，環濠の両側に出入り口があります（図27）。出入り口にも小さな溝がありますが，おそらく獣害を減らすための施設と考えられます。

貯蔵空間とセットとなる住居空間がどこかにあると思いますが，おそらく100ｍ～200ｍ以上離れた他の丘陵に墳墓空間や住居空間が存在したと予想しています。そうするとなぜこのように不便な集落構造をとったのかが問題になります。当時の山地や丘陵の植生についてわかっていることは多くないですが，おそらく森だったと思います。森の部分は他の人びとからはみえない効果があるため，森の存在から当時の農耕集団間の緊張や葛藤関係を予想することが出来るのではないでしょうか。

実際には住居空間の近くに貯蔵空間を備えるのが効率的ですが，このように離れている遺跡を見ると，他の集団が侵入する場合，住居空間とは別の場所に貯蔵空間を備えた方が，他の集団の略奪から食糧を保護するうえでより効率的であるといえます。皆さんの中で光岡長尾遺跡のような事例があれば，ぜひ教えてください。この遺跡の周辺環境とその後，住居空間と墳墓空間が確認されたのかどうかについてもお願いします。

論山麻田里遺跡では，もっとも北側に貯蔵空間，南側の真ん中部分に墳墓空間があります（図28）。こちらに住居空間があると予想されますが未調査で，わずか1棟の住居址が見つかっただけです。こちらの前では水田と畑が確認されました。中西部地域の後期集落の重要な特徴の一つとして，集落の北側に貯蔵空間，真ん中に墳墓空間，南側に住居空間というセットもつ集落構成として注目されます。

保寧寛倉里遺跡はよくご存じだと思います（図29）。丘陵の全体が発掘調査され，D・E・F地区では住居址のみが，A地区では墓のみが確認されました。この集落の中心であるB地区では住居址をはじめ貯蔵穴，掘立柱建物などが確認され，さまざまな複合機能を持つ住居中心の複合空間とみられます。

住居址の規模や立地をみると，普通の住居址の面積は10㎡～20㎡程度ですが，黒い色で示した住居址は40㎡以上の超大型住居址です。このような超大型住居址はB地区を中心に造成され，D・E・F地区では超大型住居址より小さい1棟の大型住居址と中小型住居址が確認されています。本来なら時期ごとに分けて考えるべきですが，集落全体の性格を理解するのは無理ではないと考えられます。

墳墓空間には1基の支石墓があり，周辺に石棺墓が分布しています。支石墓の近くから磨製石剣が確認されています。

扶餘松菊里遺跡は現在も発掘調査が続いています（図30）。この部分を集落の防御木柵のラインとみています。木柵を破壊して造成された細長方形住居址と円形住居址もあります。木柵段階の住居址は方形ですが，木柵のこの部分で大型掘立柱建物が確認されました。立地と形態からみて儀礼空間と考えられます。南側に有名な遼寧式銅剣を出土した石棺墓があります。

松菊里遺跡は全体的な発掘調査が行なわれていない

図25　舒川・烏石里遺跡

図26　公州・山儀里遺跡

図27　宗像市光岡長尾遺跡

図28　論山・麻田里遺跡

図29　保寧・寛倉里遺跡

図30　扶余・松菊里遺跡

図31　保寧寛倉里集落の構造と組織体系

ため，まだ大規模の貯蔵空間が確認されていませんが，今後必ず確認されると考えています。また青銅器時代後期の集落の中で，大型集落の中心集落はこのような大規模の儀礼空間を備えるのが特徴です。こちらに大型掘立柱建物があり，長さ27m，幅4mです。さらにこの建物を囲む小さい溝を掘ってそこに木柵を設置した空間区画の様相が確認されました。

Ⅲ　まとめ

表1は以上述べてきた集落構成の変化，つまり早期と前期の集落から後期の集落へ移行する過程を総合的に示したものです。早期の集落には住居空間のみ確認され，墳墓空間は確認されませんでした。前期はほとんどが住居空間ですが，一部の遺跡には墳墓空間も確認されました。後期には住居空間のみで構成された集落もありますが，住居－墳墓，住居－貯蔵，住居－貯蔵－墳墓のように機能が複合した集落が出現することが特徴です。特に後期集落の中で中心集落，あるいは拠点集落といえる松菊里集落のような遺跡では大規模の儀礼空間が存在するのが大きな特徴といえます。

後期に墳墓空間と貯蔵空間が活性化され，前期に墳墓空間がよくみられない様相は生業と係わる農耕のあり方とも関係すると考えられます。前期までは焼畑を含む畑作を中心とした生産経済であったため，定住度は低かったと考えられます。おそらく前期には集落（集団）の移動が頻繁だったと考えられます。

前期の集落の内部構造は，集落のリーダーとその家族から構成される上位階層とその他の一般階層にわかれる2段ぐらいの階層構造だったと考えられます。特に前期後半に銅剣を副葬する集落が確認されているので前期後半から階層化が明らかになると考えられます。写真1は有名な比来洞遺跡出土の遼寧式銅剣です。

階層の問題を考古学的に証明するのは非常に難しいですが，青銅器時代後期の大規模集落になると，上位・中位・下位の三つの階層に分けられると予想しています（図31）。

写真2は松菊里集落の首長墓と考えられます。前述したとおり松菊里集落では儀礼空間の存在が注目されます。青銅器生産と直接係わる銅斧の鋳型も確認されています。中心集落，あるいは拠点集落の典型的な姿をもっともよくみせてくれる遺跡といえます。図30には先ほど申し上げた松菊里遺跡の儀礼空間が描かれています。

私は集落と集落間の関係についても深い関心を持っています。中心集落と周辺集落との関係を理解するためには生産と消費，流通の問題を検討することがもっとも重要だと思いますが，残念ながら韓国では産地推定をはじめ考古学的にそのような関係を証明できる資料は多くはありません。

日本では拠点集落とよばれていますが，中心集落の場合，上位集落と一般集落との関係については，直接的な上下関係，つまり従属的な関係が形成されていたと想定したいと思います。しかし周辺集落とは間接的な互恵関係で結び付けられていたのではないかと考えています。

最後に今後の課題について簡単にふれておきます。集落論は編年研究と密接な関係にあります。韓半島中西部地域の様相を，環濠集落が発達した嶺南地域や，支石墓がもっとも密集し多くの青銅器が確認された湖南地域と比較したいと考えています。また日本との関係においても韓国の青銅器時代と併行する縄文晩期～弥生早期，前期の集落との比較もおこなってみたい。さらに非常に難しいのですが，共同体の組織原理やその中における個人の役割に対しても関心を持って研究したいと考えています。

表1　集落空間構造の変遷

写真1　比來洞1号支石墓と副葬品

写真2　松菊里遺跡石棺と副葬品

第1部　한국 청동기 사회취락과 무덤

聚落構造를 통해 본 韓國 中西部地域의 靑銅器社會

李 亨源(韓神大學校博物館 學藝硏究士)

들어가며

여러분 반갑습니다. 한국에서 온 이형원이라고 합니다. 후지오 선생님으로부터 소개를 받았습니다만, 저는 경기도 오산에 있는 한신대학교 박물관에 근무하고 있습니다. 오늘 제가 여러분께 말씀드릴 내용은 한국의 청동기시대 취락에 대한 것입니다. 최근 10여년간 한국에서는 대규모 개발공사에 수반해서 발굴조사가 많이 이루어졌는데 그 중에서 특히 청동기시대 유적에 대한 조사가 가장 활발히 이루어졌습니다. 그래서 먼저 최근의 발굴성과를 토대로 취락의 구조에 대해서 살펴보고, 그 다음에 취락 내부의 사회조직에 대해서 간단히 말씀드리도록 하겠습니다. 우선 제가 검토 대상으로 하는 연구지역을 살펴 보겠습니다. 이 부분이 서울이 되겠습니다.

제가 근무하고 있는 한신대학교가 이 부분이 되겠습니다. 한국의 중서부지역이 되겠는데요, 행정구역 상으로는 서울, 경기도를 비롯해서 충청도지역에 해당합니다. 여러분들도 익히 알고 계시겠지만, 부여 송국리유적이 이 부분입니다. 참고로, 지금까지 송국리문화의 형성지역으로 대부분 충청도와 전라도를 주목하고 있었습니다만, 최근 몇 년 동안 경기도 남부지역에서 청동기시대의 자료가 많이 확인되면서 경기 남부지역도 송국리문화의 기원지 중의 하나로 거론되고 있는 상황입니다. 물론, 송국리문화가 성행하고 발전한 지역은 충청도, 전라도, 경상도지역이 되겠습니다. 먼저 여러분들의 이해를 돕기 위해 한국 청동기시대의 시기구분에 대해서 간단한 소개를 하고 취락에 대한 말씀을 드리겠습니다.

Ⅰ 청동기시대의 시기구분과 취락의 개요

최근에 동국대학교의 안재호 선생님의 제안에 의해서 청동기시대를 조기, 전기, 후기로 구분하는 경향이 강합니다. 조기가 되겠습니다만, 주거지 구조는 방형 또는 장방형이며, 석상위석식노지가 있는 형태가 되겠습니다(도1). 토기는 각목돌대문토기가 핵심적인 것이며 신석기시대의 흔적이 남아 있는 말기 즐문토기가 공반하고 있습니다. 석기는 석도나 석촉 등이 있습니다만, 다음 시기와 비교할 때 가장 중요한 점은 마제석검이 출토된 예가 아직 없다는 것입니다. 그리고 무덤도 확인된 예가 없습니다.

다음으로 청동기시대 전기의 가락동유형의 양상입니다. 주거지 구조는 장방형 또는 세장방형이 중심을 이루면서 노지는 위석식노지이며(도2), 또 하나의 중요한 특징은 초석이 설치된다는 것입니다. 그리고 토기는 이중구연의 단사선문이 있는 가락동식토기가 주를 이루고 있습니다. 이와 함께 청동기시대 전기부터 마제석검이 등장하고 무덤이 만들어지기 시작합니다. 지금 설명한 가락동유형의 양상과 더불어 청동기시대 전기에는 역삼동·흔암리 유형이 공존하고 있습니다. 주거지 구조에서는 위석식노지는 확인되지 않고, 주거지 바닥면에 토광형 또는 무시설 노지가 확인되고 있습니다(도3). 초석도 없습니다. 토기의 문양은 공렬문과 구순각목문이 중심을 이루고 있습니다. 이중구연 단사선문과 공렬문이 결합된 토기도 핵심 요소입니다.

다음으로는 후기의 송국리유형인데요, 여러분들이 잘 알고 계시는 주거지의 특징은 방형의 휴암리식, 원형의 송국리식 주거지가 있습니다(도4). 물론 중서부 지역에서는 이 타원형 수혈 안에 기둥구멍이 있는 경우가 많지만, 경상도지역이라든가 일본의 구주지역에는 중심기둥구멍이 타원형수혈의 밖에 있는 경우가 많습니다. 그 다음으로 유구석부, 삼각형석도, 일단병식석검, 일단경식석촉을 특징으로 하고 있습니다.

지금 보시는 도면(도5)은 경기도지역을 중심으로 한 편년표입니다. 절대연대상으로는 기원전 1300년에서 1200년 정도가 조기에 해당하며, 전기는 기원전 1200년에서 900년 사이로 보고 있습니다.

후기는 기원전 900년부터 점토대토기가 등장하는 기원전 500년경까지가 되겠습니다. 물론 지역에 따라 차이가 있겠지만, 저는 조기의 돌대문토기가 전기까지 같이 공존한 것으로 생각하고 있습니다. 그 다음 송국리유형과 관련된 물질문화도 기원전 500년 이후에도 어느 정도 지속되고 있습니다. 오늘 발표할 내용의 대부분은 청동기시대의 전기 취락과 후기 취락이 되겠습니다만, 조기의 자료는 최근, 조사는 이루어졌지만 아직 조사보고서가 발간된 예가 적어서 본격적으로 연구하기는 어려운 실정입니다.

Ⅱ 청동기시대의 취락

1 조기

먼저, 청동기시대 조기의 가장 대표적인 유적으로 하남 미사리유적입니다만, 주거지는 4동이 확인되었습니다(도6). 규모는 상당히 큰 편으로, 50㎡ 또는 80㎡ 이상 되는 것들이 확인되었습니다. 또 다른 조기의 취락으로 북한강변의 가평 대성리 취락이 있습니다. 유적이 조사된 곳은 이 부분입니다. 앞서 설명한 돌을 돌리고 바닥에 판석을 깐 노지의 형태를 취하고 있습니다. 토기는 각목돌대문토기이며, 신석기시대 토기의 영향이 남아 있는 말기 즐문토기가 되겠습니다.

2 전기

그럼 본격적으로 청동기시대 전기와 후기의 취락에 대해서 설명드리겠습니다.

전기 취락의 가장 큰 특징 중의 하나는 무덤의 수가 그다지 많지 않다는 것입니다. 이것은 천안에 있는 백석동유적입니다. 시기차가 어느 정도 있는 주거지가 200동 정도 확인되었습니다만, 무덤은 전혀 확인되지 않았습니다(도7의 上). 그래서 상당히 넓은 범위의 조사가 이루어졌지만, 무덤이 확인되지 않은 것으로 보아 주거공간만으로 구성된 취락으로 보아도 좋을 것 같습니다. 사진으로 본 모습입니다. 이 부분이 2006년과 2007년에 조사가 이루어진 부분이며, 공단이 들어선 부분은 1990년대 중반에 조사가 이루어져, 이미 개발된 상태의 모습입니다. 이 취락의 주거지 일부분은 보시는 도면과 같이 상당히 긴 세장방형의 모습을 취하고 있습니다(도8). 주거지의 길이는 10m이상 되는 것이 많습니다만, 20m 이상 되는 것도 있습니다. 주거지 내부에는 노지가 복수로 많이 설치되어 있는 것을 볼 수 있습니다. 물론 처음부터 세장한 모습의 형태로 설치된 것도 있었겠지만, 세대구성원이 늘어남에 따라 주거규모를 확장해 가면서 세장한 모습으로 넓어진 것들도 많이 있습니다. 사실 처음에는 이러한 대형주거지가 나왔을 때 취락 내에서 공공집회소라든가 공동작업장으로 생각한 견해도 있었지만, 지금은 일반적으로 특별한 기능보다는 처음부터 대형 주거로 축조된 보통의 거주용 가옥으로 생각하고 있습니다. 역시 청동기시대 전기에는 한 집안에서 비교적 많은 사람들이 살았던 것 같습니다.

다음으로 화성 천천리유적입니다. 경기도에 위치한 유적이며, 지금 가리키고 있는 부분이 조사된 부분입니다. 이것이 유구 배치도인데요(도9), 7호 주거지는 길이가 30m나 되는 대형주거지입니다. 출토된 유물의 양도 굉장히 많은데, 이 중에서 석기를 중심으로 도면을 만든 것입니다. 석기와 옥 제품의 사진입니다. 오른쪽 사진은 성형석부인데, 취락 내에서 리더의 권위를 상징하는 것이 아닌가 생각합니다.

다음은 대전에 있는 관평동유적입니다. 이 유적도 상당히 넓은 범위에 걸쳐 조사되었지만, 주거지만 확인되었습니다(도10). 물론 이 가운데에는 전기의 전반, 중반, 후반에 걸친 다양한 시기의 주거지가 확인되었습니다. 동시병존의 문제를 고려하더라도 이 유적 역시 무덤이 확인되지 않은 점에서 주거공간만으로 구성된 취락의 특징을 잘 보여주고 있습니다. 이 가운데 이 부분을 확대해서 본 모습인데요, 이 중에서도 규모가 가장 큰 주거지에서 나온 석기의 양상이 다른 주거지보다 우위에 있었던 것 같습니다. 석기 가운데에서도 마제석검을 주목하고 싶습니다.

다음도 주거공간만으로 구성된 대전의 노은동유적입니다(도11). 이 부분도 구릉 전체가 조사된 상태인데, 역시 택지개발지구에 대한 발굴조사였기 때문에 다른 지역도 조사가 이루어진 상태입니다. 여기에서도 주거지만 확인되었습니다. 이것은 앞서 설명드린 청동기시대 전기의 가락동식주거지가 되겠습니다. 위석식노지와 더불어 초석이 설치된 양상을 볼 수 있습니다.

다음으로 청원 대율리유적입니다. 지금까지 한반도에서 확인된 환호 취락 가운데에서 가장 이른 시기로 편년되는 환호가 되겠습니다(도12). 토기의 형식에서도 전기전반으로 볼 수 있는 토기가 확인되었고, 절대연대 측정치도 기원전 13~12세기의

것들이 많이 있습니다. 환호는 내환호와 외환호로 이루어져 있는데, 이 부분은 파괴가 되어 확인할 수가 없었습니다. 내환호의 내부에 있는 구릉의 정상부에는 규모가 가장 큰 대형의 주거지 2동이 있습니다. 내환호와 외환호의 사이에 중소형 주거지가 분포하고 있습니다. 이 유적은 조사 범위가 상당히 제한적이었기 때문에 취락의 전체모습을 알 수는 없지만, 취락의 구조를 염두에 둔다면 인근 지역에 분묘공간이 존재할 가능성이 높다고 생각합니다. 어쨌든 이 유적의 환호는 전기전반인데, 현재까지의 조사성과만으로 본다면 전기후반, 또는 후기의 송국리문화에서 성행하는 환호취락과는 아직까지 연결고리가 없는 것 같습니다. 아무튼, 상당히 예외적이고 독특한 유적으로 이해할 수 있는데요, 현 단계에서는 가락동식토기가 중심을 이루는 가락동유형의 기원지로 추정하고 있는 서북한지역이나 압록강유역의 주민들이 이주한 것이 아닌가 하는 추정을 하고 있습니다.

다음에는 청동기시대 전기 취락에서 매우 적은 사례에 불과합니다만, 무덤이 확인된 취락을 중심으로 말씀드리겠습니다. 이 유적은 대전 신대동유적입니다. 북쪽부분에서 주거군이 확인되었고, 남쪽부분에서 지석묘 1기와 석관묘 1기가 확인되었습니다(도 13). 사진상으로 보면 왼쪽 부분이 주거공간이며, 오른쪽 부분이 분묘공간입니다. 나중에 설명드리겠지만, 중서부지역의 청동기시대 취락은 대부분 구릉에 입지하고 있는데, 물론 후기취락도 마찬가지입니다만, 조그마한 구릉과 구릉 사이를 경계로 하여 주거공간과 분묘공간으로 나뉘는 예를 확인할 수 있습니다.

무덤 같은 경우에는 석곽의 매장 주체부를 가진 고인돌로 추정하고 있는데요, 여기서 출토된 토기와 마제석검, 마제석촉이 되겠습니다.

그 다음은 신대동 유적에서 남쪽으로 4km 정도 떨어진 곳에서 확인된 비래동 지석묘에서 출토된 유물입니다. 가장 오른쪽에 있는 것이 유명한 비래동의 비파형동검입니다. 현재 연구자 간에 두가지 견해가 나뉘고 있는데, 하나는 청동기시대 전기후반에 동검을 부장한 비래동집단과 마제석검을 부장한 신대동집단 간에 위상 차이가 있었다는 견해가 있으며, 또 하나는 신대동 지석묘가 비래동 지석묘보다는 시기가 약간 빠르다는 것을 감안하여 시기차가 있는 것으로 보는 견해가 있습니다. 저의 개인적은 생각은 후자쪽으로 신대동 지석묘의 경우는 전기중반으로 보고 있으며, 비래동 지석묘를 전기후반으로 보고 있습니다.

다음은 청원 황탄리유적입니다. 전체 지형도입니다(도 14). 왼쪽 구릉에서 주거지가 확인되었으며, 반대편 구릉에서 무덤이 확인되었습니다. 주거지 역시 위석식노지가 설치된 가락동식 주거지이며, 가락동유형 단계 중에서 가장 늦은 전기후반의 주거지입니다. 무덤에서 확인된 마제석검의 양상에서도 이단병식석검에서 일단병식석검으로 이행되는 과도기적인 석검의 형식으로, 전기후반 무덤의 성격으로 볼 수 있습니다. 청동기시대 전기후반이 되면 무덤의 수는 많지 않지만, 취락 내에서 주거공간과 분묘공간이 어느 정도 분리되는 모습을 볼 수 있습니다. 전체적으로 통계를 내 본 것은 아니지만, 청동기시대 전기 취락 가운데서 극히 일부, 아무리 높게 잡아도 5% 이내 정도의 취락에서만 무덤이 확인되었고, 나머지 95%는 주거지로만 이루어진 취락이 되겠습니다.

한가지 예가 더 있는데, 천안의 운전리유적입니다. 도로구간에 대한 조사였기 때문에 좁은 범위가 될 수 밖에 없었습니다만, 주거지가 중심을 이루는 곳이 두 세군데 있고, 이 가운데 무덤은 단 1기만 확인되었습니다(도 15). 토기의 형식으로 본다면, 주거지와 분묘의 형식과 문양이 비슷한 것으로 본다면, 동시기에 주거공간, 분묘공간으로 나뉘어져 있었던 것을 알 수 있습니다. 여기서 확인된 주구가 있는 석관묘는 청동기시대 전기후반에서 후기전반의 일부 지역에서 확인되고 있습니다.

3 후기

다음부터는 송국리유형에 해당하는 후기취락입니다. 후기의 취락에서 주목을 해야할 시설은 굴립주건물과 저장공, 우물이 있다고 생각합니다. 도면 16에 있는 것들이 한반도 중서부지역에서 확인된 굴립주건물의 형태입니다. 아래의 6, 7, 8번은 경상도지역에서 확인된 대형의 굴립주건물입니다. 도면에는 없습니다만, 송국리유적에서 이런 형태의 규모가 큰 굴립주건물이 확인된 예가 있는데, 뒤에서 다시 설명드리겠습니다. 그리고 야요이취락에서 일본의 연구자들이 주목하고 있는 동지주건물의 양상도 중서부지역에서 확인할 수 있습니다. 이것이 일본에 있는 동지주건물에 대한 자료와 회화에서 알 수 있는 동지주건물에 대한 자료입니다(도 17).

또 하나의 주목되는 시설로서는 저장공을 들 수 있습니다. 물론 전기에도 조금씩 확인된 예도

있습니다만, 이렇게 군집형태로 이루어지는 것은 역시 송국리단계에서 들어서 성행하게 된 것 같습니다(도18). 저장공의 성격에 대해서는 한국과 일본의 연구자들 사이에서 논쟁이 있는데, 가장 중요한 논점으로는 곡물을 저장했는가 아닌가의 문제입니다. 일본에서도 탄화미가 많이 확인된 예가 있는데, 이러한 양상은 일본, 중국, 영국 등 여러 곳에서도 확인할 수 있는 양상입니다. 그래서 저는 기본적으로 한국의 송국리단계의 저장공도 곡물을 비롯한 여러 가지 농경 생산물을 저장했을 것이라고 생각합니다.

또 하나는 우물이 되겠습니다. 현재까지 청동기시대의 우물로서 그 존재가 확실한 것은 논산 마전리유적의 목조 우물과 대구 동천동유적에서 확인된 석조 우물밖에 없습니다(도19). 사실 우물에 대한 관심이 적었는데, 이 두 사례의 목조, 석조 우물의 양상을 보았을 때, 목조와 석조가 아니더라도 일반적인 수혈형태로 만든 우물도 많이 있었을 것으로 추측됩니다. 그래서 지금부터는 조사자들이 우물에 관심을 가지고 조사에 임해야 할 것으로 생각합니다. 물론 일본야요이시대의 자료집성에서 보면 석조, 목조가 아니더라도 단순한 수혈로 만든 우물이 있다는 것을 확인하였는데, 많은 참고가 되었습니다.

그러면 후기 취락의 공간구성에 대해 설명하겠습니다. 먼저 청원 쌍청리유적입니다. 가장 위부분에서 많이 확인된 것이 원형의 수혈인데, 저장공간이 되겠습니다. 검은점으로 표시한 것들이 모두 송국리식 주거지입니다(도20). 그 다음으로 천안의 대흥리유적(도21)과 대전의 복룡동유적(도22)에서도 대규모 수혈군의 양상을 볼 수 있습니다. 이것이 주거공간과 저장공간만으로 구성된 취락인지, 아니면 분묘공간도 있었는지는 아직 확실치 않습니다.

다음은 대전 대정동유적입니다. 양쪽 두 구릉과 계곡부분을 개발에 수반해서 전부 조사한 바가 있습니다(도23). 주거공간의 중심지역은 확인되지 않았지만, 북쪽 구릉이 송국리식 주거지가 많이 확인된 주거공간으로 볼 수 있습니다. 그리고 계곡을 사이에 두고 남쪽의 구릉, 약 300m 떨어진 곳에서 지석묘나 석관묘로 구성된 분묘공간을 확인할 수 있습니다. 좀 아쉬운 부분은 계곡부분에서 농경지의 존재를 예상했었습니다만, 확인되지는 않았습니다. 원래 있었는데 없어진 것인지, 원래부터 없었던 것인지는 잘 모르겠습니다.

지금 보시는 유적도 앞에서 말씀드린 공간구조와 비슷한 양상입니다(도24). 발굴지역은 철도구간인데 북쪽 구릉쪽에서 지석묘가 군집을 이루는 분묘공간이 확인되었고, 남쪽 구릉에서 주거지로 구성된 환호가 있는 취락이 확인되었습니다. 역시 계곡을 사이에 두고 주거공간과 분묘공간이 나뉘어져 있는 것을 확인할 수 있습니다.

다음은 서천 오석리유적입니다(도25). 여기도 북쪽 부분에 주거지가 중심을 이루는 생활공간이 있고, 남쪽에는 무덤을 중심으로 한 분묘공간으로 이루어진 취락으로 볼 수 있습니다. 공주 산의리 취락인데요, 가운데 부분에 분묘공간이 있고 남쪽 부분에 주거공간이 있는데, 주거공간은 좀 더 확장될 가능성이 있습니다(도26). 역시 도로구간인데요, 제일 북쪽에 있는 구릉에서 저장공이 약 41기 정도 분포하고 있습니다. 그래서 주거공간, 저장공간, 분묘공간으로 구성된 청동기시대 후기의 대표적인 취락으로 볼 수 있습니다. 이 유적을 이해하기 위해 일본의 야요이시대의 저장공간에 대해 한 가지 예를 들어 설명하겠습니다. 후쿠오카현에 있는 미츠오카 나가오유적입니다. 50m 직경을 갖는 작은 규모의 환호가 있는데, 환호 내부에서는 저장공만 확인되었으며, 양쪽으로 출입구가 나 있는데, 출입구쪽에도 작은 도랑이 마련되어 있는 것을 확인할 수 있습니다(도27). 아마 짐승으로부터의 피해를 줄이기 위한 시설로 생각됩니다. 어쨌든 저장공간과 관련된 주거공간이 어딘가에 있을 것으로 생각되는데, 제가 추정하기에는 아마도 100 m나 200m 이상 떨어진 다른 구릉에 분묘공간과 주거공간이 존재했을 것으로 생각합니다. 그렇다면 왜 이렇게 불편한 취락구성을 하고 있는 것인지가 궁금할 것입니다. 아무래도 산지나 구릉의 당시의 식생에 대해서는 알고 있는 정보가 많지는 않지만, 아마 숲으로 이루어져 있었을 것입니다. 이쪽 숲으로 이루어진 부분이 다른 사람들에게는 보이지 않게 되는 효과를 낼 수 있었을 것이며, 이것이 당시의 농경집단간의 긴장, 갈등관계를 보여주는 현상일지도 모르겠습니다. 왜냐하면 실은 주거공간의 가까운 곳에 저장공간을 마련하는 것이 취락의 관리측면에서 더욱 효율적이겠지만, 이렇게 떨어져 있는 양상을 본다면 혹시 다른 집단이 침입해 왔을 때, 주거공간과는 별도의 곳에 저장공간을 마련하는 것이 식량을 은닉하여 보호하기 위한 전략이었을 가능성도

있습니다. 여러분들 중에서 저장공간과 관련한 야요이시대의 미츠오카 나가오유적과 같은 최근의 조사예가 있는지 알려주시면 감사하겠습니다. 이 유적 주변의 조사상황은 어떠한지, 주거공간이라든지 분묘공간이 확인되었는지에 대해서도 알고 싶습니다.

논산 마전리유적입니다. 도로구간을 조사했는데, 가장 북쪽 부분에서 저장공간이 확인되었으며, 남쪽 부분의 가운데에 분묘공간이 있습니다(도 28). 주거공간은 이쪽이라고 생각되지만, 조사가 이루어지지 않았고, 주거지 1동만 확인되었습니다. 이쪽 앞쪽에서는 수전과 밭이 확인되었습니다. 중서부지역 후기 취락의 중요한 특징 중 하나로 취락의 북쪽에 저장공간, 가운데에 분묘공간, 남쪽에 주거공간으로 구성된 하나의 세트관계를 이루는 취락구성을 주목하고 있습니다. 시간관계상 다음으로 넘어가겠습니다.

이번에는 여러분들이 잘 알고 계시는 보령 관창리유적인데, 구릉 전체가 조사되었습니다(도 29). D·E·F 지구에서는 주거지만 확인되었고, A 지구에서는 무덤만 확인되었습니다. 이 취락의 중심을 이루고 있는 B 지구에서는 주거지를 비롯해서 저장공, 굴립주건물 등이 확인되어, 다양한 복합 기능을 가지는 주거 중심 복합 공간으로 볼 수 있겠습니다. 도면으로 본 모습입니다만, B 지구가 중심을 이루고 있고, D·E·F 지구에서는 주거지만 확인된 상황입니다. 주거지의 규모, 입지로 봤을 때, 일반적인 주거지는 10㎡ 전후~20㎡ 사이가 되며, 검정색으로 칠한 주거지는 40㎡이상을 이루는 규모가 큰 주거지들입니다. 이러한 초대형주거지들은 B 지구를 중심으로 조성되어 있으며, D·E·F 지구에서는 초대형주거지보다 규모가 한 단계 작은 대형주거지 한 동 정도와 나머지는 중소형주거지가 확인되었습니다. 시간적인 선후관계를 구분해야겠지만, 취락 전체의 성격을 이해하는 데는 무리가 없을 것으로 생각됩니다. 뒤에 도면이 나옵니다만 시간관계상 생략하고, 이어서 다음 설명을 드리겠습니다. 분묘공간에는 지석묘가 하나 있고, 석관묘가 주변에 다수 분포하고 있습니다. 지석묘 가까이에서만 마제석검이 확인되었습니다. 가장 외곽에서는 마제석검이 확인되지 않았습니다.

다음은 부여 송국리유적으로 지금도 발굴조사가 진행되고 있습니다(도 30). 이 부분을 취락의 방어목책의 라인으로 보고 있습니다. 이 목책을 파괴하고 만들어진 세장방형 주거지와 원형 주거지도 있습니다. 목책 단계의 주거지는 방형주거지인데, 목책의 이 부분에서 대형 굴립주건물이 확인되었습니다. 입지와 형태상 의례공간으로 생각됩니다. 남쪽에 유명한 비파형동검이 출토된 석관묘가 있습니다. 물론 송국리유적은 전체적인 발굴이 이루어지지 않아서 아직 대규모 저장공간이 밝혀진 구역은 없습니다만, 앞으로 분명히 확인될 것으로 생각합니다. 그래서 청동기시대 후기의 취락 가운데서 대형취락, 중심취락은 이러한 대규모의 의례공간을 갖추고 있는 것이 또 하나의 특징입니다. 이 부분입니다만, 이쪽에 대형굴립주건물이 있으며 길이가 27m, 폭이 4m에 달합니다. 이 건물을 둘러싸며 작은 구를 파고, 그곳에 목책을 설치한 공간 구획의 형태가 확인되었습니다.

Ⅲ 요약

이 표는 지금까지 설명드린 취락구성의 변화, 즉 조기, 전기취락에서 후기취락으로 넘어가는 구성의 변화를 종합적으로 보여주는 표입니다(표 1). 조기에는 주거공간만 확인되고 분묘공간은 확인되지 않았습니다. 전기에는 대부분은 주거공간이지만, 일부 유적에서 소규모의 분묘공간이 확인되었습니다. 후기에는 주거공간만으로 구성된 취락도 있습니다만, 주거-분묘, 주거-저장, 주거-저장-분묘와 같은 다양한 기능이 복합된 취락의 양상을 보이는 것을 특징으로 볼 수 있습니다. 특히 후기취락 중에서 중심취락 또는 거점취락으로 말할 수 있는 송국리 취락과 같은 유적에서는 대규모 의례공간의 존재가 큰 특징이라고 할 수 있습니다. 역시 후기단계에 분묘공간과 저장공간이 많이 활성화되고, 전기에 분묘공간이 잘 확인되지 않는 양상은 생계경제와 관련된 농경방식과 관련되지 않을까 생각됩니다. 청동기시대 전기까지는 화전농경을 포함한 밭농사를 중심으로 한 생계경제였기 때문에, 필연적으로 정주도는 약했을 것으로 생각됩니다. 아마도 취락(집단)의 이동이 전기 단계에서는 상당히 빈번하게 이루어졌던 것 같습니다.

시간이 얼마 없습니다만, 취락 내부의 사회조직에 대해서 간단히 설명하겠습니다. 전기의 양상은 취락의 리더와 그 가족으로 구성된 상위계층과 그 밖의 일반계층으로 양분되는 2단위의 계층구조 생각됩니다. 특히 전기후반에서 동검을 부장하는 취락이 확인되고 있는데요, 이런 양상으로 봤을 때

청동기시대 전기후반에 계층화의 서막이 열리는 것으로 생각됩니다. 이것은 서천의 오석리유적에서 출토된 비파형동검입니다. 이것은 유명한 대전 비례동유적의 동검입니다(사진1).

다음으로 청동기시대 후기의 대규모 취락과 같은 경우에는 상위·중위·일반계층의 세 계층으로 나뉘는 것으로 상정하고 있습니다(도31). 사실 계층의 문제를 고고학적으로 말하는 것은 상당히 어려운 부분이라고 생각합니다. 이 무덤은 송국리 취락의 수장묘로 생각됩니다(사진2). 역시 송국리취락의 구조는 앞에서도 말씀드렸듯이 의례공간이 강조됩니다. 그리고 청동기 생산과 직접적인 관련이 있는 동부의 용범도 확인되었습니다. 아무튼 중심 또는 거점취락의 전형을 가장 잘 보여주는 유적이라고 할 수 있습니다. 방금 설명드린 송국리유적의 의례공간의 모습입니다.

사실 저는 취락과 취락간의 관계에 대해 많은 관심을 가지고 있습니다. 중심취락과 주변취락과의 관계를 얘기해 줄 수 있는 것들 중에서, 생산과 소비, 유통의 문제에 대한 것이 가장 중요하다고 생각합니다. 아쉽게도 한국에서는 산지추정을 비롯해서 고고학적으로 그러한 관계를 검증해 줄 수 있는 자료는 많지 않습니다.

일본에서는 거점취락이라고 합니다만, 제가 말씀드리는 중심취락의 경우 상위취락과 일반취락간의 직접적인 상하관계, 즉 종속적인 관계를 형성한 것으로 상정하고 싶습니다. 그렇지만 주변에 있는 취락들과는 간접적인 호혜 관계로 연결된 것이 아닌가 하고 추정하고 있습니다.

마지막으로 향후의 과제에 대해서 간단히 말씀드리고 마무리하겠습니다. 취락론의 성과여부는 편년연구와 맞물려있다고 생각합니다. 그리고 한반도 중서부지역의 양상을 다른 지역과 비교하고 싶은데, 환호취락이 발달한 영남지역과 지석묘가 최대로 밀집되어 있으면서 청동기가 다량 확인된 호남지역의 양상, 그리고 일본과의 관계에 있어서는, 한국의 청동기시대에 해당되는 죠몽 만기에서 야요이 조기, 전기에 해당하는 취락과의 비교를 해 보고 싶습니다. 또한 저 개인으로서는 상당히 어려운 분야라고 생각하고 있습니다만, 공동체의 조직원리라든지 그 안에서의 개인의 역할에 대해서도 관심을 가지고 공부를 하고 싶습니다.

시간이 너무 지나서 죄송합니다. 이상으로 발표를 마치겠습니다. 감사합니다.

蔚山地域の青銅器時代集落について

李 秀鴻（蔚山文化財研究院）

はじめに

韓国蔚山文化財研究院の李秀鴻と申します。さっそく発表を始めます。

まず韓半島南部地方の青銅器時代の編年については，前の発表にもありましたので簡単にふれることにして，蔚山地域を中心にした検丹里類型の特徴と蔚山地域の集落の変化と集落間の差異についてみていくことにします。

Ⅰ　韓半島南部地域の青銅器時代の編年

1　各期に見られる地域性

2000年以後，安在晧先生による青銅器時代を早期，前期，後期に区分する見解［安在晧 2006］が広まっています。早期は渼沙里類型，前期は可楽洞類型，欣岩里類型，驛三洞類型があります。この三つの類型を時間差とみる見解と地域差とみる見解が併存していて，時間差とみる研究者には金賢植［2008］と庄田慎矢，地域差とみる研究者には李亨源［2002］と千羨幸［2003］です。後期になると，北西部の京畿道南部と釜山を結ぶ線の南西側に松菊里文化が分布し，それ以外の地域では，漢江流域の驛三洞Ⅱ類型［金賢植 2005］，江原道の嶺西地域の北漢江類型［金権中 2005］，蔚山を含む東南海岸地域の検丹里類型があります（図1）。

2　後期の地域性の系譜

青銅器時代後期の地域性です（図1）。京畿道南部と釜山を結ぶ線の南西側に分布する松菊里文化は，前期の文化との間に系譜差を持ちますが，その他の地域では前期文化の系譜をひく文化が続いています。松菊里文化が分布する地域では前期文化と後期の松菊里文化の編年的な区分が明らかですが，その他の地域では前期と後期を区分することはほとんどの場合，難しい。蔚山を含む東南海岸地域の編年は，前期こそ韓半島南部全体の編年と軌を一にしますが，後期になると検丹里類型が新たに出現し分布するようになります。

3　蔚山を含めた東南海岸地域の特徴

地形を簡単にみてみましょう（図2）。右が東南海岸地域，海岸に沿って太白山脈があります。松菊里文化はこの太白山脈の東側には存在せず，東側の浦項，慶州，蔚山，梁山地域には検丹里類型が分布しています（表1）。

Ⅱ　検丹里類型

1　住居跡の概要

検丹里類型について簡単にみてみます。住居址は一般的に蔚山式住居址とよばれており，方形や長方形の平面形態で，壁溝と排水溝，炉跡を一つ備えています（図3）。土器は検丹里式土器とよばれるもので，口縁端の下に太い短斜線文と横線文が飾っている深鉢形土器です（図5）。墓は松菊里文化の分布圏に比べて非常に少なく，だいたい小型石棺墓と地上式支石墓です（図6）。農耕は谷部を利用した階段式水田が確認されていますが，これが蔚山地域だけの特徴なのか，今後，他の地域でも見つかるのかは今後の資料の増加を待つしかありません。

2　住居形態

住居形態は，4柱式，6柱式が多く，8柱式もわずかに確認されています。炉跡は中央より片側に偏って設置され，中央に設置される例はありません。4柱式の場合は真ん中からやや片方に設置されています。6柱式の長方形住居址には片方の4柱の真ん中に設置されます（写真1）。壁溝と排水溝が外側に出るのが典型的な特徴です（写真2）。写真3はトンネル式の排水溝で，この部分はこの程度の幅で主堤が存在したと推定しています。これは排水溝の細部写真です。

傾斜が緩慢な地域で確認されるこの種の住居址と溝との空間を主堤とみる見解があります。図4は金賢植氏の蔚山式住居址の復元案です。今指している部分が現在の発掘面なので，主堤は確認されませんでしたが，このように想定してみました。5年前大阪を訪れた際に八尾南遺跡の存在を知りました。時期は違いますけど，溝と主堤，排水溝，壁溝のあり方をみた時に蔚山式住居址との類似性に興味を覚えたことがあります。

3　検丹里式土器

検丹里式土器の文様は，前期の短斜線文はだいたい

図1　青銅器時代後期の地域性

図2　東南海岸地域の地形

図3　蔚山式住居跡

表1　韓半島南部地域における青銅器時代後期文化の地域性

図4　蔚山式住居跡復元案（金賢植）

図5　検丹里式土器

図6　蔚山地域の墓

写真1　蔚山式住居跡

写真2　蔚山式住居跡

写真3　蔚山式住居跡

写真4　小形石棺墓

写真5　地上式支石墓

写真6　階段式沓

写真8　西部里 南川遺跡

写真7　沓

写真9

写真10

写真11

写真12

写真13

写真14

細長い場合が多く，太い短斜線文と横線文が飾られた深鉢形土器は東南海岸地域の地域性を強く反映していると考えています。

4　墓制

墓には主に小型石棺墓と埋葬主体部が地上にある地上式支石墓が確認されています（図6）。小型石棺墓（写真4）は蓋石の下に小型石棺があります。2000年代初めにこの墓が初めて調査された頃には幼児用の墓と考えていましたが，現在では埋葬方法の違いではないかと考えています。

支石墓（写真5）は，上石を除去するとすぐに生土を確認できます。上石があるため，死者をそのまま安置することはできない構造をもつと考えられますので，火葬や洗骨葬のような2次葬の可能性があると思います。だいたい死者をそのまま安置する場合が多い松菊里文化の分布圏とは対照的です。

5　生産地

韓国では水田の調査例がまだ少ないですが，蔚山で調査された水田（写真6・7）は一枚の幅が約70cm～1m程度です。水田を調査し始めたばかりの頃は本当に水田なのかという疑問もあって，今では畑の可能性も考えています。しかし耕作が行われたという点では共通しています。蔚山は広い沖積地が発達しない地形が多いので，このように小さい谷部を利用して耕作が行われたと思います。ほかに碁盤形態の水田も調査されています。 今後の資料の増加を期待しています。

Ⅲ　蔚山地域の集落

1　編年

蔚山地域における集落の変化についてみてみます。これまで韓国青銅器時代の集落に関して数多くの研究が行われてきましたが，精密な編年作業が先行していないため，蔚山地域の集落研究においては同時性の認定が難しい。ほとんどの住居址の構造が単純で，出土遺物も貧弱だからです。住居址をのぞけば李亨源氏の発表にあった中西部地域に見られる後期の墳墓群や貯蔵穴，窯，掘立柱建物などの遺構がありません。

編年について簡単にみてみます。松菊里文化の分布圏のように前期と後期を明確に区分することが難しいので，前期から後期への変化が現われる証拠として五つの要素を考えてみました。

1　住居構造が大型長方形と細長方形から長方形と方形へと変化する。

2　ここでもっとも重要なことは複数の炉跡から単数の炉跡への変化です。

3　土器の文様は二つ以上の文様が組み合わされた複合文から単独の文様や無文へ変化する。

4　石鏃は無頸式から一段頸式へ変化する。石器の製作方法の変化が原因と考えられます。

5　住居址と墳墓は散発的な分布から群集化するようになります。これは墓や住居址を造る際，企画性や強制性が強化されたことを意味すると考えられます。

図7は千羨幸の土器編年です。以前は資料が不十分だったので，検丹里類型を中心にした後期の編年に重点を置いて研究が行われましたが，最近は資料の増加により，前期も三段階に区分できるようになりました。

土器文様と住居址，石鏃を中心に前期と後期をそれぞれ3期に区分し，全部で6期に細分したのが表2ですが。二重口縁Aは典型的な可楽洞式土器以降によくみられる二重口縁が太い形態にあたります。二重口縁Bは欣岩里式土器以降にみられる二重口縁の幅が広くなり，細くなる形態にあたります。時間の関係で各期の特徴は遺跡をみながら説明します。

2　集落構造の変化

1期，2期の住居址だけで構成される集落が調査された例はありませんので，1期，2期の住居址のみを抽出しました。3期～6期はできる限り同時期の住居址のみで構成された遺跡を選びました。その中で4期に当たる川上里遺跡は，同時期の住居址のみで構成される集落ではありません。またできる限り丘陵全体が調査された遺跡を選びました。その中で茶雲洞遺跡のみが例外です。

1期（前期前葉）

住居は囲石式炉跡を備える方形，大型長方形，細長方形住居址があります。土器の特徴は次のとおりです。石鏃はほとんどが無頸式ですが，二段頸式もわずかに確認されます。

泉谷洞遺跡ナ地区が図8，九英里遺跡Ⅴ－1地区が図9です。

泉谷洞遺跡の住居址です（図8）。規模が大型で土器は太い二重口縁の形態です。

図9は九英里遺跡です。囲石式炉跡が設置された住居址が確認されました。早期に属す可能性も残っています。図10に示した九英里遺跡の遺構配置図で，黒い

図7　蔚山地域の土器編年（千羨幸作成）

表2　蔚山地域の遺跡編年表

図8　泉谷洞遺跡ナ地区

図9　九英里遺跡Ⅴ－1地区

図10　九英里遺跡Ⅴ－1地区1期集落

図11　泉谷洞ナ地区１期集落

部分が1期の住居址です。住居址の配置に大きな特徴はありません。

図11は泉谷洞遺跡ナ地区の遺構で，黒い部分が1期の住居址です。だいたい丘陵の稜線上に立地する特徴があります。

1期の集落の特徴は，丘陵の稜線上に並列して配置された住居址2棟で構成されることです。家族共同体という説があります。並列に配置していますが，中西部地域の例を参考にすれば一列に配置する集落も存在する可能性があります。

2期（前期中葉）

細長方形住居址が中心になります。土器の文様は二重口縁B＋単斜線文中心で，口唇刻目＋孔列文です。石鏃には無頸式と二段頸式が確認されます。遺跡は次のとおりです。図12は外光里遺跡，図13は南川遺跡の住居址と遺物です。南川遺跡の住居址は3期の可能性もあると考えられます。

図14は九英里遺跡V－1地区の2期集落です。2棟ずつ並列に配置しています。黒い部分がこの時期の住居址です。図15の黒い部分が外光里遺跡の2期集落ですが，丘陵の稜線上に一列に配置されています。

写真8は南川遺跡です。住居址の中で左側の大型住居址と右側の住居址が2期に当たり，2棟の住居址がL字状に配置しています。赤い丸い部分が青銅器時代の住居址です。その中で確実に2期といえる住居址がL字状に配置している住居址です。稜線上にL字状に配置されています。

2期の集落は2～3棟の細長方形住居址が丘陵に沿って一列，並列，L字状に配置されていて，集落の構造は1期と同じと考えられます。

3期（前期後葉）

細長方形住居址が消滅して蔚山式住居址が拡散する時期です。土器の文様は二重口縁が消滅し，複合文が残存します。石鏃は無茎式と二段茎式です。

倉坪洞遺跡（図16）ではこの時期から丘陵の稜線上に住居址が築造されなくなり，稜線の下の斜面に一列，あるいは二列に配置されます。

梅谷洞遺跡Ⅲ地区の住居（図17）はすべて3期ではないですが，やはり稜線上の住居址は少なくなり，斜面に二列の住居址が配置されています。

3期集落の特徴は，一つの丘陵で同時期の住居址が10棟以上に増加することです。この時期から丘陵の稜線上をあけて広場としたものと考えられます。住居址は斜面に1～2列の列状に配置されますが，群集する傾向はまだみられません。広場の存在は集落の構成員の共同行為を示唆すると考えられ，2期に比べて人口が増加したことでますます階層化が進んだのではないかと考えられます。

4期（後期前葉）

細長方形住居址が完全に消滅します。土器の文様は複合文が消滅し，単純な文様だけになります。石鏃は無頸式が消滅します。川上里遺跡（図18）の遺構はすべて同じ時期ではありませんが，丘陵の稜線上をあけておいて，斜面に住居址が分布し，列状ではなく集住するように分布します。一つの群集うちにおける住居址の大きさに差はみられません。

4期の集落は列状配置から広場の周辺に住居群が群集するように形成されるようになります。環濠集落が4期から出現します。

5期（後期中葉）

住居址は4期と同様に蔚山式住居址ですが規模が小さくなります。土器の文様は複合文が完全に見られなくなり単純な文様だけになります。石鏃は二段茎式がなくなります。茶雲洞遺跡をみながら説明します（図19）。丘陵全体の調査はおこなわれていませんがグループ別に住居址が分布し，グループの中に床面積の差が現われ，もっとも大きい大型住居址の出現を確認できます。しかし一つの群集の中では大型住居址と小型住居址との間に立地の差はみられません。

5期集落の特徴は住居面積がより小型化し，集落内にみられる住居群を構成する住居址の数はほぼ同じぐらいです。住居群の中では中小型住居址と小型住居址の差が顕著になり，住居間に優劣が生じます。

6期（後期後葉）

蔚山式住居址が前の時期に比べてさらに小型化するとともに規格化します。土器はほとんどが無文化し，石鏃は一段式になります。未報告の新亭洞遺跡（図20）では，住居址同士の長軸と短軸が同一になる規格化現象が見られます。またグループ内で規模が大きい住居址が丘陵の頂上部近くに配置されます。これはもっとも規模が大きい住居址ですが，この住居址が存在する住居群から星型石斧が出土していることから，この遺跡ではもっとも優位な住居群と考えられます。

6期集落の特徴は住居址の配置と築造に強い規制が働いていることだと思います。住居群は1棟の中小型住居址と2～3棟の小型住居址から構成され，中小型住居址は広場の近くに配置され，5期と同様に優位な住居群が看取されます。

図12　外光里遺跡

図13　西部里 南川遺跡

図14　九英里遺跡Ⅴ－1地区2期集落

図15　外光里遺跡2期住居跡

図16　倉坪洞遺跡遺構配置図と住居，土器

図17　梅谷洞遺跡Ⅲ地区遺構配置図

図18　川上里遺跡

図19　5期 茶雲洞遺跡配置図, 7号住居跡出土遺物

図20　新亭洞遺跡遺構配置図

集落構造の流れを簡単にまとめてみます。安在晧は早期は点であり，前期は線から面に，後期は面から球心に変わると表現しました。李亨源は湖西地方の前期住居址を検討して点状集落から線状集落，面状集落へ変わると説明しました。二つの研究成果を参考にすると，蔚山地域の1期と2期は点状集落，3期は列状集落，4期～6期は面状集落といえます。集落内での階層化は3期に現れ，4期から6期にかけてますます構造化，安定化する過程で階層化が顕著化するといえます。

Ⅳ　集落間の階層化

集落間の階層化についてみてみると，蔚山地域は松菊里文化分布圏に比べて大規模な墳墓群，大型掘立柱建物，銅剣の出土などがまったく見られません。拠点集落について説明する際，実際の青銅器時代の集落の範囲と発掘調査面積が一致しないために，単純に集落の規模のみで判断することは問題があると思います。そして一つの丘陵が一つの段階の集落なのかどうかを検討することも必要だと思います。遼寧式銅剣のような威信財が存在しない蔚山地域ではどのようなものを拠点集落の証拠とみるかに対する問題もありますので，環濠遺跡に注目して検討してみました。

蔚山地域の環濠の特徴は，①丘陵の斜面から突出した丘陵に造られることです。周辺を眺望しやすい場所というよりは，むしろ周辺からよくみえる場所を意味します。②環濠に囲まれた空間のもっとも高いところは環濠面より海抜高度が高いですから，緩慢な傾斜面では環濠遺跡を確認できません。

③環濠内部には住居数が少ない場合も，まったくない場合もあります。④河川と広い平野を前面に見る交通路に立地しています。

検丹里遺跡は平面的にも突出した丘陵にあります。断面図でみても下へやや下がりながら再び高くなるところにあたります（図22）。図21のここに検丹里遺跡が立地しています。前面に平野と河川があり，交通路に立地し，周辺を眺望するに良い場所です。突出している検丹里遺跡がみえるこの範囲（図23）が拠点集落の領域ではないかと考えています。

川上里遺跡も平面的に突出した丘陵上に立地しています（図24）。黒い部分が環濠で前面に平野があり，丘陵が下へ下がりながら再び高くなるところにあたります。図26は川上里遺跡を視覚的にみられる範囲で，発掘調査と地表調査によって青銅器時代の遺跡の分布が確認されています。

連岩洞遺跡の報告書には環濠の内部に1棟の住居址があると書かれていますが，私は環濠と住居址の時期が異なるのではないかと考えています（図27）。平面的にも断面的にも前の遺跡と同様に突出した丘陵に立地しています。反対側からみた遺跡の写真（写真11）ですが，前面の広い平地部からよくみえるところに立地しています。ここが先ほどみた連岩洞遺跡(図28)です。蔚山から慶州を向かう交通路上に立地しています。

新峴洞遺跡（図29・30）は時期未詳と報告されていますが，青銅器時代の環濠である可能性が考えられており，海岸から蔚山に向かう交通路上に立地しています（図31）。

最近は環濠集落を防御集落ではないと考える研究者が増えましたが，その理由は環濠内部の住居址の数が非常に少ないことや緩慢な斜面には環濠が造成されていないことなどです。したがって内部空間は象徴的な存在であり，儀礼的な意味を持つ祭場として区画されたと考えられます。

蔚山地域の拠点集落は環濠を備えた集落と環濠集落の可視圏内にある集落との複合体ではないかと考えてみました。空間的な範囲とは可視圏内に入る空間であり，測定した結果約3km以内であることがわかりました。これはソウル大の金鍾一氏が2005年に既に指摘しています［金鍾一 2005］。

図32の黒い点が蔚山地域でわかっている環濠集落です。写真12はまだ発掘調査されていない部分ですが，立地的には環濠集落が存在する可能性が高い場所です。最近，ここの南側部分（写真12）で青銅器時代の環濠を調査しています。泉谷洞遺跡のほうとこちらでは粘土帯土器段階の環濠も確認されました（写真13・14）。すべて交通路上に立地し，前面には平野を臨みます。新華里遺跡では青銅器時代の環濠が確認されていませんが，蔚山地域でもっとも規模が大きな青銅器時代の集落です。航空写真は新華里遺跡の片方で確認された粘土帯土器段階の環濠で，この部分で確認されました。ここは現在発掘調査中です。この部分は東亜大学校博物館により発掘調査され，青銅器時代の住居址が約500棟，発見されました。南北2km，東西2kmの空間に青銅器時代の環濠は確認されませんでしたが，調査が進めば青銅器時代の環濠も確認されると思います。

以上で発表を終わらせていただきます。

図21　検丹里遺跡の位置

図22　検丹里遺跡の領域

図23　検丹里拠点集落の領域

図24　川上里遺跡の領域

図25　川上里遺跡の位置

図26　川上里拠点集落の範囲

図27　蓮岩洞遺跡の領域

図28　蓮岩洞遺跡の位置

図29　新峴洞遺跡の範囲

図30　新峴洞遺跡の遺構配置図

図31　新峴洞遺跡の位置

図32　蔚山地域の環壕集落集落を中核とする遺跡群の分布

蔚山地域 青銅器時代 聚落에 대하여

李 秀鴻(蔚山文化財研究院)

들어가며

한국 울산문화재연구원에서 근무하는 이수홍입니다. 바로 발표를 시작하겠습니다.

목차는 보시는 바와 같습니다. 한반도 남부지방 청동기시대 편년에 대해서는 앞서 발표하셨기 때문에, 간단히 설명하겠습니다. 제가 근무하고 있는 울산을 중심으로 한 검단리유형의 특징에 대해 알아보겠습니다. 그리고 울산지역의 취락의 변화와 취락간의 차이점에 관해서 살펴보겠습니다.

Ⅰ 한반도 남부지역의 청동기시대 편년

1 시기에 따른 지역성

2000년대 이후 안재호 선생님에 의해서 청동기시대를 조기, 전기, 후기로 구분하는 견해가 확산되고 있습니다. 조기는 미사리유형이 대표적입니다. 전기에는 가락동유형, 흔암리유형, 역삼동유형이 있습니다. 이 세 유형을 시간성으로 보는 견해와 지역성으로 보는 견해가 공존하고 있습니다. 시간성으로 보는 연구자는 김현식선생과 쇼다선생이 있고, 지역성으로 본 연구자는 이형원선생, 천선행선생이 대표적이라 할 수 있습니다. 후기가 되면 북서쪽의 경기도 남부에서 남동쪽의 경남 양산을 잇는 선의 남서쪽에만 송국리문화가 분포합니다. 후기에 송국리문화가 분포하지 않는 곳은 각 지역에 있는 연구자에 의해 한강유역은 역삼동Ⅱ유형, 강원도 영서지역은 북한강유형, 울산을 비롯한 동남해안지역은 검단리유형으로 설정되어 있습니다(도 1).

2 후기의 지역성과 계보

청동기시대 후기의 지역성입니다(도 1). 경기도 남부에서부터 부산까지 이어지는 곡선의 남서쪽에만 송국리유형이 분포합니다. 그 외 지역은 전기의 문화가 이어진 것이라고 생각합니다. 송국리문화는 전기의 문화와 확연히 차이가 납니다. 그래서 송국리문화 지역은 편년에 있어서 전기와 후기의 구분이 뚜렷합니다만, 그 외 지역은 전기와 후기의 구분이 어려운 경우가 많습니다. 울산을 비롯한 동남해안지역의 편년적 위치는 전기는 한반도남부 전체와 동일하지만, 후기는 검단리유형이 분포합니다.

3 울산을 비롯한 동남해안지역의 특징

지형을 간단히 살펴보겠습니다. 이쪽이 동남해안지역입니다. 해안을 따라 태백산맥이 형성되어 있습니다. 송국리문화는 이 태백산맥의 동쪽으로 넘어오지 못했습니다. 이쪽의 짙은 부분이 태백산맥입니다. 이 태백산맥 동쪽의 포항, 경주, 울산, 양산 지역에 검단리유형이 분포합니다(표 1).

Ⅱ 검단리유형

1 주거지의 개요

검단리유형의 특징에 대해 간단히 살펴보겠습니다. 주거지는 울산식주거지라고 일반적으로 부르는데, 방형, 장방형의 평면형태에 벽구와 배수구, 한 개의 노지를 갖추고 있습니다(도 3). 토기는 검단리식토기라고 하며, 구연단 아래에 굵게 그은 단사선문과 횡선문이 시문된 심발형토기입니다(도 5). 무덤은 송국리문화 분포권에 비해서 아주 적게 분포합니다. 무덤은 대체로 소형 석관묘와 지상식 지석묘입니다(도 6). 농경은 곡부를 이용한 계단식 논이 조사가 되고 있는데, 이것이 울산 지역만의 특징인지, 한반도 전역에서 나타날지는 사례의 증가를 기다려봐야 할 것 같습니다.

2 주거지 형태

주거지의 일반적 형태입니다. 대체로 4주식, 6주식이 많고 8주식이 일부 확인됩니다. 노지는 한 쪽에 치우쳐 설치됩니다. 주거지의 중앙에 설치되는 경우는 없습니다. 4주식의 경우에는 중앙에서 약간 한 쪽으로 치우친 곳에 위치합니다. 6주식 장방형의 노지는 한 쪽의 사주 중앙에 분포하고(사진 1), 벽구와 밖으로 빠지는 배수구가 설치된 것이 가장 전형적인 형태입니다(사진 2). 위의 주거지가 앞에서 본 사진의 도면입니다. 4주식의 주거지이며 배수구가 설치되어 있습니다. 배수구 암거형입니다(사진 3). 이 부분은 이 정도의 폭으로 주제가 존재했던 것으로 추정하고 있습니다. 배수구의 세부 사진입니다.

경사가 완만한 지역에서는 이러한 형태의 주거지가 확인되었습니다. 최근에는 이 주거지와 구 사이의 공간이 주제라고 하는 견해가 있습니다. 김현식선생의 울산식 주거지의 복원 안입니다(도4). 지금 가리키고 있는 부분이 현재의 발굴면이기 때문에 주제는 확인되지 않았지만, 주제의 존재를 상정해 보았습니다. 5년전 오사카에 갔을 때, 야오미나미유적의 존재를 알게 되었습니다. 시기는 다르지만, 구와 주제, 배수구, 벽구의 존재를 봤을 때 울산식 주거지와 유사한 형태라고 생각했습니다.

3 검단리식토기

검단리식토기입니다. 전기의 단사선은 대체로 길고 얇은 경우가 많습니다. 굵게 그은 단사선과 횡선문이 시문된 심발형토기는 동남해안지역의 지역성이 강하게 반영되었다고 생각합니다.

4 묘제

다음은 울산지역의 무덤입니다. 소형 석관묘와 매장주체부가 지상에 있는 지상식 지석묘가 주로 확인됩니다(도6). 소형 석관묘 사진입니다. 개석 아래에 소형 석관이 있습니다(사진4). 2000년대 초 이 무덤이 조사되었을 때에는 유아묘라고 생각했습니다. 그러나 지금은 유아묘라기 보다는 매장방법의 차이가 아닐까라고 저는 생각합니다.

지석묘입니다. 상석을 들어내면 바로 생토가 확인됩니다(사진5). 시신을 바로 안치하는 것은 상석때문에 불가능한 구조라고 생각됩니다. 그래서 시신을 바로 매장하지 않고 화장이나 세골장과 같이 2차장이 이루어졌다고 생각합니다. 송국리문화의 분포권은 대체로 시신을 바로 안치하는 형태입니다.

5 생산지

한국에서는 논에 대한 조사가 아직까지 미진한 편입니다. 울산에서 이런 형태의 논이 많이 조사가 되었습니다(사진6·7). 한 면의 폭이 약 70cm~1m정도 됩니다. 발굴 초기에는 이것이 정말 논일까 하는 논란이 있었습니다만, 지금은 밭으로 사용되었을 가능성도 염두에 두고 있습니다. 아무튼 경작을 하였다는 점은 공감하고 있습니다. 울산은 넓은 충적지가 발달하지 못한 지형입니다. 그래서 작은 곡부를 이용해서 이러한 형태의 경작을 하였다고 생각합니다. 앞으로 자료의 증가를 기대합니다. 바둑판 형태의 수전이 조사된 예도 몇 군데 있습니다.

Ⅲ 울산지역의 취락

1 편년

울산지역 취락의 변화에 대해 살펴보겠습니다. 역시 취락 연구의 전제는 정밀한 편년 작업이 선행되어야 합니다. 현재까지 한국 청동기시대 취락에 대해서는 여러 연구자들에 의해서 다루어져 왔습니다. 울산지역 취락연구는 동시성 확보가 어렵습니다. 그것은 대체로 주거지 구조가 단순하고, 출토된 유물이 빈약하기 때문입니다. 그래서 앞에서 보신 호서지역의 후기에 존재하는 무덤군이라든지 저장공, 가마, 굴립주건물 등과 같은 주거지 이외의 유구가 전무한 상태입니다.

편년에 대해 간단히 살펴보겠습니다. 송국리문화의 분포권과 같이 전기, 후기가 뚜렷하지 않기 때문에, 저는 그 외의 지역에서 대해서 전기에서 후기로의 변화를 나타내는 증거를 5가지 정도로 생각해 보았습니다. 주거지는 대형장방형, 세장방형에서 장방형, 방형으로 변화합니다. 여기서 가장 중요한 것은 복수의 노지에서 단수의 노지로 변화한다는 것입니다. 토기 문양은 2개 이상 결합된 복합문에서 단독문이나 무문양으로 변화합니다. 석촉은 무경식에서 일단경식으로 바뀝니다. 석기제작 방법의 변화라고 생각합니다. 주거지와 무덤은 산발적인 분포 형태에서 군집하는 양상을 보입니다. 이것은 무덤이나 주거지가 축조될 때 기획성, 강제성이 점차 강화되는 것으로 생각됩니다.

천선행의 울산지역 토기 편년표입니다(도7). 예전에는 자료의 부족으로 검단리유형을 중심으로 한 후기의 편년에 많이 치중하였습니다. 최근에는 자료의 증가로, 전기도 세단계로 분류된다고 생각됩니다.

저는 토기문양과 주거지, 석촉을 통해 전기와 후기를 각 3기, 총 6기로 세분해 보았습니다. 가장 위쪽의 이중구연A는 전형적인 가락동식에 잘 보이는 이중구연이 두터운 형태를 말합니다. 이중구연B는 흔암리식에서 보이는 이중구연의 폭이 넓어지고 두께는 얇아지는 것을 말합니다. 시간 관계상 각 기별 특징은 설명을 하면서 진행하겠습니다.

이것은 대상유적 선정의 기준입니다. 1기, 2기의 주거지로만 구성된 조사 사례는 없습니다. 그래서 유적에서 1기, 2기 주거지만 추출하였습니다. 3기~6기는 가능한 한 동시기의 주거지로만 구성된 유적을 선정하였습니다. 그 중 천상리유적은 4기에

속하지만, 동시기는 아닙니다. 가능한 한 구릉 전체가 조사된 유적을 선정하였습니다. 그 중 다운동 유적만 예외입니다.

1기(전기전엽)

1기의 유구와 유물의 특징입니다. 주거지는 위석식노지를 갖춘 방형주거지, 대형장방형, 세장방형 주거지입니다. 토기의 특징은 다음과 같습니다. 석촉은 대부분 무경식이지만 2단경식도 소수 존재합니다. 울산 천곡동유적 나지구(도8), 구영리유적 Ⅴ-1지구가 여기에 해당됩니다(도9). 천곡동유적의 주거지입니다(도8). 규모가 대형이며, 토기는 두터운 이중구연의 형태입니다. 이곳은 구영리유적입니다(도9). 위석식노지를 갖춘 주거지가 확인되었습니다. 조기에 속할 가능성도 배제할 수 없습니다. 구영리유적의 유구배치도입니다. 그 중 검은 부분이 1기의 주거지입니다(도10). 주거배치의 특징은 크게 간취되지 않습니다.

천곡동 나지구의 유구인데, 검은 부분이 1기의 주거지입니다(도11). 대체로 구릉 능선에 분포하는 특징이 있습니다. 1기 취락의 특징이라고 한다면 구릉 능선에 병렬로 배치되고 가족공동체 주거지 2동으로 취락이 구성된다고 할 수 있습니다. 병렬로 배치되어 있습니다만, 중서부지역의 예를 볼 때 일렬로 배치된 취락도 존재할 것이라고 생각됩니다.

2기(전기중엽)

2기의 유구와 유물의 특징입니다. 세장방형 주거지가 중심입니다. 토기문양은 다음과 같습니다. 석촉은 무경식과 2단경식이 확인됩니다. 유적은 다음과 같습니다. 외광리유적의 주거지와 유물이며(도12), 서부리 남천유적의 주거지와 유물입니다(도13). 이 주거지는 3기에 속할 가능성도 있다고 생각합니다. 구영리유적 Ⅴ-1지구의 2기 취락입니다(도14). 2동씩 병렬로 배치되어 있습니다. 검은 부분이 외광리유적 2기의 주거지입니다. 구릉 능선에 일렬로 배치되어 있습니다(도15). 서부리 남천유적입니다(사진8). 주거지 중에서 왼쪽의 대형주거지와 오른쪽의 주거지가 2기에 속합니다. 주거지 2동이 L자상으로 배치되어 있습니다. 빨간 부분이 청동기시대 주거지입니다. 그 중 확실하게 2기라 할 수 있는 주거지가 L자상으로 배치된 주거지입니다. 능선상에 L자상로 배치되어 있습니다. 2기 취락은 세장방형주거지 2~3동이 구릉을 따라서 일렬, 병렬, L자상으로 배치되어 있습니다. 취락구조의 양상은 1기와 동일하다고 생각합니다.

3기(전기후엽)

3기의 유구와 유물의 특징입니다. 세장방형이 점차 소멸하고 울산식주거지가 확산됩니다. 토기문양과 석촉은 다음과 같습니다. 유적은 그림을 보면서 설명하겠습니다. 창평동유적입니다(도16). 이때부터 구릉 능선에 주거지가 설치되지 않습니다. 능선 아래 사면에 1열, 혹은 2열로 배치되고 있습니다. 매곡동유적 Ⅲ지구입니다(도17). 전부 3기는 아니지만, 역시 능선에서 주거지가 줄어든 상태입니다. 역시 사면에 주거지가 2열로 배치된 상태입니다. 3기 취락의 특징입니다. 한 구릉에서 동시기의 주거지가 10여동 이상 증가하는 것이 특징입니다. 이때부터 구릉의 능선을 비워두는데, 이것이 광장이라고 생각합니다. 주거지는 사면에 1~2열의 열상으로 배치되지만, 아직까지 군집의 양상은 보이지 않습니다. 광장의 존재는 마을 구성원의 공동행위를 암시한다고 생각합니다. 2기에 비해 인구수의 증가를 통해 점차 계층화가 시작되지 않았을까 생각합니다.

4기(후기전엽)

다음은 4기로 세장방형 주거지가 완전히 소멸합니다. 토기의 문양은 다음과 같고, 석촉은 무경식이 소멸합니다. 유적은 천상리유적의 도면을 보면서 설명하겠습니다(도18). 완전히 동시기는 아닙니다만, 구릉 능선에 비우고 사면에 주거지가 분포하는데, 열상이라기보다 묶여서 배치한다고 생각합니다. 한 군집 안에서는 주거지의 크기 차이는 보이지 않습니다. 4기 취락은 열상배치에서 벗어나 광장주변에서 그룹별로 주거군이 형성됩니다. 그리고 이때부터 환호취락이 등장합니다.

5기(후기중엽)

5기를 살펴보겠습니다. 주거지는 4기와 마찬가지로 울산식 주거지인데, 4기와 비해서 규모가 축소됩니다. 토기의 문양과 석촉은 다음과 같습니다. 관련유적으로 다운동유적을 보면서 설명하겠습니다(도19). 구릉 전체를 확인하지 못했습니다만, 그룹별로 주거지가 분포하는데, 이 안에서 규모의 차이가 뚜렷하게 나타납니다. 그리고 가장 큰 대형주거지가 존재하는 예가 확인됩니다. 하나의 군집 안에서는 큰 주거지와 작은 주거지 사이의 입지 차이는 확인되지 않습니다. 5기 취락의 특징은 규모가 보다 소형화되고 취락내 주거군을 이루는 주거지의 수가 비슷해집니다. 주거군 내에서 중소형주거지와 소형주거지의 구분이

뚜렷해지고, 우월한 주거군이 등장합니다.

6기(후기후엽)

6기는 울산식 주거지가 앞시기에 비해 보다 소형화되고 규격화됩니다. 토기문양과 석촉은 다음과 같으며, 유적은 신정동유적을 보면서 설명하겠습니다(도20). 상세한 도면을 준비하지 못한 점 양해바랍니다. 대체로 3동의 주거지가 하나의 그룹을 이룬다고 생각합니다. 보고서를 쓰면서 확인을 했는데, 주거지들의 장축, 단축이 동일해지는 규격화 현상이 간취됩니다. 그리고 그룹 중에서 규모가 큰 주거지가 구릉 정상부 가까이에 배치됩니다. 가장 규모가 큰 주거지인데, 이 주거지가 속한 그룹에서 성형석부가 출토되었습니다. 이 유적에서는 가장 우월한 주거군이라고 생각합니다. 6기 취락의 특징은 주거지 배치와 축조에 강한 규제가 작용한다고 생각합니다. 주거군 내에서는 1동의 중소형주거지와 2~3동의 소형주거지가 모여있습니다. 중소형 주거지는 광장 가까이에 배치되고, 5기와 마찬가지로 우월한 주거군이 간취됩니다.

취락구조의 흐름을 간단히 살펴보겠습니다. 안재호 선생님은 조기는 점에서, 전기로 가면서 점차 선에서 면으로, 후기는 면에서 구심으로 바뀐다고 하였습니다. 이형원 선생님은 호서지방 전기 주거지를 검토하면서 점상취락에서 선상취락, 면상취락으로 바뀐다고 하였습니다. 이 두 연구에 대입을 해본다면 울산지역은 1,2기는 점상취락, 3기는 열상취락, 4기~6기는 면상취락이라 할 수 있습니다. 취락 내에서의 계층화는 3기부터 보이며, 4기에서 6기로 진행될수록 점차 구조화되고 안정화되는 과정에서 계층화의 현상이 뚜렷해진다고 할 수 있습니다.

Ⅳ 취락간 계층화

취락 간의 계층화에 대해 살펴보겠습니다. 울산지역은 송국리문화 분포권에 비해서 대규모 분묘군, 대형 굴립주건물, 동검 출토 등이 전무한 상태입니다. 거점취락을 얘기할 때 단순히 취락의 규모만 생각하는 것은 청동기시대의 마을 범위와 실제 발굴한 범위와는 차이가 있기 때문에 문제가 있다고 생각합니다. 그리고 하나의 구릉이 한 단계의 취락인지에 대한 검토도 필요하다고 생각합니다. 비파형동검과 같은 위세품이 존재하지 않는 울산지역에서는 어떤 것을 거점취락으로 봐야하는지에 대한 문제가 있습니다. 그래서 저는 울산지역의 환호유적을 살펴보았습니다.

울산지역의 환호의 특징은 구릉 사면에서 돌출된 구릉에 위치합니다. 주변을 조망하기 좋은 곳이라기보다는 오히려 주변에서 잘 보이는 곳이라고 생각합니다. 환호로 둘러싸인 내부공간의 가장 높은 곳은 환호면보다 해발고도가 높습니다. 그래서 완만한 경사면에서는 환호유적이 확인되지 않습니다. 환부 내부에 주거지 수가 적거나 없는 경우도 있습니다. 하천과 넓은 평야를 앞에 둔 교통로에 위치합니다.

울산 검단리유적입니다. 평면적으로도 돌출된 구릉입니다. 단면상에서도 약간 내려오다가 다시 높아지는 곳입니다(도22). 이곳이 검단리유적이 위치하는 곳입니다(도21). 앞에 평야와 하천이 있고, 교통로에 위치하며, 주변을 조망하기 좋은 곳입니다. 돌출된 검단리유적이 보이는 이 면적이 이 일대의 거점취락의 범위가 아닌가 생각합니다(도23).

다음은 천상리유적입니다. 역시 평면적으로 돌출된 구릉에 위치하고 있습니다(도24). 검은 부분이 환호입니다. 앞에 평야가 있고, 구릉이 내려오다가 다시 약간 높아지는 곳입니다. 이 부분이 천상리유적에 해당됩니다. 천상리유적이 시각적으로 보이는 범위입니다(도26). 발굴, 지표조사를 통해 이 곳은 모두 청동기시대 유적이 분포하는 것으로 확인되었습니다.

연암동유적입니다. 보고서에서는 내부에 주거지가 한 동 있다고 하는데, 저는 동시기는 아니라고 생각합니다(도27). 산에서 내려온 구릉이 돌출되어 있고, 다시 약간 높아지는 부분에 위치하고 있습니다(사진10). 반대쪽에서 본 모습이며(사진11), 앞에 넓은 평지부분에서 잘 보이는 곳에 위치합니다. 방금 보신 연암동유적이 위치한 곳입니다(도28). 울산에서 경주를 향하는 교통로상에 위치합니다.

다음은 신현동유적입니다(도29·30). 시기 미상으로 보고되었지만, 청동기시대 환호일 가능성이 있다고 생각합니다. 동해안에서 울산으로 넘어가는 교통로에 위치하고 있습니다(도31). 최근에는 환호가 방어취락이 아니라고 많은 연구자들이 생각하고 있습니다. 환호 내의 주거지 수가 매우 적고, 완만한 사면에는 환호가 조성되지 않은 것도 이유가 될 수 있을 것이라 생각합니다. 그래서 내부공간은 상징적이고 의례적인 의미가 있는 제장으로 구획된 것이라고 생각합니다. 울산지역의 거점취락은 환호를 갖춘 취락과 환호유적의 가시권 내에 있는 취락의 복합체가

아닌가 생각해 보았습니다. 공간적 범위는 가시권 내에 들어오는 공간으로, 측정해보니 약 3km 이내였습니다. 이것은 서울대 김종일 선생이 2005년도에 이미 지적한 바가 있습니다.

검은 점들이 지금 현재의 울산지역 환호취락입니다(도 32). 이곳은 아직 조사되지 않은 부분입니다(사진 12). 입지로 보았을 때, 검은 점이 아닌 부분 중, 이 곳에서는 환호취락이 존재할 가능성이 있다고 생각합니다. 최근에 이 남쪽부분에서 청동기시대의 환호를 조사중입니다(사진 12). 천곡동쪽과 이쪽에서는 점토대토기 단계의 환호도 확인되었습니다(사진 13·14). 전부 교통로에 위치하며, 앞에 평야가 위치합니다. 지금 가리키고 있는 신화리유적에서는 청동기시대 환호는 확인되지 않았지만, 울산지역 최대규모의 청동기시대 취락이라고 생각합니다.

신화리유적 한 쪽 끝에서 확인된 점토대토기단계의 환호입니다. 항공사진입니다. 이부분이 점토대토기단계의 환호가 확인된 곳입니다. 지금 이쪽과 이쪽을 발굴 조사 중입니다. 이 곳은 동아대학교박물관에 의해 조사되었는데, 청동기시대 주거지가 150동 정도 발견되었습니다. 남북 2km, 동서 2km의 공간인데, 청동기시대의 환호는 확인되지 않았지만 조사가 진행되면, 청동기시대의 환호가 확인될 것이라고 생각합니다.

이것으로 발표를 마치겠습니다.

参考文献

安在晧 2006：『青銅器時代の集落研究』釜山大学校大学院博士学位論文

金漢植 2005:「京畿地域駅三洞類型の定立過程」(『ソウル・京畿地域の青銅器文化の類型と変遷』ソウル京畿考古学会)

李亨源 2002：『韓国青銅器時代前期の中部地域の無文土器編年研究』忠南大学校大学院修士学位論文

千羨幸 2003：『無文土器時代前期文化の地域性研究』釜山大学校大学院修士学位論文

金権中 2005：『北漢江流域の青銅器時代住居址研究』檀国大学校大学院修士学位論文

李秀鴻 2005：「検丹里式土器の視空間的位置と性格に対する一考察」(『嶺南考古学』36)

李秀鴻 2007：「蔚山地域の青銅器時代集落構造の変化」(『韓国青銅器学報』第2号)

裵眞晟 2005：「検丹里類型の成立」(『韓国上古史学報』48)

韓国考古学会 2007：『階層社会と支配者の出現』社会評論

無文土器時代前期の墓制

裵 眞晟（国立中央博物館）

はじめに

こんにちは。裵眞晟と申します。

今日私が発表するテーマは青銅器時代，あるいは無文土器時代前期の墓制です。普通青銅器時代といえばまず思い浮かぶものの一つに支石墓があります。無文土器社会は支石墓社会と同じという意味で使われていますが，支石墓は主に後期（先松菊里～松菊里段階），つまり青銅器時代でもっとも新しい時期に90％以上が集中して存在するものですから支石墓社会と同じという意味で捉えるのは間違っていると思います。

これまで前期の墓制は断片的に把握されてきましたし，韓国の集落研究においても松菊里段階以前の前期集落は墓を除いた住居址を中心に研究されている状況です。しかし，2000年以降，全国的に前期の墓が確認される事例が増えているので，今日は発表を通じて遺跡の調査例を紹介し，あわせて私自身も研究を深めるきっかけにしたいと思います。

Ⅰ　前期の墓制と特徴

1　土壙墓・石棺墓

まず前期墓制の種類と特徴についてみてみます。前期の墓制には土壙墓，石棺墓，周溝墓，支石墓があります。まず土壙墓と石棺墓からみてみます。要約すると，長壁に1～2枚の板石，あるいは割石を置くものが多い。板石や割石は現在まで残っていませんが，木棺の補強石として使われたと考えられます。普通石棺墓といえば四壁のすべてを板石で整然に囲むものを予想しますが，前期の場合は周溝墓以外にそのような例はほとんどありません。それでは各地の事例をみてみましょう。

慶尚北道にある海平月谷里遺跡です（図1）。前期の墓2基が調査されました。ほかの遺構は三国時代の遺構です。2基が並んでいるところからみておそらく同時に築造されたと考えられ，そのうちの1基から石剣が出土しました。遺跡は丘陵の頂上と稜線部に立地します。図から壁面の築造状態をある程度確認できます。写真1をみると，床面に二つの割石が南北に置いてあるのがわかります。おそらく木棺があったとしたら死者を安置する台，あるいは木棺の台石として使われたのではないかと考えられます。出土遺物は前期の代表的な遺物である二段柄式石剣，無頸式石鏃，丹塗磨研土器です。

月谷里遺跡から遠くないところにある金泉新村里遺跡で前期の墓が確認されました（図2）。やはり2基の墓が並んで丘陵の頂上部に築造されています。特異な点は墓の中から石斧が出土したことです。普通，墓の中からは石剣，石鏃，丹塗磨研土器，玉製品などが出土しますが，石斧が出土した例はほとんどありません。1号墓の側面にはやはり板石1～2枚が不定形に置いてあり，床面には月谷里遺跡にみられたように板状の割石2枚が置いているのが特徴です（写真2）。2号墓も1号墓とほとんど同じ構造です（写真3）。

金泉玉栗里遺跡でも前期の可能性が高い墓が見つかっています（写真4）。

慶尚北道の倭館洛山里遺跡では3基の墓が調査されましたが，2基は丘陵の頂上部，1基は斜面に立地しています。上の写真が丘陵頂上部の2基，下の写真が斜面の1基です（写真5）。構造をみると，床面に二つの大きな割石が置いてあること，壁面に不定形の板石があることから，前にみた遺跡と類似する墓です。

1970年代から知られていたのが晋州新塘里遺跡で，やはりこれまで見てきた遺跡と類似した構造を持ちます（図3）。調査当時から最近まで，このような墓は石棺墓と呼ばれることが多かったのですが，土壙墓と呼ぶ方が良さそうです。

泗川梨琴洞遺跡は後期を中心とする遺跡ですが，前期の墓が何基かあります。図4が代表的な前期の墓で，蓋石がある石蓋土壙墓と考えているものです。出土遺物（写真6）は，赤色磨研土器です。

蔚山屈火里遺跡で調査された墓は土壙の構造と出土遺物からみて前期の墓である可能性が高いです（図5）。

2　石棺墓

慶州月山里遺跡では前にみた墓の構造と壁面の状態が異なる石棺墓が見つかっています（写真7）。大きな板石1～2枚を使ったものではなくて，割石を積み上げて築造したものです。図6は遺跡全体の遺構配置図ですが，前期の墓は1基しかありません。石棺墓の周

りに多くの柱穴が発見されているのが特異な点です（写真8）。類例がないので確実ではありませんが，報告者たちは埋葬儀礼と係わる施設の痕跡ではないかと推定しています。よくみると石棺の長軸に沿って左側は整然と配置されていますが，右側は不定形に配置されています。まだ類例がほとんどありませんからこれからは墓の周りも気にして調査する必要があると思います。

江原道坊内里遺跡の石棺墓です（写真9）。赤色磨研土器が出土していて，土器の型式からみて前期の可能性があると考えられます。この石棺の構造は前の例とは異なり長い板石を使った典型的な石棺墓の形態です。

3　周溝（石棺）墓

周溝石棺墓または周溝墓と呼んでいます。最近よく見つかる墓で，大きく細長方形，方形，円形に，また片方だけ周溝をめぐらしたものの四つがあります。埋葬主体部は半地上式の可能性もあり，また埋葬主体部がない例もかなりあります。現在は残っていませんが，墳丘や封土も存在した可能性があります。これに係わる農耕関連の埋葬儀礼の痕跡も確認されています。

江原道でもっとも有名な遺跡である春川泉田里遺跡です（図7）。写真10の上のほうがナ地区の墳墓地域で，下が住居地域です。航空写真（写真11）でみると周溝墓の長さはもっとも長いものが約42mあります。ナ地区の細部写真をみると，上のほうには重複の痕跡もありますが，それほど大きな時間差はなく前期後半のなかでの短い時間差と考えられます。カ地区では，住居址と重複している様子をよく確認でき，住居址より周溝墓の方が古いことがわかります（写真12）。

そのなかの一つ，6号墓は真ん中に埋葬主体部をもち，細長方形に長く造られた周溝墓です（図8）。断面をみると埋葬主体部の床面のレベルが周溝の床面のレベルより高いのがわかります。おそらく埋葬主体部の上部は後世の耕作によってある程度破壊されたと思います。この埋葬主体部は周溝の床面より高いため，半地上式の構造ではないかと推定されます。そして，ここで特異な点は周溝の内部で確認された焼土層の中から炭化種子（アズキ）が発見されたことです。農耕関連の埋葬儀礼の痕跡と報告されています。

4号墓の構造は6号墓とほとんど同じです（図9）。埋葬主体部と周溝の床面のレベル差や上部が破壊されていることなど，ほとんど同じ構造です。

3号墓の特異な点は埋葬主体部のとなりに附属遺構が確認されたことです。出土遺物がなくて性格は不明ですが，埋葬儀礼と係わる施設ではないかと推定されます（写真13）。

5号墓の構造をみると前にみた土壙墓や石棺墓とは異なり，周溝墓は長い板石を用いて築造されていることがわかります（写真14）。これもやはり上部は半分程度が破壊されています。

忠清道烏石山遺跡では，前の泉田里遺跡とは異なって埋葬主体部が割石で築造されています（写真15）。

忠清道で確認された周溝墓の云田里遺跡です（図10）。ここでは青銅器時代に比定された3棟の住居址と1基の墓が確認されました。周溝石棺墓の細部写真をみると，若干傾斜面にあるので，ある程度周溝が削られてしまった可能性もありますが，全体がそうではないため，もともと片側だけに周溝をめぐらしていたのではないかと考えられます。なかから赤色磨研土器が1点確認されました。短壁をみると下のほうは1枚の石を横に立てて，上のほうは2枚の石を縦に立てました。長壁をみると片方は石を立てて築造していますが，土器が副葬された空間をみると，2枚の石を横たえて積んだようです。このように石を積み短壁と長壁との間に空間をつくってそこに土器を副葬しています（写真16）。長壁のある部分に土器を副葬する例は後期によくみられますが，前期の例はこれが唯一だと思います。

江原道の渋川哲亭里遺跡では周溝墓が調査されました。周溝はもっとも長いのが約43mあります（写真17）。周溝墓は埋葬主体部がない場合もありますが，もともと存在しなかったと考えるよりは，後世に削平されてなくなった可能性が高いと考えられます。写真18は6号墓で，前にみた泉田里遺跡のものと類似した構造をしています。

晋州大坪里玉房8地区で確認された周溝墓には2基の主体部がありますが，周溝で囲まれた墓だけから磨製石剣が出土しました（図11）。円形の周溝や周溝がない墓からは出土していません。したがって墓の階層差をみせる代表的な事例として取り上げました。

4　支石墓

前期の支石墓の例はほとんどありませんがごく最近，調査された例を含めると比来洞，新岱洞，顔子洞などがあります。

鎭安顔子洞1号支石墓は図12の下のほうに単独であるものが前期のものです。構造をみると，外側から埋葬主体部にかけて高くなる，やや墳丘状に築造されています。埋葬主体部もある程度地上に露出した半地上

式の構造です。周溝墓のような墳丘や封墳の効果を狙ったと考えられます。これは写真19をみると，外側に区画石を積んだ後から内部を築造した構造と考えられます。

大田比来洞遺跡の支石墓です。この丘陵の末端部に1号と2号があり，反対側の丘陵に3号があります。前にみた土壙墓や石棺墓のように丘陵の頂上部，あるいは稜線部に立地する共通点があります（図13）。写真20は1号の上石で，写真21は上石を外した写真です。これは地面に直接墓を築造したものではなく，0.5～1m程度盛土した後，その上に墓を築造したと考えられています。前の周溝墓や顔子洞の支石墓のように墳丘の効果を狙ったものと考えられます。丘陵の稜線部や頂上部に立地するため，墳丘の視覚的効果はより大きかったと考えられます。

大田新岱洞遺跡の支石墓（図14）は上石が残っていませんでしたので，支石墓の下部構造と判断できます（写真22）。

江原道アウラジ遺跡から確認された3号墓です（写真23）。これも上石は残っていませんでしたが，支石墓の下部構造と判断されます。

最近報告された洪川外三浦里遺跡ですが，前期の墓が1基調査されました。図15の上のほうには住居址が分布していますが，1号，2号，4号が前期の住居址と判断されます。図16は支石墓の下部構造です。割石を用いてぎっしり積んだ点はアウラジ遺跡の例と類似していますが，異なる点はここに円形の竪穴があることです。このなかには砂質のスミがいっぱい入っていったそうです。墓の築造と係わる儀礼の痕跡ではないかと思います。

Ⅱ　分布と時期

前期にはすでに住居域と墓域が分離していたと考えられます。立地は後期と似てますが，単独墓や2基が並列する場合が多い点が異なり，後期のような群集傾向もみられません。

特定な地域に集中せずに全国的に万便なく分布していて，4種類の墓の地域的な偏りは見られません（図17）。時期はだいたい前期後半で，そのなかで土壙墓がもっとも古く現れます。墓の分布図をみると，土壙墓は江原道，京畿道，慶北，慶南地域など全国的に分布しています。石棺墓の数はまだ少ないですが，今後，さらに増加すると思います。周溝墓も江原嶺西，忠清道，慶尚道などさまざまな地域で確認されています。支石墓も特定地域に偏ることはありません。

Ⅲ　副葬品分布と階層性

次に副葬品についてみてみます。石剣が出土することを根拠に階層問題との係わりで研究されることが多いです。墓の種類や分布地域に係わらず，ほとんど似たような副葬品をもっていますが，墓の立地や剣を副葬する行為などに階層性をみることが出来ると考えています。

類型化したのが図18です。単独で存在する墓にはほとんど石剣と銅剣が副葬されています。2基が並んで築造されている場合，剣はいずれか1基だけに副葬されています。その他，3～4基群集する場合は剣が副葬された墓を中心に分布しています。したがって当時の人びとのすべてが墓を造るのではなく，一部の人びとだけに限定されていたと考えられます。

以上，墳墓の配置と威勢品の有無から①墳墓を築造して‘剣’という威勢品を副葬する階層，②墳墓を築造する階層，③墳墓を築造しない階層，の3つが想定されます。

Ⅳ　築造の背景と系譜

次は築造背景と系譜に関する問題です。墓自体は新石器時代からありますが，新石器時代の墓に系譜を求めることは出来ません。まだ青銅器時代早期の墓は確認されていませんし，前期前半に確実に比定できる墓もほとんどありません。今回発表したほとんどの墓が前期後半に当たり，この時期から全国的に墓の築造が始まります。

青銅器時代早期は，標識となる突帯文土器が中国東北地方と関係が深いことから，東北地方からの住民の移住や影響によって始まったと説明されています。また韓半島南部地域は早期から農耕社会が始まったと言われていますが，農耕社会が始まってすぐ墓が造られ剣の副葬が始まったのではなく，前期になったからこそ墓や剣が出現します。石剣や石鏃のような武器類の副葬は，清川江以南に斉一性がみられ，その背景には中国東北地方の遼寧地域を中心とする地域との深い関係があると考えられます。早期に始まった農耕社会が一段階アップグレードするための起爆剤として現われるのが墓の築造や剣の副葬などではないでしょうか。このようなプロセスを経たからこそ松菊里文化のような発達した文化が誕生できたと考えられます。前期の墳墓造営と埋葬儀礼の発達は，社会の再生産，農耕社

会の持続的な維持と密接な関係が見いだされます。

前期後半の特徴はこれ以外にも土器の多様な地域性，銅剣の出現，遼寧地域との関係がうかがえる横帯区画文土器の出現などをあげることができます。

前期研究の場合，集落だけではなく墓の研究をもっと進める必要があるでしょうし，今後，早期－前期－後期の時期区分について考える際にも，前期の墳墓の問題が大きく関係してくると予想されます。

以上，発表内容はここまでです。これからも系譜や墓が造られるようになった背景について考えるには中国東北地域や北朝鮮の事例との比較が必要になってきます。ありがとうございました。

参考文献

李柱憲 2000：「大坪里石棺墓考」（『慶北大学校考古人類学科 20 周年記念論叢』）
江原文化財研究所 2008：『泉田里』
金権中 2008：「青銅器時代の周溝墓の発生と変遷」（『韓国青銅器学報』第 3 号）
中村大介 2008：「東北アジアにおける支石墓の成立と伝播」（『中国史研究』第 52 輯）
河仁秀 2003：「南江流域無文土器時代の墓制」（『晋州南江遺跡と古代日本』）
裵眞晟 2007：『無文土器文化の成立と階層社会』書景文化社
嶺南文化財研究院 2006：『慶州月山里山 137－1 番地遺跡』

図1　海平 月谷里

写真1　海平 月谷里

写真2　金泉 新村里1号墓

図2　金泉 新村里

写真4　金泉 玉栗里

写真3　金泉 新村里2号墓

写真5　倭館 洛山里

図3　晋州 新塘里

図4　泗川 梨琴洞51号墓

写真6

図5　蔚山 屈火里

写真7　慶州 月山里

図6　慶州 月山里

写真8

写真9　江陵 坊内里

図7　春川 泉田里

写真10　春川 泉田里

写真11　春川 泉谷里Aーナ

写真12　Aーカ

図8　泉谷里6号墓

図9　4号墓

写真13　A－3号墓

写真14　A－5号墓

図10　天安 云田里

写真15　舒川 烏石山

写真16　天安 云田里周溝墓

写真17　洪川 哲亭里

写真18　6号墓

図11　晋州 玉房8地区

図12　鎭安 顔子洞

写真19　1号墓出土

写真20　1号墓

図13　大田 比來洞

写真21　1号墓

図14　天安 新岱洞

写真22

写真23　旌善アウラジ3号墓

図15　洪川 外三浦里

図16　支石墓

図17　墓の分布

図18　前期墳墓の副葬品

無文土器時代前期의 墓制

裵 眞晟(國立中央博物館)

들어가며

안녕하십니까. 배진성입니다.

오늘 제가 발표할 주제는 청동기시대, 혹은 무문토기시대 전기의 묘제입니다. 보통은 청동기시대하면 가장 먼저 머리에 떠올리는 것 중 하나가 지석묘입니다. 그래서 보통 무문토기사회라고 하면 지석묘사회와 같은 의미로 쓰이고 있습니다. 그런데 문제는 지석묘하면 주로 후기(선송국리~송국리단계), 즉 청동기시대 중에서도 가장 늦은 시기에만 90% 이상이 집중되어 있습니다. 그동안 전기의 묘제에 대해서는 단편적으로만 파악되어 왔고, 그래서 아마 남한의 취락연구에 있어서도 송국리 이전 전기의 취락은 무덤없이 주거지 중심으로 연구되고 있는 실정입니다. 그렇지만 근래 2000년대 이후가 되면서 전국적으로 전기 분묘의 사례도 증가하고 있기 때문에, 오늘 이 발표를 통해 해당 유적의 사례도 소개하고 저 자신도 이제부터 연구를 시작해 볼 계기로 삼고 싶습니다.

Ⅰ 전기의 묘제와 특징

1 토광묘·석관묘

먼저 전기 묘제의 종류와 특징에 대해 간단히 살펴보겠습니다. 전기 묘제의 종류라고 한다면, 크게 토광묘, 석관묘, 주구묘, 지석묘 이 네 가지로 나눌 수 있습니다. 이 가운데 먼저, 토광묘와 석관묘를 살펴보겠습니다. 특징을 요약하자면, 대략 장벽에 한 두매의 판석 혹은 할석이 놓여 있는 예가 많습니다. 아마 현재는 남아있지 않지만, 이러한 할석이나 판석은 목관의 보강석으로 사용되지 않았을까 생각합니다. 흔히 석관묘라고 하면 네벽 전체가 정연하게 둘려진 석관묘를 예상합니다만, 전기의 경우에는 주구묘의 매장주체부를 제외하고는 그런 예는 드문 것 같습니다. 이와 관련된 사례를 몇 가지 살펴보겠습니다.

이것은 경상북도 해평 월곡리유적입니다(도1). 여기에서는 청동기시대 전기의 무덤 2기가 조사되었습니다. 주위의 나머지 유구는 청동기시대가 아닌 삼국시대의 유구입니다. 아마도 2기가 나란히 있는 것으로 봐서 동시에 축조된 것으로 판단되며, 석검은 한 기의 무덤에서만 출토됩니다. 입지는 구릉 정상 혹은 능선부에 위치합니다. 도면에서 벽면의 축조상태를 어느 정도 확인할 수 있습니다. 앞의 도면의 사진입니다(사진1). 2기가 나란히 조사되었고, 벽면에 드문드문 할석이 놓여진 상태입니다. 바닥면에서 특징적인 것은 큰 할석 2개가 아래 위로 놓여져 있는 것입니다. 그래서 아마 목관이 있었다면, 시상대 혹은 목관의 받침대 역할을 했던 돌들이 아닌가 생각합니다. 보다 세부적으로 본 사진입니다. 출토유물은 전기의 대표적인 이단병식석검, 무경식석촉, 단도마연토기입니다.

이것은 월곡리유적에서 멀지 않은 곳인 김천 신촌리유적인데, 전기의 분묘가 발견되었습니다(도2). 역시 2기의 무덤이 나란히 구릉 정상부에 조성되어 있습니다. 특이한 점은 석부가 매장주체부 안에서 출토된 것입니다. 보통 분묘 내부의 출토품은 석검, 석촉, 적색마연토기, 옥제품 등에 한정됩니다만, 석부가 출토된 예는 드문데 그 이유는 아직 잘 모르겠습니다. 신촌리유적의 사진입니다. 1호묘입니다. 역시 측면에 판석이 한 두매 부정형하게 놓여져 있고, 앞의 월곡리유적과 같이 바닥면에는 판상의 할석이 2매 있는 것이 특징입니다(사진2). 2호묘입니다만, 1호와 거의 같은 구조를 가지고 있습니다(사진3).

이것은 김천 옥율리유적입니다만, 전기의 분묘일 가능성이 많습니다(사진4). 이것 역시 경상북도에 있는 왜관 낙산리유적입니다. 여기에서는 3기의 무덤이 조사되었는데, 2기는 구릉 정상부, 1기는 사면에 위치하고 있습니다. 위의 사진이 구릉정상부에 위치하는 2기의 분묘, 아래의 사진이 사면에서 조사된 분묘입니다(사진5). 구조를 보면 바닥면에 2개의 큰 할석이 깔려있고, 벽면에 부정형의 판석이 있는, 앞에서 본 유적들과 비슷한 분묘인 것 같습니다.

이것은 70년대 알려진 진주 신당리유적으로, 앞의 유적과 비슷한 구조를 가진 분묘입니다(도3). 그 당시라든지, 최근 전까지만 해도 이러한 무덤들은 석관묘로 불리는 경우가 많았지만, 앞의 예를 본다면 석관묘라기보다는 토광묘라 부르는 것이 좋을 듯 합니다.

다음은 사천 이금동유적으로 주로 후기의 유구들이 많은데, 그 중 전기 분묘가 몇 기 있습니다만, 이것이 대표적인 전기의 분묘입니다(도4). 개석이 있는 석개토광묘라고 할 수 있습니다. 출토 유물 사진인데, 위의 것이 적색마연토기입니다(사진6).

울산에 있는 굴화리유적에서 조사된 무덤인데, 역시 토광의 구조와 출토 유물로 보아 전기의 분묘일 가능성이 높습니다(도5).

2 석관묘

이제부터는 석관묘를 살펴보겠습니다만, 이것은 경주 월산리유적으로서 앞에서 본 분묘 구조와는 벽면의 축조상태가 구분이 되는 사례입니다(사진7). 석관묘이지만, 큰 판석을 한 두매 사용한 것이 아니라 할석을 이어서 축조한 것입니다. 유적 전체의 유구분포도인데(도6), 주거지도 있고, 전기의 무덤은 단 1기만 발견되었습니다. 석관묘 주위에 많은 주혈이 발견된 것이 특이한 점입니다(사진8). 유사한 사례가 거의 없어 확실하진 않습니다만, 매장 의례와 관련된 시설물의 흔적이 아닐까라고 보고자들은 추정하고 있습니다. 자세히 보면, 석관의 장축을 따라 왼쪽은 정연하게 배치되어 있으며, 오른쪽은 부정연하게 배치되어 있습니다. 아직 사례가 많이 없습니다만, 앞으로 조사할 때 분묘의 주위를 신경써서 봐야 할 필요성이 있다고 생각합니다.

강원도 방내리유적의 석관묘입니다(사진9). 적색마연토기가 출토되었는데, 토기의 형식으로 보면 전기의 가능성이 있다고 생각합니다. 문제는 이 석관의 구조는 앞에서 본 예와는 다르게 긴 판석을 이용한 전형적인 석관묘의 모습입니다.

3 주구묘

그 다음 주구묘에 대해 살펴보겠습니다. 주구석관묘라고도 하며, 주구묘라고도 합니다. 최근 많이 발견되고 있는 무덤으로, 크게 세장방형, 방형, 원형, 한 쪽에만 주구를 돌린 것, 이렇게 네 가지 정도로 나눌 수 있습니다. 매장주체부는 반지상식일 가능성도 있으며, 또 매장주체부가 없는 사례도 꽤 있습니다. 현재는 남아 있지 않지만, 분구라든지 봉토의 존재도 있었던게 아닌가 추정하고 있으며, 이와 관련된 농경관련 매장의례의 흔적들도 나오고 있습니다.

이것은 강원 영서지방 중 가장 유명한 유적 중 하나인 천전리유적입니다(도7). 위쪽에 있는 나지구가 분묘지역이며, 아래쪽이 주거지역입니다(사진10). 위에서 본 사진입니다(사진11). 주구묘 길이가 가장 긴 것이 42m 정도 됩니다. 나지구의 세부사진입니다(사진12). 위쪽을 보면 중복의 흔적도 있습니다만, 그렇다고 큰 시차가 나는 것 같지는 않습니다. 전기 후반 안에서의 작은 시간차 정도로 생각됩니다. 가지구인데, 주거지와의 중복관계가 잘 나타나 있습니다. 주거지보다 이른 시기의 주구묘라는 것을 알 수 있습니다. 그 가운데 하나인 6호묘입니다(도8). 가운데 매장주체부가 있고 세장방형으로 길게 형성된 주구묘입니다. 단면을 보면 매장주체부의 바닥면이 주구의 바닥면보다 높습니다. 아마 이 매장주체부의 상부는 후대의 경작으로 인해 어느 정도 파괴 된 상태입니다. 이 매장주체부는 완전한 지하식이 아니라 주구의 바닥면보다 높기때문에 반지상식의 구조가 아니었을까 추정됩니다.

그리고 여기서 좀 특이한 점은 주구 안에서 소토층이 확인되었는데, 그 안에서 탄화곡물, 팥이 발견된 것입니다. 농경관련 매장의례의 흔적이라고 보고되어 있습니다. 4호묘이며, 역시 구조는 6호묘와 거의 같습니다(도9). 매장주체부의 바닥면과 주구 바닥의 차이라든지 상부가 파괴된 모습이라든지, 거의 같은 구조입니다. 이것은 3호묘인데, 특이한 점으로 매장주체부 바로 옆에서 부속 유구가 확인된 것입니다(사진13). 출토유물이 없어 성격은 불분명하지만, 당시의 매장의례와 관련된 시설이 아닌가 추정됩니다. 5호묘의 구조를 보면, 앞에서 본 토광묘나 석관묘와는 달리 주구묘는 긴 판석을 이용해 축조하고 있습니다(사진14). 이것 역시 상부는 절반 정도가 파괴되어 있습니다.

충청도 오석산유적인데, 첫 발표에서도 언급되었던 유적입니다(도10). 이 묘는 앞의 천전리유적과는 달리 매장주체부가 할석으로 축조되어 있습니다. 그 다음 충청도에서 확인된 주구묘 중 하나인 천안 운전리유적입니다. 여기에서 청동기시대 유구는 1, 2, 3호 주거지 3기와 석관묘는 우측편으로 조금 떨어진 부분에 1기 발견되었습니다. 주구석관묘의 세부사진 세부사진입니다. 약간 경사면이기 때문에 어느 정도 주구 자체에 결실은 있을 수 있지만, 전체가 그런 것은 아니며, 원래 주구를 한 쪽면에만 돌린 것으로 생각됩니다. 이 안에서는 적색마연토기가 한 점 발견되었는데, 출토지점은 이곳입니다(사진16).

단벽을 보면 아래쪽은 돌을 뉘어서 가로로 세웠고, 반대로 위쪽은 세로로 2매를 세웠습니다. 장벽을 보면 한 쪽은 돌을 세워서 축조하였는데, 토기가 부장된 공간 옆을 보면, 2매의 돌을 옆으로 뉘어서 쌓았습니다. 이렇게 쌓아서 단벽과 장벽사이 공간을 마련해 그 공간에 토기를 부장했습니다. 장벽 사이에 토기를 부장한 예는 후기에 많이 보이는데, 전기에 보이는 예는 이것이 유일하다고 생각합니다.

강원도 철정리유적인데, 주구묘가 조사되었습니다. 주구는 가장 긴 것이 43m에 달합니다(사진 17). 주구묘는 이렇게 매장주체부가 없는 경우도 간혹 있는데, 원래 없었다기보다 주구와 매장주체부 바닥의 레벨 차가 있기 때문에, 원래는 있었지만 삭평되고 없어진 것이 아닌가 생각합니다. 6호묘이며, 앞에서 보았던 천전리와 비슷한 구조입니다(사진 18).

진주 대평리 옥방 8지구에서 조사된 석관묘입니다. 여기도 주구묘가 있는데, 주구묘 안에는 2기의 분묘가 있고 주구로 둘러쌓인 무덤에서만 마제석검이 출토됩니다(도 11). 원형의 주구라든지 주구가 없는 무덤에서는 석검이 출토되지 않습니다. 그래서 분묘의 계층차를 보여주는 대표적인 사례로 거론되고 있습니다.

4 지석묘

다음은 지석묘입니다. 전기의 지석묘 사례도 일부에 지나지 않습니다만, 근래 조사된 사례를 포함한다면, 비래동, 신대동, 안자동 등이 있습니다.

진안 안자동 1호 지석묘에 대해 살펴보겠습니다. 위쪽은 후기의 분묘이며, 아래쪽에 단독으로 있는 것이 전기의 분묘입니다(도 12). 구조를 보면, 가장자리에서 중앙의 매장주체부로 올라가면서 약간 높게 분구상으로 축조되었습니다. 매장주체부도 어느 정도 지상에 노출된 반지상식의 구조를 하고 있습니다. 앞에서 보았던 주구묘와 비슷한 분구라든지 봉분의 효과를 노린 것이 아닌가 생각합니다. 이것은 사진이며, 바깥쪽 구획석을 쌓고 나서 내부를 축조한 구조인 것 같습니다(사진 19).

다음 대전 비래동 지석묘입니다. 2개의 구릉으로 나뉘어지는데, 구릉 말단부에 1, 2호가 있고, 반대쪽 구릉에 3호가 있습니다. 앞에서 보았던 토광묘나 석관묘처럼 구릉 정상부 혹은 능선부에 위치하는 공통점이 있습니다(도 13). 1호 상석의 모습이며(사진 20) 상석을 제거한 모습의 사진입니다(사진 21). 이것은 지면에 바로 무덤을 축조한 것이 아니라 0.5~1m 정도 성토를 한 후, 그 위에 무덤을 축조했다고 합니다. 앞의 주구묘나 진안 안자동 1호 지석묘처럼 분구의 효과를 노린 것이 아닌가 생각합니다. 이렇게 구릉 능선의 말단부나 정상부에 위치함으로 해서, 분구의 효과는 더 컸다고 생각합니다.

이것은 신대동유적이며(도 14), 첫번째 발표에서 보았던 사진입니다(사진 22). 상석은 결실되어 남아있지 않지만, 지석묘의 하부구조로 판단됩니다. 강원도 정선 아우라지유적에서 조사된 3호묘인데, 상석은 없지만 지석묘의 하부구조가 아닌가 생각됩니다(사진 23).

이것은 근래에 보고된 홍천의 외삼포리유적인데, 전기의 분묘가 1기 조사되었습니다(도 15). 위쪽에는 주거지들이 분포하고 있는데, 전체가 다 관련된 것이 아니고, 1호, 2호, 4호가 전기의 주거지라고 판단됩니다. 지석묘 하부구조의 도면입니다(도 16). 활석으로 촘촘하게 쌓은 것은 정선 아우라지유적의 예와 유사합니다. 여기서 특이한 점은 이쪽에 원형의 수혈이 있다는 것입니다. 이 안에서는 사질의 재가 가득차 있었다고 합니다. 무덤의 축조와 관련된 의례의 흔적이 아닐까 생각합니다.

Ⅱ 분포와 시기

앞에서 본 사례들을 종합해 보겠습니다. 역시 후기와 마찬가지로 주거구역과 분묘구역은 분리되었다고 생각합니다. 입지는 후기와 비슷합니다만, 특히 다른 점은 단독묘나 2기가 병렬로 배치되는 것이 많고, 후기처럼 군집을 이루지 않는다는 것입니다.

특정 지역에 치우치지 않고 전국적인 분포를 보이고 있고, 앞에서 4종류를 들었지만 종류에 따른 지역적인 편중도 보이지 않습니다(도 17). 시기는 대부분 전기후반에 속한다고 생각되며, 그 중에서는 토광묘가 가장 이르지 않을까 생각합니다. 이것이 분묘 분포도입니다. 토광묘는 강원도, 경기도, 경북, 경남지역 등 전국적으로 분포합니다. 석관묘는 수량은 많지 않지만 앞으로 늘어날 것으로 생각합니다. 주구묘도 강원 영서, 충청도, 경상도 등 다양하게 확인되고 있습니다. 지석묘 역시 특정지역에 편중되지 않습니다.

Ⅲ 부장품과 계층성

다음으로 부장품에 대해 살펴보겠습니다. 석검이 출토되기 때문에 계층 문제와 관련해서 연구되고 있습니다. 무덤의 종류나 분포 지역에 관계없이 부장품은 거의 유사합니다. 앞에서 보았던 무덤의 입지라든지 검을 부장하는 행위 등 분묘의 축조를 보면 조금씩 계층성이 보이는 것 같습니다.

유형화 시켜보면 다음 표와 같습니다(도 18). 위의 것은 단독으로 존재하는 것으로, 대부분 석검과 동검을 포함하고 있습니다. 2기가 나란히 조성된 경우 검은 한 기에만 부장됩니다. 그 외 3~4기 등이 있는 경우에도 검이 부장된 무덤을 중심으로 분포하고 있습니다.

종합해서 보면, 대부분의 취락민이 무덤을 축조한 것이 아니라 무덤의 축조 자체는 일부 사람들에게만 한정되었을 것이라 생각합니다. 크게 보자면 이렇게 세 가지 정도로 나누어 볼 수 있습니다.

Ⅳ 축조배경과 계보

다음은 축조배경과 원류에 대한 문제입니다만, 무덤 자체는 신석기시대에도 있지만, 신석기시대와는 연결되지 않습니다. 청동기시대 조기에도 무덤은 확인되지 않습니다. 전기 무덤 중 전기전반이라고 확실히 할 수 있는 예도 거의 없는 것 같습니다. 앞에서 보았던 전기 분묘의 대부분이 전기후반에 해당되며, 이때부터 전국적으로 갑자기 분묘축조가 시작됩니다.

아래쪽의 내용은 농경사회와 관련시킨 내용입니다만, 농경사회의 발달에 관한 보편적인 설명틀을 적용시킨 내용입니다. 청동기시대 조기의 시작은 중국 동북지방 돌대문토기와 관계가 많기 때문에, 그 지방 주민들의 이주나 영향이 많이 거론되고 있습니다. 그때부터 한반도 남부지역은 농경사회라고 말하고 있습니다. 그 때 농경사회가 시작되고 나서 바로 무덤이나 검이 등장한 것이 아니고, 무덤이나 석검이 등장한 것은 전기가 되어서입니다. 석검이나 석촉과 같은 무기류를 부장하는 습속은 청천강 이남에서 전국적인 제일성을 보이고 있습니다. 그 이면에는 중국 동북지방, 요령지역을 중심으로 한 지역과 관련이 깊은 것으로 생각됩니다. 조기에 시작된 농경사회가 한 단계 업그레이드 되기 위한 기폭제로 나타나는 것이 분묘의 축조, 검의 부장 등이 아닌가 생각합니다. 이런 과정을 거쳤기 때문에 송국리문화와 같은 발달된 문화의 탄생이 가능하지 않았나 생각합니다.

전기 후반의 특징은 몇 가지 더 들 수 있는데, 토기의 지역성, 동검의 출현, 요령지역의 토기와 관련된 횡대구획문토기의 출현 등, 이런 것들이 분묘가 등장하는 전기후반의 특징적인 요소입니다. 전기에서도 취락뿐만이 아니라 분묘에 관해서도 보다 더 연구가 이루어져야 할 것 같고, 더불어 조기, 전기, 후기 시기 구분에 대해 재고할 때, 전기의 분묘라는 요소는 크게 작용하지 않을까 생각합니다.

이상 발표 내용은 여기까지입니다. 앞으로도 원류라든지 왜 분묘가 출토했는지에 대해서는 중국 동북지역이나 북한의 사례와도 많은 비교가 필요하다고 생각합니다. 이상 발표를 마치겠습니다.

第2部　歴博研究報告第149集の意義と課題

司会・進行　石黒立人・若林邦彦

若林（同志社大学）

司会・進行の同志社大学若林邦彦です。昨日は日韓先史時代の集落研究について韓国の3人の先生にお話しいただきましたが，今日は弥生時代の集落研究についてテーマごとに五つのセッションに分け，共同研究の成果と討論をおこないます。最後に韓国の先生にも加わってもらって会場の研究者と総合討論をおこなうことになっています。それではまず今日のシンポジウムの趣旨を国立歴史民俗博物館（以下，歴博）の藤尾慎一郎さんに説明していただきます。

藤尾（歴博）　**趣旨説明**

今回，シンポジウムをおこなうに至った経緯と趣旨説明をおこないます。平成17～19年度に歴博でおこなった基盤研究「縄文・弥生集落遺跡の集成的研究」（研究代表藤尾慎一郎）の成果報告書を2009年3月に『国立歴史民俗博物館研究報告』第149集として刊行しました。これまでの歴博のやり方ではこれで共同研究は終了，お疲れ様でした，となるわけです。

しかしそれでは自分たちの書いた論文が，全国の弥生研究者にどのように受け取られたのか，いいのか，悪いのか，評価を知ることができない，出しっぱなしな訳です。しかしそれではおもしろくないという外部の共同研究員の発言をきっかけに，評価を直接聞いたり問題点を討論したりする機会を設けることとなりました。またどうせやるなら歴博ではなく弥生の本場の関西でやることとなったのです。共同研究員に若林さんがいらっしゃいましたので同志社大学で会場のお世話をしていただくこととなりました。

刊行から半年がたち，いくつか修正しなければならない点も出てきていますし，今日，皆さんと議論することでまた新たな研究テーマが生まれる可能性だってあります。研究というのはきりのいいところで終わるのではなく，次々に循環していき，その過程で新しい研究が創造できればよい，と望んでいるところです。それではセッションの中身を簡単に紹介しておきます。

昨日韓国の30代の若い研究者によって青銅器時代の集落研究に関する発表が3本あり，そのなかでも李亨源先生の発表はAMS－炭素14年代にもとづく年代観を使った発表でした。考古学では土器一型式の存続幅を求めることが難しいがために，これまではすべての土器型式の存続幅を均等と仮定した上で集落論を展開してきましたが，AMS－炭素14年代測定によって土器型式の存続幅が不均等であることがわかってくると，今後，どのような集落論を展開していけばよいのかという課題に突き当たります。こうした問題について考えるのが今日1本目のセッションであります。

レジュメにあります地図と年表をもとに議論を続けていきたいと思います。

レジュメ集の第2部は研究報告第149集所収論文の抜粋です。要旨はそのまま，図は一人あたり4頁におさまるように選んでもらっています。本日の議論に必要な資料は基本的に盛り込んでありますのでご利用ください。それでは第1セッションにはいっていくことにします。

【第1セッション】集落論の基礎的な方法論について

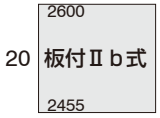
藤尾

第1セッションは，私，藤尾と鳥取県埋蔵文化財センターの濵田竜彦さんの二人でおこないます。

集落論の基礎的方法論の第一は，同時併存遺構の認定です。これまでは遺構の床面に貼り付いた状態で同じ土器型式の土器が見つかった遺構を同時に存在していたと認定し，また連続する土器型式が見つかった遺構どうしは，断絶することなく連続して営まれた遺構と考えて議論を展開してきました。

しかし土器型式ごとにAMS－炭素14年代を測定し，較正年代を求め，土器型式ごとの存続幅を算出した結果，土器型式の存続幅は長短が激しくバラバラであることがわかってきましたので，これまでの方法論を見直さなければならないと考えるに至りました。このセッションでは直面する問題について議論したいと思います。

図1　九州北部の土器型式の炭素14年代値（弥生早期～中期前半）



凡例　板付Ⅱｂ式では20点の炭素14年代値が得られており，上限が2600，下限が2455（いずれも中心値）であることを表す

こうした問題に既に直面し，対応が分かれております縄文集落研究を紹介しましょう。大きく二つの立場があるようです。一つはあくまでも同時併存遺構の認定を求めていく立場。もう一つは物理的にも経済的にも不可能に近いことを求めていくのではなく，時間幅が広くても累積結果が何を意味するのかを考えていこうとする立場です。こうした議論は型式の存続幅が従来の考え方より長くなった弥生中期後半以前が対象となります。

考古学者のなかには絶対年代がわからなくても，相対年代さえわかれば議論はできるという意見がありますが，私がどのように考えているのかお話ししたいと思います。図1は，入佐式（晩期初頭）から須玖Ⅰ式（中期前半）までの九州北部における土器型式の炭素14年代値を示したものです。測定数が統計的に足りないところもありますが，較正年代を求めていきますと，弥生早期と前期の土器型式の存続幅を統計的に示すことができます（表1）。土器型式ごとに存続幅がバラバラであることがわかり，約30年から約170年と実に6倍近い開きがあることがわかります。したがいまして前期末のように存続幅が約30年のところは従来の存続幅と同じなのでこれまでどおり同時併存遺構の認定をしても，さほど問題はありませんが，存続幅が長くなればなるほど難しくなっていきます。存続幅が約30年の前期末に10棟の住居，約170年の前期後半に10棟の住居ではおそらく意味するものが異なることが予想されます。

図2は縄文晩期末と弥生早期前半の境界を統計的に示したものです。前955年から前935年の間のどこかで山の寺・夜臼Ⅰ式が出現して水田稲作が始まることを意味しています。こうした土器型式と土器型式の先後関係，使用期間を前期末から中期前半を例に模式的

表1　土器型式ごとの炭素14年代値と存続期間

図2　黒川新式と山ノ寺・夜臼Ⅰ式の型式間境界

図3　型式間境界と土器型式の存続幅（較正年代）

に示したのが図3です。

板付Ⅱc式が前4世紀の前半（A）に出現し，使用期間がA～A’だったとすると，中期初頭の城ノ越式がどこで出現するかが問題なのですが，板付Ⅱc式が完全に終わって（A’で）から城ノ越式が出現すると考えるよりは，板付Ⅱc式がすたれかけた頃（B）に城ノ越式が成立したと考えると，実線（B）と破線（A’）の間を移行期と考えることができます。先ほど図2で示した縦の矢印は図3の実線（B）と破線（A’）の間のどこかに型式の境界がくるということを意味しているわけです。別の言い方をすればある土器型式の存続幅と同じ土器型式の使用期間は厳密には同じではないことになります。

こうした土器型式の変遷があった場合，同時期認定をどのように考えればよいのでしょうか。たとえば板付Ⅱc式が床面から見つかった住居跡が2棟（▲）あったとします。板付Ⅱc式の存続幅は約30年なのでこの2棟を従来通り同時併存と考えるわけですが，約200年の存続幅を持つと考えている須玖Ⅱ式の場合，須玖Ⅰ式新（★）と須玖Ⅱ式古（◆）が図のように関係にある場合は土器型式が違っていても同時併存と考えられることになります。逆に同じ須玖Ⅱ式であっても古の（◆）と新式の（●）を同時併存とみることは出来ません。

墳墓の場合も同じです。今から20年前に「九州の甕棺」という論文で九州における成人甕棺の分布と基数を集成したことがあります［藤尾1988］。九州北部の四つの地域において弥生早期の突帯文土器段階から弥生終末期までの壺棺と大形甕棺の基数の推移を調べました。従来の年代観，すなわち甕棺一型式30年の均等幅で計算しますと表2の「従来の年代」のようになります。

表2　大形甕棺の存続幅の比較

図4　大形甕棺の時期別基数変遷（従来の年代観〈破線〉と較正年代〈実線〉）

Ⅱ期からⅢ期の間に福岡・春日地域では14基から327基に急激に数が増加することがわかります。

次に日常土器との併行関係を利用して甕棺型式の較正年代を求めたのが表2の「較正年代」で，やはり甕棺型式の存続幅は不均等であることがわかります。Ⅱ期は130年，Ⅲ期は250年になりますから存続幅の割合は約1：2です。存続幅が倍のⅢ期は当然Ⅱ期よりも多くなるのは当たり前ともいえます。よって福岡・春日地域で従来の年代観で見た場合の急増現象も，較正年代では急増の度合いは少し鈍いものとなります。

これをグラフで表したのが図4です。地域ごとの基数の時期別変遷です。従来の年代観と較正年代を使ったものと比較しています。横軸の－700年とは紀元前700年という意味です。実線が較正年代，波線が従来の年代観です。 弥生時代の存続期間が約700年の従来の年代観と，約1200年間の較正年代にもとづく年代観のグラフを比較すると，存続期間の短い従来の年代観の方が増減が強調されて出てきます。急激な増加とか，急速に衰退した，などという歴史的評価につながるわけです。しかし較正年代を使うと，相対年代，均等幅で考えていた時代に比べると，まったく別の評価につながる可能性も出てくるわけです。相対年代があればそれで事足りる，といった考えは，特に時期別の規模や基数および変遷過程を問題にする場合には間違いであることがおわかりになると思います。

先行している縄文研究の動向を見てみましょう。縦切り派と横切り派に大きく分けることができます［小林謙一2009］。縦切り派は集落の存続期間をおおざっぱに

とる。集落総体が大きく把握され，その中の構造を読み取る目的を持つ。累積結果で何を言うかという点に重点が置かれます。横切り派は徹底的に同時併存の把握に迫っていく。時間的に正しく認識しなければ集落構造の把握はできないという立場です。

『研究報告』149集では実質的に横切り派に属する濵田竜彦さんが大山山麓にある妻木晩田遺跡の弥生後期を対象に地区ごとの遺構群の変遷の解明を目指した研究を実践しておられますので，炭素14年代ではなく一土器型式の中での細分をもとにした研究例を報告してもらいます。

濵田竜彦（鳥取県埋蔵文化財センター）

弥生時代の集落研究では，すでに藤田憲司さんなどが1980年代に，竪穴住居の使用年数を考慮すれば数型式にわたって存続する集落も短期的な集落の累積であるということを指摘しています［藤田1984］が，こうした視点で集落遺跡を見直す研究はその後，あまり積極的におこなわれてきたとはいえません。そこで今回，弥生中期から古墳時代のはじめまで存続する妻木晩田遺跡を対象にこの問題について考えてみました。

妻木晩田遺跡は標高が90～150ｍの丘陵上に立地しており，視覚的にまとまりとして認識できる住居群が約20あって，集落規模は弥生後期後葉にピークを迎えています。広域が調査されていますので，居住域と墓域の変遷を同時にたどることができます。

10年ほど前にこの遺跡が注目されたときには，約400基の竪穴住居，500棟の掘立柱建物が報告されていて，遺構の累積結果をもって，山上に立地する弥生都市的な集落であると評価されたり，地点ごとに居住域や墓域，掘立柱建物域が有機的に配置されているという評価がされたりしたこともありました。こうした評価はどちらかというと遺構の累積結果を評価したものです。しかし，300年近い時間幅を集落が存続しているわけですから，その変遷の過程でどういう姿をしていたのかを明らかにしたいと考えました。

そのために，まずは可能な限り土器型式の細別をおこなう必要があると考え，従来は，後期をⅤ－1，Ⅴ－2，Ⅴ－3，終末期（庄内併行期）をⅥ－1，Ⅵ－2に分けて考えていましたが，今回，妻木晩田の一括資料をもとに後期の各時期をそれぞれ2細別で計6小期に，終末期はⅥ－2を二細別して3小期に細別し，妻木晩田遺跡で集住が顕在化する弥生時代後期から，集落が廃絶する古墳時代前期初頭までの期間を都合10期に分けて，集落の変遷を検討してみました。

かつての大別と，今回の細別で住居群の変遷にどのような違いが出てくるのか比較しますと，従来の大別ではⅤ－1からⅤ－2期，Ⅵ－1からⅥ－2期に居住域が急増するという劇的な変化があると捉えられてきましたが，細別して見ると，1～6期にかけて居住域が段階的に増加している様子が，また，7～9期では7・8期に微増して9期に倍増する様子が見て取れます。あたりまえのことですが，大別と細別では集落変遷のイメージが少し違ってきます。

なお，妻木晩田遺跡の存続期間を10期に分けたので

図5　各居住域の変遷

すが，各時期に149集に掲載されている較正年代を当てはめると，それぞれ各期に10数年から30数年のばらつきがあって，土器型式の存続幅は一様ではないことが想定されますが，この問題はここでは置いておいて，ほぼ均等の幅で理解しているような話になりますことをお断りしておきます。

次に，竪穴住居の上層に堆積している土の違いに着目して，同一期間中に埋没した竪穴住居跡の細別を試みました。妻木晩田遺跡では住居埋土の最上層に黒色系の土壌が堆積する住居と，褐色系の土壌が堆積する住居が見られます。前者は火山灰土壌によく見られる黒ボクに代表されるもので，これに注目して分析を試みました。

黒ボクは火山灰が雨の多い条件下で風化したり，洗脱されたりして，土中のアルミニウムが分解されて，その際植物の腐食の影響を受けることで土が黒色化しているようです。黒ボクができる要因としては，何らかの理由で森林が伐採されるなど，開けた空間が生じたあとに草原植生が現れ，やがて極相林になるまでの間に黒ボクが発達すると考えられています。

たとえば集落を造るために森林を伐採して，その後一定期間，集落が営まれる。その後人の活動が停止して，人の関与が希薄になると，その後に黒ボクが堆積することがあると考えられます。図5は，妻木晩田で検出された住居の中で，黒ボクが堆積している住居を示したもので，6期と10期に黒ボクが堆積した住居が多いことがわかります。妻木晩田遺跡の集落が古墳時代の前期に無くなった段階で一斉に黒ボクが堆積した可能性も否定できませんが，それならば各時期の竪穴住居跡にかたよりなく黒ボクが堆積した竪穴住居跡が認められてもよいのですが，黒ボクと竪穴住居の埋没関係を見ていると，6期に黒ボクが認められる居住域には7期に埋没した竪穴住居跡が認められないといったことに気づきます。ということは，居住域の断絶，次の時期にはそこに居住が認められないということと，黒ボクの堆積に一定の相関性があるということになりますので，妻木晩田遺跡では，黒ボクの堆積が竪穴住居の埋没の先後関係を示すものとして利用できると考えました。

さらに，時期別にみた竪穴住居跡の消長と黒ボクの対応関係から，黒ボクの堆積が居住の断絶を示す可能性があると考えました。図6は妻木新山地区1S区南側の竪穴住居の分布を示したものです。黒い網掛けが黒ボクの堆積した住居，薄い網掛けが褐色系の土壌が堆

図6　黒ボク住居の分布（妻木新山地区1S区南側）

積している住居です。

妻木新山地区の1S区南側には6期に埋没した竪穴住居跡の中に黒ボクの堆積が認められます。6期に5棟の竪穴住居跡が埋没していますが，7期に埋没した竪穴住居跡は認められないので，この間，人の関与が希薄となったか，一時的に居住が断絶し，黒ボクが発達，堆積した可能性が考えられます。

また，妻木晩田遺跡では，黒ボクの堆積に着目して，竪穴住居跡の埋没時期の前後関係を検討することで，竪穴住居の同時併存を確定はできないにしても，同時併存する可能性のある竪穴住居跡を絞り込んでいくことができるのではないかと考えています。この地区では6期に埋没した5棟の竪穴住居は，3棟に褐色系土壌，2棟に黒ボクが堆積していました。うち2棟には，7期に居住が途絶えることで黒ボクが堆積したと考えるなら，褐色系土壌が堆積した3棟と，黒ボクが堆積した2棟は，埋没のタイミングが異なると考えられます。

なお，同時併存の住居については，仮定の話となりますが，褐色系の土壌が堆積する3棟の住居が先行して存在したとみるならば，これらには黒ボクの堆積する2棟の住居が伴う可能性もあるので，最大で3＋αと考えられます。先行する可能性のある3棟が必ずしも同時に併存したかどうかは絞り込めませんので，最大でと，いわざるをえませんが，住居間の距離は十分に同時併存が可能な位置関係にあります。また，黒ボクのたまっている2棟の住居も同時併存の可能性がある。褐色系土壌が堆積した竪穴住居跡のどれかが一時的に併存していた可能性はありますが，褐色系土壌が堆積した竪穴住居跡が全て埋没したのちについては，7期に埋没した竪穴住居跡が認められませんので，この居住域における6期の最終段階に同時併存していた可能性があるのは，この黒ボクが堆積した2棟となって，＋αの可能性はないと考えます。

また，妻木新山地区1S区南側（図6）には4期に埋没した竪穴住居跡が3棟あります。この3棟については，黒ボクが堆積していないので，4期から5期にかけて人の関与が希薄になっていないと考えると，続く5期に埋没した竪穴住居のどれかが伴う可能性がありますので3＋αと考えることができます。9期にも2棟の竪穴住居跡が埋没していますが，それぞれ黒ボクと褐色系の土壌が堆積していまして，褐色系土壌が堆積している竪穴住居跡が先に埋没している可能性があります。これらは廃絶，埋没のタイミングに違いがあると考えられますが，一時的に同時併存していた可能性も考えられるので，9期には最大2棟が一時的に存在していたとも考えられます。

こうした検討を踏まえて，妻木晩田遺跡の中に中心的な居住域の抽出を試みました。＋αの部分は考慮せずに，ある時間幅の中で併存可能な住居の数に着目したものです。ここでは一時的に4棟以上の住居が併存可能な居住域を中心的な居住域の候補としました。併存住居の数は居住域の規模の大小を表す可能性があると考えます。一方，ある時間幅の中で埋没している住居が必ずしも同時併存していたとは限らないので，同時併存する可能性のある住居の数が多いことが必ずしも一時期の居住規模を反映したものとはいえません。ただ，同時併存を証明できなくても，それらは，ある一定の期間中にその場所で連続的な居住が行われた痕跡であると考えられます。つまり，同時併存可能な住居の数は，一時的な居住規模の大小を表す可能性と，一定期間における居住の継続性を示す場合があります。したがって，一時的に人が集中しているか，または一定期間絶えることなく居住継続する場所であったことを示していると見ることができます。

以上の分析結果を元にまとめたのが図7です。四角の囲みは，洞ノ原地区，松尾頭地区，松尾城地区，妻木山地区，仙谷地区，妻木新山地区と呼ぶ丘陵単位のまとまりを意味していています。そして，各丘陵における居住域のあり方から，類型を設定してみました。一つの丘陵で核となる住居が顕在化する場合をA1型，また，A1型の中に象徴的な施設が顕在化している場合をA2型としました。そして，複数の住居の中に核となる住居が顕在化する場合をB1型。顕在化が不明瞭，すなわち居住域の規模が平準化している場合をC型としました。

1期には妻木新山地区に中心的な居住域が設定できることからA1型の集落が形成され，その後，2期になって，松尾頭地区にも中心的な居住期が現れてB型となる。そして，3期に平準化してC型となり，4期には再び妻木新山地区と松尾頭地区に中心的な居住域が現れてB型となる。ただし，妻木新山地区の中心性は次の段階には失われていくので，おそらくこの間にB型からA1型への変化が生じていると考えています。

そして，5期にA1型に移行し，もっとも集落規模が拡大する6期になると妻木山地区に中心が移ってくる様子が読み取れ，さらに松尾頭地区3－6区北に両庇をもつ住居が認められることから，最盛期にはA2型の集落が形成されていたことがわかります。さらに，

図7　妻木晩田遺跡の集落構造と変遷

その次の時期，7期には多くの居住域で住居の数が減少して，集落が衰退，集落規模が縮小していることを読み取れます。先に説明をした黒ボクは，こうした集落規模の縮小と相関的な関係にあると考えられます。

7期を介して確認できる集落規模の縮小は，妻木晩田遺跡の集落像を考えるうえで非常に重要な現象です。最初に土器型式の大別と細別の話をしましたが，ここで7～9期といっている期間は，もともと鳥取ではⅥ－1期とⅥ－2期とされていたものを細分したものですが，細分によって集落のイメージがどのように変わったのか補足しておきます。

2時期に大別していたⅥ－1期には仙谷地区に墳墓の造営が継続されているが，同時に集落規模の縮小が見られます。次にⅥ－2期には墳墓の造営が松尾頭地区に移り集落規模の拡大が認められると考えていました。墳墓造営の場所は変わるが，墳墓の造営自体は継続していて，その間に集落規模が縮小して再び拡大するという理解でした。

ところが，Ⅵ－2期を細別してみると，Ⅵ－1期に相当する7期に仙谷地区で墳墓の造営が継続していて，集落規模が縮小するという点は同じなのですが，8期には墳丘墓の造営が確認できません。7～8期には集落規模が縮小しており，同時に造墳活動に空白の期間が生じていることになります。そして，次の9期には松尾頭地区に墳丘墓が造営され，集落規模の拡大を認めることができます。

集落規模の拡大と造墓活動の再開が相関している様子を読み取ることができるのですが，こうした状況は従来の大別では見えなかった点です。このように細別型式で見れば集落と墳墓の変遷が関連をもって推移していることを読み取ることができますし，7期に埋没した竪穴住居跡が確認できない居住域の多くで，6期に埋没した竪穴住居跡に黒ボクの堆積が認められるのですが，そのことは7～8期にかけて認められる集落規模の縮小が，居住の断絶を伴うものであったということを示すものと考えます。

ただし，こうした分析をおこなう際には二つの問題もあります。埋没時期を決めることのできない竪穴住居跡が一定量存在することと，私の時期決定の妥当性です。これらの前提が変われば同時併存する竪穴住居の数も変わってきます。やはり，こうした分析を行うには，複数の人間が竪穴住居の埋没時期などを検討，認定しながら集落の分析を進めることが望ましいと思います。そうすればさらに具体的な集落像が見えてくるのではないでしょうか。

藤尾

これまで大別型式で分析されていた妻木晩田遺跡を細別型式で分析すると，遺跡動態にどのような違いが見られるのかを紹介していただきました。大別型式の場合は時間的に縦走された住居群を累積的に見ることになりますので，見かけ上，集落規模がどうしても大きくなってしまいます。定型的な環状集落や環壕集落の構造把握が重視される傾向は，弥生時代集落研究によくみるパターンです。累積結果で構築された集落像をどのように解釈するのかという点が最大の課題といえましょう。逆に徹底的に同時併存を求めていくとしてもやはり1時期1棟という極端な場合も想定されますが，実際には物理的に難しいという技術上の問題もあるわけです。後ほど小林謙一さんに縄文集落の場合の横切り派の事例を紹介していただければと思います。

先ほど私が示した土器型式ごとの存続幅は暫定的なものですし，地域によっては若干の差が出る場合も想定されます。濵田さんが実践されたように土器型式の細分が可能であればそれに越したことはありませんし，その単位で炭素14年代測定をおこなえればより絞り込んだ議論ができると思います。ただすべての集落遺跡で徹底した横切りができるかといえばそうではない現実があるわけですから，個別事例として細別ができるところは徹底的に求めていけばいいし，逆に九州北部とか西日本などのある範囲で共通した議論をするための集落像とはどういうものかということも考えないといけません。この2本立てで集落論を続けていく必要があると考えています。

現状では具体的な方法論を提示することはできませんが，質疑の中で議論していければと考えています。それでは事実関係の確認から始めます。挙手をお願いします。

小澤佳憲（福岡県教育委員会）

濵田さんの徹底的な横切りを目指したお話，興味深く拝聴いたしました。濵田さんも書いているように，わかるのは最大何棟という点です。褐色系の土がたまっている間は居住域に人が暮らしていた時期であったり，意図的に埋め戻したと理解してよろしいでしょうか。

濵田

そういう理解です。

小澤

そのなかで最大3棟というときに，後期から古墳前期にかけての9期，藤尾さんの較正年代では240年ぐ

らいの存続幅を持つとすると，1期が平均で25年ぐらいになるかと思いますが，そのなかで最大3棟存在するためには基本的に，1棟あたり15年ぐらいなのでしょうか，そのあたりのお考えを聞かせていただきたいのと，竪穴住居の耐用年数について何か資料をお持ちでしたら，教えてください。

濵田

竪穴住居1棟の存続期間を遺跡から読み取るのは難しいという実感です。先ほどから最大3棟，といった表現をしていますが，これは，ある一定期間存続する可能性が高い竪穴住居の組み合わせです。

たとえば，黒ボクの入り方を見ていますと，次の時期に埋没した竪穴住居が認められるのに，黒ボクの堆積が連続して認められる場所が幾つかあります。可能性の域を出ませんが，黒ボクの堆積が人の関与の度合いによるとすれば，私が作成した変遷図では見かけ上は連続した居住が行われているように見えても，その間に断絶が一時的に生じていたことを想定することができるのではないでしょうか。

6期に集落規模が拡大し，7期に縮小している期間の竪穴住居跡を事例として説明をしますと，6期は30年くらいの幅をもっていると考えていますが，この間に埋没したとみられる竪穴住居跡が複数認められる居住域では，7期の断絶によって生じたと仮定される黒ボクの有無によって，少なくとも二つの組み合わせが考えられます。また，竪穴住居跡間の距離によって，それらの中でも併存できる住居が絞られてきますので，居住域によっては三つの組み合わせを考えることができるものもあります。このように見ますと，長く見積もっても10年～15年くらいの幅で一つの組み合わせを捉えることができますので，竪穴住居の耐用年数については概ね10年ぐらいを見込みたいと思っています。さらに，拡張や重複の痕跡，柱の抜き取りと再設置が認められる竪穴住居跡に着目することで，そのあたりが見えてくるのではないかと思っています。今回の私の分析では，作業の都合上，拡張された住居についてはその存続期間を無視していますので，そのあたりでもう少し竪穴住居の存続期間について絞り込めるのではないかという見通しをもっています。

藤尾

それでは所定の時間がまいりましたので第1のセッションを終了させていただきたいと思います。

若林

藤尾さん，小林謙一さんのコメントは総合討論でいいですね。では次のセッションに移りたいと思います。

次は集落の形成要因と統合原理というテーマで，設楽博己さんと小澤佳憲さんをリーダーにセッションを進めていきたいと思います。

【第2セッション】「集落の形成要因と統合原理―祭祀・経済―」

設楽博己（駒澤大学）

このセッションはパワーポイントなしのレジュメだけでおこないます。昔ながらの発表でお楽しみいただければと思います。このテーマでどういうセッションをくむか小澤さんと相談しました。小澤さんがこれまで同成社［小澤2008］や歴博の研究報告第149集に書かれた論文を読ませていただきますと，祖先祭祀を前面に出しておられます。私も独立棟持柱をもつ掘立柱建物に若干の検討を加えたものを，祖先祭祀と大きく関わっているのではないかという観点から研究報告に書きました［設楽2006］。祖先祭祀を一つの統合原理と位置づけたわけです。その背景を含めて重要な検討課題になるのではないかと考えます。

もう一つ小澤さんが手がかりにしているのがお墓との関わりです。私もお墓との関わりは重視していまして，祖先祭祀ですから当然お墓とも関わりを持ってくる。したがいまして集落研究の中で大形の建物とお墓が空間的にどのような配置関係にあるのか。これらを手がかりに考えてみたいと思います。

大形の建物は独立棟持柱を持つものだけではありませんが，それを考える上でいつも問題になるのが首長との関係です。首長との関わりといいましょうか，これはお墓との関わりももちろんあって，お墓の存在を持って首長との関係がクローズアップされてきます。大形建物，祭祀，墓，この三つをキーワードに考えていきたいと思います。

まず設楽から独立棟持柱建物について，レジュメ集67頁からの要旨をご覧いただきながらお話しいたします。分析視点は独立棟持柱建物の構造，分布，地域差，総数，規模の変化，竪穴住居や墓との関わりです。

独立棟持柱建物（以下，独立建物）がはじめて取り上げられたのは，1981年の九版研究会で宮本長二郎さ

んがその重要性を問題提起されました。研究会では掘立柱建物と竪穴住居の関係について集中した議論がおこなわれました。ただ墓との関わりは見過ごされてきたというわけでそれほど取り上げられていません。当時53棟見つかっておりましたが現在では82棟の独立建物が見つかっています。前期2，中期中葉5，中期後半22，中期後半～後期初頭5，後期前半5，後期後半7，庄内新4（この時期だけは遺跡が多くもっと増える可能性あり）。中期後半に画期があることがわかります。

構造的に見ると九州・四国と本州の二つに分かれる。梁間の間隔が九州・四国では3間，本州は1～2間。つまり妻側の柱を2～3本もつのが本州であり，4本もつのが九州・四国にある。もちろん本州型は九州・四国にもあります。

住居やお墓との関わりで類型化しますと，1類は居住域に伴います。2類は墓域に伴う。1類は三つに細分でき，Aは竪穴住居と混在，Bは竪穴住居が周りに見あたらない。特定の場所を占めるようになる。c類は区画を伴うようになる。区画の中に配置されるものもあれば，脇に配置されるものもある。

規模は小・中・大の三つがあり，それぞれ20㎡以下，50㎡以下，50㎡以上に分けられる。

一つの遺跡の中で何棟あるか，という点ですが，1棟のみが37遺跡，2棟が10遺跡で，この二つで全体の9割を占めることから，一つの集落遺跡の中でもきわめて限られた建物であることがわかる。3棟見つかっているのが3遺跡で鹿児島と佐賀にしか見られません。4棟は鹿児島県前畑遺跡と三重県菟上遺跡，8棟見つかっているのが滋賀県伊勢遺跡です。

以上が独立建物の内容です。それでは分析をしてみることにします。

まず系譜ですが三つあります。一つは昨日の韓国青銅器時代の発表にもありましたように韓半島系譜説，二つ目が縄文系譜説です。縄文時代の場合は，全部ぐるりとつなぎまして，六角形になるように上屋構造を復元しています。でも真ん中の2本の柱を結べば弥生時代の独立建物と同じになるところに縄文系譜のよりどころがあります。最後が弥生時代に独自に現れたという説です。

規模に関しては先ほど大・中・小の三つをあげましたが，中期前半から大型化してきます。中期前半，唐古・鍵遺跡に80㎡のものがある。非常に早い段階から大型化志向があるわけで，中期後半に巨大化のピークがあります。

これは135㎡の非常に大きな池上＝曽根遺跡の例です。庄内式段階になると方形区画の中に入るものが見られるようになりますが，滋賀県伊勢遺跡の11㎡，同県針江川北遺跡の16～20㎡，同県黒田の22㎡とか，大阪府尺度の26㎡，のように小形のものが顕著になってきます。

機能，役割ですが，証拠は柱，しかも柱痕しかない

図8　徳島県桜ノ岡遺跡の独立棟持柱建物と柱穴遺物出土状況

図9　埼玉県北島遺跡

図10　三重県菟上遺跡

図11　兵庫県武庫庄遺跡

図14　奈良県ホケノ山遺跡

図12　滋賀県針江川北遺跡

図13　大阪府尺度遺跡

図15　福岡県平原遺跡

わけですから上屋構造を知ることは難しい。したがいまして手がかりは土器や銅鐸に描かれた絵画です。螺旋状の屋根飾りがある。軒に装飾，手摺りのついた建物を描いたものがある。

図8の出土状況図。独立建物の廃絶後の柱の穴の痕に土器をびっしり詰めた例がある。水晶の玉を入れている例もありまして，祭祀的な傾向がある。また同一地点で激しく重複するものがある。池上・曽根遺跡，下郷，釈堂などです。文化庁の禰宜田さんは神社に見られる遷宮のあとではないかと考えておられます。10年おきに建て替えるような儀礼的な建て替えですね。

次に竪穴住居との関わりから考えてみますと，混在するA類が前期から後期まで継続してみられます。埼玉・北島遺跡（図9）では2棟の竪穴住居に1棟の独立建物が伴う。これが基本的なスタイルだと思う。A類は標高の高いところに位置している。あるいは住居に囲まれるように存在している。三重・菟上遺跡（図10）もそうです。竪穴住居が2群あるとすれば片方の群に偏っている傾向を見せます。その中には大形の竪穴住居も存在していると。

中期中葉から後半にかけて竪穴住居から独立する傾向が見られるようになり，なかには中期の後半に方形区画がみられるようになる。たとえば図11ですが，兵庫県武庫庄遺跡では布堀状の溝が走っていてこれに伴っています。

溝に囲まれて存在するC類は中期後半に出現しますが，後期になると図12や13のようになります。尺度遺跡などは首長居館といわれるようなものが庄内期には現れるようになる。居住集団全体の特別な建物として，人々の絆を強める役割を負ったものが，独立性を強調するようになってくる。共同体全体のものから首長，あるいは特定の階層に帰属するものへと変わってくる。後期以降に首長が取り仕切る空間の祭儀に変わってくる。

図16　佐賀県柚比本村遺跡

図17　千葉県常代遺跡

墓との関わりで注目したいのが図 14・15 です。奈良県ホケノ山遺跡と福岡県平原遺跡をあげていますが，ここからは広瀬和雄さんが指摘するように，墓壙の上に独立建物によく似た構造物の柱穴を見ることができます。墓にこのような大形の建物が伴う例は九州に見られまして，独立建物ではないですが佐賀県柚比本村遺跡（図 16）では墓の真正面にこのような大形建物が建っていて，線上に祭祀の土坑が存在しています。これは吉野ヶ里遺跡でも認められ，大形の建物とお墓が密接なつながりをもっていることをものがたる例です。

独立建物が墓の上に立てられるようになるのはホケノ山遺跡や平原遺跡などいずれも 2 世紀以降のことです。特に近畿では墓と大形建物がセットになる。方形周溝墓に大形建物が数多く見られるという状況は今のところのあまり確認されていないのではないのかと思います。したがってホケノ山遺跡でこういったものが現れるということは，大形建物でおこなわれた祭りがこの時期に現れるということを意味しています。

九州では平原遺跡にまず現れる。平原以前から墓と大形建物は密接に結びついているので祖先祭祀の役割を持つ一連の機能をそこに見て取ることができると考えます。

関東でもっとも古い例は図 17 のように中期中葉の千葉県常代遺跡で独立建物と墓が結びつきます。居住域とたまたま重なっているという見方もありますが，墓の軸との位置関係に企画性が強いので墓に伴うと考えます。系譜は縄文時代の集落と墓との関係性の中から生まれてくるものです。

独立建物と墓との関係は三つの系譜があります。九州にみられるような大形建物とのむすびつきは中国系譜と考えられるもの。関東のように縄文系譜と考えられるもの，近畿のように弥生時代に独自に現れた可能性があると考えられるものの三つです。三者三様の系譜があって生まれてきた関係を理解してきました。短時間でしたので説明しきれない部分もありましたが，午後の総合討論で補足したいと思います。

小澤

歴博の研究報告には，墓の形成過程をもとに集落内部に表れた居住集団同士の関係をどういう風に復原できるか，という点について報告しました。九州北部で弥生中期の大形集落といわれるもの，拠点集落と呼び変えてもよいですが，福岡市比恵・那珂遺跡群，春日市須玖遺跡群を代表とする集落群は都市化の影響で全面的な発掘がおこなわれているわけではないので，集落全体の構造を把握しづらい状況にあります。低台地上に立地するために地形が一連でずっと続いているようにみえますから，集落内部に居住集団が顕在化していないように見えるという特徴があります。

しかし筑紫野市隈・西小田遺跡では異なった状況を見ることができます（図 18）。低地との標高差が 30 ～

図18　福岡県隈・西小田遺跡群

50mほどの丘陵上に前期末から後期初頭にかけて展開する遺跡で，南西側半分の集落形成過程を見ると1から6地点，津古空前遺跡・津古内畑遺跡と名付けられた地点，福岡県と小郡市が調査した合計5地点で前期末から中期初頭に住居域が成立します。

墓域の形成過程についてみますと，前期後半までは木棺墓や土壙墓（●）が営まれますが，木棺墓や前期末から甕棺墓に置き換わっていきます。隈・西小田遺跡群では居住域の脇に墓が造られていますので居住域のすぐ脇に墓域が独立して営まれる状況を見て取れます。

中期初頭から前半にかけて甕棺墓が営まれるようになると，墓域が居住域の脇から蛇のように延びていき，いわゆる列埋葬墓を形成していきます。集落の縁辺部を列埋葬が延びていくわけですが，それが向かう先は第3地点に造られた墳丘墓の脇の部分です。前期末に集落が進出して，中期初頭～中期前半ぐらいまでに集落の基本形が完成，中期の前半には墓域を含めた形が完成します。

注目できるのは前期末から中期初頭の評価です。九州北部では集落が一斉に丘陵上に進出するのがこの時期です。それまではまったくといって丘陵上に遺跡がなかったわけですから，無人の地にどこからか人が進出してきた状況を想定できるが，進出してきた人びとの間には必ずしももともと相互に密接な関係があったわけではないと考えられます。進出してすぐに列状墓を結びつけることで相互の関係を作り上げていく過程を想定してみたわけです。

結節点に墳丘墓があることを考えると，進出してきた居住集団群の結節の象徴的な存在が墳丘墓であった可能性があります。こうした見方で墳丘墓と列状墓の関係をほかの遺跡でもみていくと，吉野ヶ里遺跡群では中期初頭に形成され始めた甕棺墓が列状に造られ墳丘墓に向かって中期後半まで一直線に伸びていく状況を見ることができます。

福岡市吉武遺跡群では，前期末～中期初頭に造られた吉武高木のお墓は，中期前半になると吉武大石に移動して，いったん途絶えます。高木と大石を階層差と捉える見方もありますが，私はそれぞれ別個の集団が造った墳丘墓であると評価しています。

大石から西には甕棺墓およそ4千基が数百メートルにわたって列状に造られ，甕棺ベルトが形成されますから，ここでも列状墓と墳丘墓の関係を見て取ることができます。

吉武遺跡群や吉野ヶ里遺跡群では，隈・西小田のように個々の居住域から列状に甕棺墓がなぜ延びないのか，という疑問がありますが，中期の集落内部に明確な居住域を見て取れないことに尽きると考えています。中期の大規模な集落のうち，内部に居住域が認められる方がきわめて特殊であると理解したわけです。なぜそう考えるのかというと，居住域が丘陵上にあるという立地的な条件のために細く，狭い，丘陵上では，必然的に分断せざるを得ないからです。明瞭に分化する必要性がなかった吉武遺跡群や吉野ヶ里遺跡群の居住域の相違が，墓域にも反映されていると考えたわけです。

ここで大形建物の話をしますと，吉武や吉野ヶ里など大規模な集落内に居住する個々の集団は顕在化はしていませんが，潜在的には存在していて，それらが相互に結合するための装置として列状墓と墳丘墓が機能したと考えました。墳丘墓をこのように評価した場合に，墳丘墓のある遺跡に比較的に伴う率が高い特徴的な建物として，屋内棟持柱を伴う超大形建物があります。弥生時代中期に博多湾沿岸域とその周辺に特徴的に見られるもので，一部は後期以降まで，筑後川流域まで例が確認されています。柚比本村の例（図16）は攪乱と落ちの部分で屋内棟持柱がはっきりしませんが，5間×8間，5間×10間で，100～150㎡もあるような

非常に大きな建物の中に，一つから二つ，屋内棟持柱と呼ばれるものを持つ建物が九州北部の拠点集落と呼ばれるものの中には特徴的に分布しています。

この大形建物は比恵・那珂遺跡群や赤穂の浦遺跡群，雀居遺跡群，吉武・高木遺跡群，日永遺跡群などを代表とする，墳丘墓をもつ拠点集落に営まれていることが注目されており，柚比本村遺跡群のように明確な墳丘墓はない遺跡でもかなり区画性が高い，しかも副葬品が集中する墳墓群と軸線をそろえるようにして大形建物が見つかっています。

吉武高木遺跡の墳丘墓と大石遺跡の墳丘墓のほぼ中間には，同じ時期の集落がほとんど展開していない部分があり，そこに同じ時代の建物があります。報告書には周り縁（まわりえん）をもつ１棟の建物と記述されていますが，福岡市教育委員会の久住猛夫氏は屋内棟持柱を持つ２棟の建物の切り合いであるという見解を示していますが。時期も中期初頭にさかのぼるようです。こうした建物は墳丘墓が成立する中期初頭には出現していて，墳丘墓をもつ集落に伴うということで，墳丘墓と大形建物との関係を一体的に見ていかなければならないと考えたわけです。

ただしこの関係は確立されたものではないようで大形建物は墳丘墓と意味のある位置関係の場所に必ずしも建っているとは思えないわけです。集落の真ん中に建っている場合もありますし，丘陵の集落のかなり高いところに建っていたりするなど，位置についてはさほど明確な関連を認めがたい状況にあります。

次に墳丘墓と大形建物，大規模な列状に集住する甕棺墓群が中期になって九州北部になぜ成立するのかという問題について考えてみたいと思います。

前期の集落の様相を見ると，拠点集落ともいえる前期の環壕集落は環壕が機能している時間がかなり短くて，平野の中を点々と移動する状況にあります。これは拠点集落が固定化されていない状況を示していると考えられます。雨後の竹の子のように現れてくる新しい集落遺跡の中で，次々に新しい拠点集落が設定されてきて，拠点機能がそこに移っていくと考える。これは集落間の相互関係が階層関係として固定されていないことを示すと評価できます。

中期初頭になると墳丘墓，大形建物，列状墓を持つ集落が成立して，そのあと基本的に継続していきます。非常に興味深いのは，その直前の前期末～中期初頭に比定される吉武高木や板付田端の墳丘墓が，そのあと続かないか，先細りになる傾向がみられることです。

それに対して中期前半までに成立したそのほかの墳丘墓の埋葬は，中期後半から末にかけて隣接する集落が存続する限りにおいて，継続される状況を看取できます。おそらく前期末に墳丘墓を造ろうということになって板付田端と吉武高木では試しに造るわけですが，それは非常に初現的なものであって，継続性を伴わなかったと評価できるのではないか。

一方，中期前半以降のものはある一定の条件下にあれば継続性を伴うと考えました。その集落に与えられた拠点的な性格がずっと継続していると評価したわけです。なぜ拠点性が固定化されることになるのかという議論もありますが，ここではおいておきます。拠点性の背後に何があるのかという点に目を向けると，拠点性の象徴が墳丘墓，列状墓，それに関係がありそうな大形建物によって示されているという点がポイントです。つまり墓や埋葬を媒介として拠点性が継続していくという。言い換えれば祖先祭祀，というものが成立して，それが継続的に埋葬の場でおこなわれることによって，拠点性が担保されていくと考えました。

そうなると墳丘墓はおいそれと動かすわけにはいきませんし，私の祖先がこの墳丘墓に眠っているという事実を，親族集団の成員全体が共有しているわけですから，お墓参りをかかさずにおこなっていくという状況です。弥生中期を通じてみられることが九州北部の特徴と考えています。

一方，東海では方形周溝墓群の中に一つだけ巨大な方形周溝墓が造られるわけですが，次代になると壊されて居住域になったり，ほかの方形周溝墓に作り替えられたりする。関東にもそのような状況が認められるようです。それは祖先祭祀が継続的に行われる状況に至っていないことを意味しているのではないか。つまり一世代だけ突出した個人を祭るために墓が造られて，そのあとその人は忘れ去られてしまうのです。

どういうことかというと東海では祖先意識の深度や時間的な深さが伴なっていなかったのではないかと思います。九州北部では中期を通じて継続しているわけだから，祖先の意識は深化していきます。社会組織としてある特定の個人を共通の祖先として崇めようとする動きが中期を通じて継続する九州北部。祖先祭祀の装置として墳丘墓，列状墓，大形建物を評価できるとすれば，弥生時代中期前半以降の拠点集落の性格は，祖先祭祀を媒介にして結合される集団群の関係であると言い換えることができるでしょう。

集団間の関係に祖先祭祀があるという私の結論です

が，愛媛の柴田昌児さんは流通等の拠点性を唱えていらっしゃいますので，討論の時に意見をうかがえればと思います。

拠点集落，拠点集落と一般にいいますが，現象面からの評価，つまり大規模であったり継続性があったりする，だけの側面から拠点集落を規定する時代はもう終わったんじゃないかと私は考えます。その背後にある（拠点集落と周辺・一般集落の間の，あるいはそれらに居住する集団同士の）結合の原理，これをどのように示していくのかがきわめて重要であって，まさに集団統合をどう把握していくかという我々の問題意識にかかわる問題ではないかということを指摘して私の報告を終わりたいと思います。

設楽

いくつもの問題が提起されましたが，大きく分けて二つだったかと思います。第1にいくつも分かれて居住していると理解した隈・西小田遺跡の場合，それまで点々バラバラに暮らしていた人びとが集まってきてここに住もうや，ということで一緒に住み始めた。しかしそれらの人びとの背後にはどういう関係性や結合の原理があったのか，という点について，午後の総合討論で意見を求めていきたいと思います。これが第1点です。

私の発表ではこのあたりについて一切ふれていませんでしたが，関東における集落の形成要因について後ほど総合討論の時に補足したいと思います。集住の契機とその元になる集団の関係性についてです。

第2に吉武遺跡や吉野ヶ里遺跡のように墳丘墓をもちそれに向かって列状墓が続いているという遺跡の評価です。特定の墳墓を強く意識するあり方を小澤さんは祖先祭祀と位置づけたわけですが，近畿地方の方形周溝墓にそのような関係は認められるのか，加美や瓜生堂のように墳丘墓をもつ遺跡で。九州のあり方と同じなのか違うのか，東海地方はどうなのか，も知りたいところです。関東でも安藤広道さんが分析したように，大形の方形周溝墓が環壕集落のど真ん中に営まれる例をどのように考えるのか。墳丘墓とそれ以外の墓との関係性をどのように考えるのか，午後の論点になるかと思います。

以上で第2セッションを終わりたいと思います。

【第3セッション】「集落構造―平面構成と集団間序列を含む―」

若林

第3セッションは集落構造の問題で平面構成と集団間序列がテーマです。少しずつ抽象的になってきますが，石黒立人さんと柴田昌児さんをセッションリーダー，桑原久夫さんのコメントを基本に始めたいと思います。

柴田昌児（愛媛県埋蔵文化財調査センター）

我々のセッションのテーマは，集落構造，平面構成と集落・集団間関係です。環壕集落，拠点集落，大規模拠点集落と呼ばれている大形の弥生集落は，関西では酒井龍一さんの求心型の拠点集落モデルをはじめ，それとは解釈的に大局的な位置にある，広瀬和雄さんの弥生都市。あるいは秋山浩三さんの大形農耕集落。そして若林さんの複合型集落。最近では松木武彦さんの縄文の環状集落も含めた，それを見据えた上での複合型集落，が定義されています。

さまざまな視点で構造を理解をしようという説が提示され議論されているわけです。私のいる四国の大形集落といえば愛媛県の文京遺跡や香川県の旧練兵場遺跡，高知県の田村遺跡を代表とします。四国の特性としては環壕がないというところに共通点があるのですが，それ以外の属性，たとえば時間的動態や内部の居住域の組合わせ，構造理解という点ではさまざまであり，研究者によって提唱する内容も少しずつ異なっています。

こうした多様な研究の方向性や遺跡の実態は，今回のシンポジウムの基礎となっている歴博研究報告第149集に書かれた論考の中にも認められています。天理大学の桑原久夫さんは考古学ジャーナルに発表された論文のなかで，集落構造の研究性というのは大きな幅のある広がりの中で，地域や時間によってさまざまなバリエーションをもって展開しているものと位置づけることができる，と述べておられますが，私もまったくそういうものではないかと考えています。

本セッションでは列島を縦断するような統一の構造モデルを提示するとか，既存の各モデルの比較検討をするといったようなことはあえておこなわず，伊勢湾周辺地域の弥生集落をケーススタディに，集落構造や集落・集団間関係を通して，地域社会のなかで一貫した弥生集落の景観モデルを提示することで，各地との

比較ができる材料を提示し，また午後のシンポのたたき台として俎上にのせることに意義を持ちたいと考えています。

石黒立人（愛知県埋蔵文化財センター）

前置きを柴田さんにお願いしました。セッションの目的については案内に示したようにそれなりの結果が出せそうな雰囲気をにおわせていますが，実際どうなるでしょうか。

弥生時代の集落を資料に即して考えると，地域差や地域色があるために全国を一律に考えることは難しいわけで，私の場合はどうしても伊勢湾，近畿，関東が対象となります。中四国以西については柴田さんと考えていきたいと思います。

まず集落を考える上での基本的な留意点として，集落をつくる場合にどこを選ぶのか，という点があります（図19）。居住可能な場所に，人々が自然に集まってきて住むということではなくて，安藤広道さんが関東で示されたように，集落のサイズがある程度決まっていれば当然占地も決まるというように，単純に水田稲作に適している場所を選ぶわけではないと考えられます。選地には一定の条件があり，自由気ままに集落を営んだわけではないということです。

弥生時代になって縄文時代とは異なる占地がおこなわれたかといえば，伊勢湾岸域・濃尾平野の場合，縄文海進後の海退の中で沖積地が新たに形成されていきます。その，新しくできた微高地に遺跡が出現するという意味では弥生集落の占地は新しいのですが，基本的に縄文と弥生の立地の差がどこにあるのか少し考えてみる必要があります。濃尾平野では縄文後期以降は散発的ながら縄文時代と弥生時代の遺跡が重複します。縄文後期には集落を形成するまでは至りませんが，低湿地に点在する微高地が活動対象になり，朝日遺跡でもドングリピットが見つかっています。その後，縄文晩期後半の遺跡と弥生前期の遺跡が重複する事例が増えます。これについては低湿地における活動環境や居住環境の制約を弥生前期も引きずっている可能性があります。

弥生時代の集落遺跡（居住地だけでなく墓地や生産地を含む）を構成している遺構は，組み合わせによっていくつかのパターンに分かれます（図20）。ここで環濠（壕）と水路に注目すると，豆谷和之さんも指摘されていますように，縄文時代に比べて弥生時代の方が土木作業量は格段に多くなります。床面積が100㎡の縄文時代大形竪穴建物の掘削量は，深さを1mとすれば100㎥ですが，環濠（壕）は1条掘れば確実に何千㎥ともなるわけで，土量の差は歴然としています。同様に，水田に水を引くための水路を掘ればそれ相当の土量となります。このような土木事業を行うために労働力の確保が不可欠となるわけで，縄文時代と弥生時代の集団編成のあり方の違いをここに見ることができます。環濠（壕）は弥生中期以降も継続する地域と継続しない地域があります。このことが何を意味するのか，どういう背景があるのかについてもまた考える必要があります。

居住域を軸とする各種遺構の配置をみる場合にとくに注目したいのが，建物の構造だけでなく床面にある諸施設の形態，たとえば炉です。一つの集落が単一の炉構造で構成されるのか，複数の形態の炉で構成されるのか。あるいは，炉の形態そのものが地域によってある程度は分布域が明確な段階から混在するようになるというような変化があるのかなど，人々の動きに関わる部分ではないかと思っています。

図19　立地と水源 どこを選ぶか

図20　各種遺構の性格

図21　集落間関係

図22　居住域を軸とする各種遺構の配置

図23　共時的に…弥生集落モデル

図24　通時的に…集落の統合と分離

集落間関係については今回十分に触れえないのですが，やはり生産と配布が問題になるでしょうか（図21）。通常，拠点集落はほとんどの生産具・生産手段を保有して，必需財や食料の生産も十分に行っており，周辺に散らばる小さな遺跡とは生産物を介して関係を取り結んでいる，という図式が描かれることが多いわけですが，同心円的な，単純な図式をいろいろな地域に適用できるなどということはおそらくないと思います。石斧などの必需財の素材産地は限定されていますし，必需財以外の装身具や祭儀具になればさらに限られます。それぞれの項目によっては，当然生産・配布のあり方は違ってくるはずです。

そこで取り上げておきたいのが漁具です。生業と言えば水田稲作となりますが，動物資源の獲得における漁撈の比重や性格は無視できないものがあります。漁撈には集団漁である網漁と個人漁である刺突漁，釣漁があり，関わる集団の規模も違いますし，道具の体系，使い方，そして集団か個人かといった部分で帰属する集落との関わり方も違ってくるでしょう。資料的には少ないものですから往々にして無視されてしまうことも多いですが，生産・配布が単に集団間ということではなく，媒介する個人という視点を持ち込む上で欠くことができないと思います。

伊勢湾岸域の朝日遺跡では弥生中期前半に玉作が始まり，明確に工房をともなっています。日本海側地域や琵琶湖周辺地域の玉作は地場産業のようで特殊ではありませんが，太平洋側の朝日遺跡で玉作が始まることは明らかな特殊事例です。それもなぜ朝日遺跡で，なのか。もちろん，特殊か／特殊でないかという事情は地域によって違うわけで，その点はしっかりと押さえておかなければなりません。

以上，わたしが特に関心をもっている部分の要点だけかいつまんで見てきましたが，やはり問題にしたいのは建物の集合が集落なのかという点です（図22）。確かに景観的には建物の集合が集落なのですが，その背後に集団を考えるのであれば墓を抜きにしては語れない。生産地についても，近い，遠いということがあって通常の調査ではなかなか水田や各種生産地を見つけることは難しいわけです。逆に水田のみということもあります。そのことを承けてわたしが今回示した〈トリニティ〉で問題になるのは，三位一体を前提にしてといっても，居住地，墓地，生産地の三つがそもそも備わっているのか，備わっていないのか，という点をめぐって議論は分かれていくかもしれない，というこ

とであります（図23）。

柴田さんによると瀬戸内では墓地がよくわからないということで，さっそくどのように考えるのかという問題に行き当たります。全体として何を，どのように議論するのか，そのこと自体が議論の対象になるという，そんな印象をもってします。

最後に，伊勢湾岸域の集落動向を整理しておきます（図24）。

〈集住〉と〈散居〉を対に考えた場合，少なくとも縄文晩期にも〈集住〉はあります。それ以前にも「環状集落」遺跡があります。縄文晩期では土器棺墓の数が多い遺跡と少ない遺跡の違いが明確に見て取ることができます。それは単に存続期間が長いから土器棺が多い，短いから少ないということではなくて，同一型式で見ても土器棺墓数の多い／少ないという相違はあります。もう一つは，土器棺墓は独立に墓域を形成するのではなくて，居住域と一体のものと考えられます。つまりそれは集落なのであって，〈集住〉と〈散居〉が既に晩期の段階に存在しており，これを前提にして弥生時代も考えなければならないということです。

弥生前期には環濠（壕）を持つ集落と持たない集落が現れます。環濠の内部が明確にわかっている調査例はほとんどないわけですが，環壕を持たない集落を調査しますと遺構は少なく単純で，遺物量も少ないという特徴があり，環濠（壕）の有無は区分の指標になります。

弥生中期前半になると〈大規模集住〉が成立します。しかし，濃尾平野ではほとんど活動痕跡程度の建物も残さないような遺跡から，朝日遺跡のような大規模集住遺跡まで，遺跡内容には大きな開きが生じます。建物が伴う場合には径60ｍほどの範囲が基礎的な居住域となります。

中期後半：凹線紋系土器期～後期初頭には環濠（壕）の無い〈大規模集住〉が成立します。弥生中期前半まで多様な居住形態であったものが，この時期には〈大規模集住〉とそれ以外というように2分され，後者も径100ｍほどにまとまります。

後期以降にも〈集住〉と〈散居〉があり，前者の多くは環濠（壕）をともないますが，環濠集落にも散居事例が認められます。

集住に限って推移をみると，一つ重要な点が浮かび上がります。つまり，凹線紋系土器期を境にして〈大規模集住〉の意味が変わるということです。そこで，あえて〈凹線紋系大規模集住〉形態という分類が可能なのかと考えてみました。次の柴田さんのご発表に関わる点です。

柴田

こうした石黒さんの分析は土器を区分してそれで編年をくみ上げるようなやり方で，伊勢湾の各属性から導き出されたものを追いかけられているということで，親族関係などはとりあえず置いた上で遺跡の現象景観をどう取り上げるのかという方向もやはり，集落分析の方法としては有効であると考えます。

松山平野でも発掘の有無にかかわらず遺跡群の動態を追いかける中で，遺跡はどのように動いているのか，各時間幅（複数の長短がある）の中で累積結果がどのように変化しているのかを追いかけることで，ある程度の集落動態を読み取っていけると考えていますし，そういったことを歴博研究報告には書きました。

そうはいっても進んでいる発掘調査の中では，松山平野でも大規模密集型の拠点集落が現れます。中期後葉から後期前葉にかけての文京遺跡を中心とした道後城北遺跡群での現れ方です。私が説明するよりも会場には遺跡を調査されております愛媛大学の田崎博之先生や吉田広先生がいらっしゃいますので，また詳しい話は後ほどお伺いすることになるかとは思いますが，そうした集団が中期後葉段階には現れてくる。

この地域にはその前段階からかなりの集団が谷の奥に存在していましたが，中期後葉になって扇状地の方に降りてきます（図25）。降りてきて初めてそこに集住することになります。集住のあり方もほかの地域のように環壕を持たない，酒井龍一先生風にいうと外帯空

図25　松山平野の弥生時代遺跡と遺跡群

図26　文京遺跡

図27　中期後半弥生土器の位相と集団

間といった現れ方をするものを持たない状態で現れてまいります。

確かに流路で囲まれたかたちをとりますので，景観的には流路が集落のまわりを囲っているように見えるのですが（図26），流路の中の微高地に占地する文京遺跡の中にもやはり，遺構の希薄性みたいなものが存在するようですので，明確な区画意識を持たないままに大形の集住域を形成するというのが僕がイメージするところの文京遺跡です。

それが中期後葉段階，後期前葉段階になってくるとその姿が消えていくということも現象面に確実に押さえることができます。かなり一過性の高い集住化した集落経営があったというのが文京遺跡のあり方ではないか。その意味で香川県旧練兵場遺跡ともまた異なる動きではないかと考えるわけです。旧練兵場遺跡では後期の段階に（集住化が）起きていますし，古墳時代初頭の手前まではそうした状況が続いているということを指摘できるのではないでしょうか。

田村遺跡は前期の環壕が埋まったあとは環壕を持たず，中期後葉段階に文京と同様，集住化が始まります。環壕を持たない中で，居住域の中では溝で区画された居住空間が存在します。こうした点も文京とまた違う様相が現れるとみることができましょう。

共通するのは環壕を持たない点と集住化するという点ですが，それ以外には文京では交流を示すような遺物，特殊な遺物を生産するような遺物が出土しているということ。それが集住するきっかけを作った可能性もあるのではないかと考えているわけです。

小澤さんから質問があったと思いますが，文京遺跡の性格の一つとして交易，というものがあるのではないかといったのは，中心に大形建物域がありまして，大形建物の周りには祭祀遺構的なものが出てくるからです。

祭祀遺構の中から出てくる中部瀬戸内の土器や九州の土器，広島の土器などは祭祀行為の場で使われたと考えられます（図27）。そういうものが交易の結節点としての文京遺跡の性格を表す一つの材料になると考えています。

愛媛県では特に中期後半から後期にかけては墓が見つかりません。そういう地域の中で密集する集団の状況を知る一つの手段としては，土器に現れる集団関係があると思います。先ほど紹介した外来系土器が集中する箇所，それらがお祭りに使われている箇所が大形建物の近くに集中することも一つの現象の表れと考えられます。

それが凹線文段階に限ってみられるということも重要だと思います。先ほど石黒さんがいわれた凹線文系大規模集落とよべるものは文京遺跡の中では存在しているのかなあ，とは思いますけれども，四国一円にそれがいえるかといえばいえる状況にないということです。旧練兵場遺跡では旧練兵場遺跡なりの集落構造の変移というものがあって，密集する状態も違うだろうし，生産域の盛衰というのも各時期，居住区によって少しずつ変動すると私は思っています。田村遺跡も同様と考えています。

こういう風に大規模拠点集落だけを取り上げてしまうと違う要素だけが見えてきますし，それの確認のし合いという形になってしまうわけですけれども，そうさせないためにはその地域のなかで集落全体の動向をどう捉えていって，大規模集落がどの段階で現れてどの段階でなくなって次の段階でどうなっていくのかを追いかけていく必要があるということを指摘しておきたいと思います。

石黒

一応，瀬戸内から伊勢湾周辺までということで，いわゆる大規模集落というものはあるけれどもそれぞれに違いがあることを指摘してきました。それを，社会的に位置づけるときに，ではどういった枠組で考えるのか。大規模集落の構造や分布，あるいは分布上の移動をどのように評価するのか。例えば，瀬戸内であれば，弥生中期前半に大きな集落がないとはいえないけれど明確ではない，という現状があります。そこで〈大規模集住〉が始まるときに，それまで散在していた集落が1ヶ所に集まって大きな集落を作るようなことをイメージするのか，ということです。

「散在していた集落が集まって」ということは，要は人々が移住して新たな地に，装いも新たに集落を形成するということを意味するのでしょうか。そのことを「〈凹線紋系大規模集住集落〉が形成された，しかも象徴的な大形建物を核において」と表現できるのであれば，凹線紋系土器期を境にして大形建物の性格も異なるというように理解できると思います。

これまでの話について桑原さんにコメントをいただければと思います。

桑原久夫（天理大学）

興味深い内容だったですが，レジュメ集の最後に追加資料を一枚用意しているので，それを見ながら説明したいと思います。図28は2002年に大阪府の森井貞雄さんが作成された図をもとに類例を若干入れ替えたりして作りました。

さっき説明のあったトリニティのスライド（図23）を見せてください。三位一体と言うことで酒井先生が言われた基層生活領域と機能空間というのは水田や墓があるということですから，こう言うのをあわせてトリニティといっておられると思うのですが，この表は森井さんが面積を測られて面積が視覚的にわかる形で図を示してあるわけですが，先ほど小澤さんが大きさで評価する時代は終わったという刺激的なコメントもあったわけですが，私はやはり大きさは非常に大事だと思うわけです。

面積がそのまま人口規模を表しているとはいいませんが，安藤さんは人口規模との関係を発言しておられますけれども，一定程度は人口を反映しているだろうと思いますので，1から5に規模を分けていますけれども，1と5では人口規模がまったく違うということになります。

前期ですと兵庫の大開遺跡なんかは三位一体の居住域だけですが，環壕内には住居と土坑があることがわかっています。中期を飛ばして後期の八尾南遺跡の状況もよくわかっておりますけれども，近畿地方の集落は大体，環濠で囲まれているのが特徴ですけれども，八尾南の場合は自然地形とかを利用しつつエリアがあるわけですけれども，やはり竪穴住居で構成されている。

これに対して3，4，5と規模が上がっていくと，四角で囲んであるのが今日も話題になっております大形建物が見つかっているわけです。そういうものは今のトリニティの話で行きますと＋αですね，秋山浩三さんが付加的属性と呼ぶものが大きな集落には付け加わっていると。問題になるのは内側の様相をあえて壕（ごう）で表したのですが，内側をどのように理解していくのかというときに，複数の集団があるということで若林さんは基礎集団と呼んでいるわけです。若林さんの言う基礎集団の大きさを図の右側に示してみたわけです。

若林さんは基礎集団について分析をおこない複合型集落を設定しておられるわけですけれども，これをみると基礎集団は少し幅がありすぎるといいますか，融通無碍の点がちょっとあるなあ，と作ってみて思いました。

酒井先生の基礎生活領域というのはちょうど3番目のランクを念頭に置いておられるなあ，と思うわけですけれども。

あと，さきほど中期から後期への話がありましたけれども，近畿地方でも大きな変化がある時期で，後期のお墓は近畿でもなかなか見つからないのですが，集落が分散化していく様相を見て取ることができます。一方滋賀県の方では大規模な集落が出てくる傾向があるといえます。また次の総合討論の時の材料にしていただければと思います。以上です。

柴田

ありがとうございます。そろそろ時間になりました。桑原さんのコメントにも次のセッションに関わる基礎集団の話がありました。このセッションで取り上げた集落構造というのはこれ単体ではなくて，前後のセッションが絡んだ上での集落構造論というのも当然あるべきだと思いますので，総合討論の時にさらに議論を深めていきたいと考えています。以上でセッションを終わらせていただきます。

図28　桑原久男作成（［森井貞夫2002］を改変）

【第４セッション】「単位集団論」

若林

午後からの討論を始めます。まず単位集団論，という重たいテーマです。有り体に言えば，これまでの集落論では，まず単位集団を見つけて，あるいはその動態を分析するというのが伝統的な見方だったと言えますが，今日発表した方は誰もそうした方法を採っていない。濵田さんも短く時間を切ったときの同時存在についての発表はされましたが，どの地区に多くて少なくて，という議論はされましたが，単位集団を抽出して論を進められることはありませんでした。そういう方法が採られなくなってきているというのが現状だと言えます。

セッションリーダーの私も小澤さんもそうした手法を使わずに集落論をやりたいという立場ですから，まず私たちの考え方を簡単に説明してから議論のさわりをさせていただければというのが単位集団論というセッションのねらいです。

では小澤さんから九州北部を舞台に単位集団論に関係する話から始めていただきたいと思います。

小澤

はじめにお断りしておきたいのですが，2000年頃に書いた論文の中で，単位集団みたいなものがあるかも知れないんだけれども，どうなんだろう？という立場を一時期表明していましたが，その後，単位集団はないんじゃない？，という考えに一時期振れたことがありますが，今では，一応，単位集団というものはあるかも知れないけれども，現状の資料の中では把握が難しいので，一度そうしたものを棚上げした形で議論を展開したらどうなるのだろう，という立場に今のところは立っているとご理解ください。あまり厳しい突っ込みはご勘弁ください。

なぜ単位集団論を現状の資料に対して適用するのが難しいと，私が考えるに至ったのかというところから説明させていただきます。

単位集団論というのは，住居数棟と倉庫，井戸からなる居住単位で考古学的に把握されるものです。生産と消費の基礎的な集団であるという解釈の部分が乗っかってきて，その実態は大家族的な世帯共同体であるという解釈がなされていると，そういうことでいいかと思います。

その根拠とされたのが戦前に調査された福岡市比恵遺跡群です。鏡山猛先生のいわゆる環溝集落というものが基礎的な資料としてよく使われておりまして，あるいは岡山県沼遺跡群などの状況を近藤義郎先生が紹介されながら単位集団を設定された。

1970年代以降，弥生集落の調査事例が増えるにしたがって，弥生集落を単位集団論で把握していこうとする風潮が流行したということを考えております。集落や墓域の調査をすると，その中から数棟からなる住居群＝単位集団，あるいは大家族的な規模の集団によって形成された小墓群をいかにして単位として見つけ出すか，という方向に研究の動向が動いたという状況があると思います。

そうした中で単位集団の規模というのは実際に把握される遺跡の中で，当然状況によって差異がありますから，数棟といった表現にだんだん規模にぶれが生じてきたと考えています。具体的な例として一時期，よく使われたのが岡山県用木山遺跡です。丘陵の斜面に造成された段の中に数棟の住居群があるので，報告者がこの数棟が単位集団だと表現されたことがありましたが，これについては藤田憲司さんが同時併存の住居はせいぜい１棟か２棟であるということから，単位集団的な段ではないという批判をしています［藤田 1984］。

神奈川県三殿台遺跡でもこういった密集的な集落の部分を区切りましてそれぞれ単位集団という表現がされたこともありますが，どこで切るのか，という部分が調査者や分析者によっていろいろです。こういった

図29　福岡市比恵・那珂遺跡遺構配置図

ものを切るというのはなかなか難しいものがあるので批判される状況が一方ではあると思います。

にもかかわらず単位集団論の魅力は非常に強くて，福岡市教育委員会の吉留秀敏さんが比恵・那珂遺跡群の中心部に単位集団論を当てはめたときに使われた図（図29）ですけれども，この南側の大きな住居を中心とする数棟のグループとか，北側の大きなやはり同様なグループにくくることができる可能性を指摘されましたが，実際には調査区がこれだけ限られている中でどうやって線を引けばよいのかという問題がつねにつきまとうわけです。

とくに比恵・那珂遺跡群では後期の住居が上から被っているので中期の円形住居の遺りは非常に悪いんですね。深さが5cmとか10cmぐらいしかないものが多い中で，飛ばされて把握できない住居をどう想定するのだろうかという懸念を私はもちます。いま把握できる資料の中でどうやって切るんだ，というのが私のそもそもの疑問点でありました。

墓域でもやはり同じことが言えます。春成秀爾先生が福岡県永岡遺跡の列状墓が単位で切れるんだという説を出されたとき，実際に造墓側の過程を検証された溝口孝司先生はなかなかそれを把握するのは難しいと指摘しました。特に墓の造営過程が画面の左から右の方へ伸びるような形で造墓されているという分析がされておりまして，そうなると当初からの群構成というものはないんだと。上段に示されているような群構成は本当に認識されたものとして存在したのかどうかという点にやはり疑問があるということになろうかと思います。

遺跡の中に単位集団を見つけられるのかという問題については，現在，歴博が進めている集成的研究，および炭素14年代測定により，土器型式の存続幅が延びたりしたことに対して，非常に大きな問題が出つつあると私は認識しております。

一つは土器型式の存続幅見直しの動きです。存続幅が長くなればなるほど同時存在した住居の数は少なくなる可能性が出てきます。これまで一つの土器型式の存続幅が30年あって，6棟みつかり半分半分の3棟，3棟，だと把握されていたのが，百年一型式になれば，単純計算でも2棟，2棟，2棟の3時期に別れるわけですから，存続幅と時期比定が固まらなければ同時併存した住居の数の特定は難しいと言えます。

二つ目は住居一軒の平均的な耐用年数の問題があります。小林謙一さんが復元された縄文時代の住居の耐用年数が1期10年を切る可能性の提示，濵田さんに先ほど私が質問したのもこのあたりへの問題意識があったからです。

私も古代の集落を分析した際に，須恵器の型式幅で2型式から3型式で，大体50年から7，80年の存続幅の中で7～8棟の住居が連続的に切り合う事例というのは非常に多いのです。筑後川の中流域では7世紀後半から8世紀にかけての時期は，同じ場所に住居が累積的に切り合っていくという状況がありますので，それを単純に割っていくと10年ちょっとぐらいになるわけですね。

さらにいうと切り合っている住居同士を断絶のない連続的な先後関係においていいのかという疑問があります。住居を埋め戻した直後の土をそのまま掘り返して竪穴住居を建てるということは非常に合理的ではない。まだ締まりの悪い土をふたたび掘り返して竪穴住居を建てると壁が非常に弱くなるという懸念があります。そうしたことも考え合わせると可能性としてはさらに(10年の)その半分ぐらいになるとも考えられます。

弥生時代だけが竪穴住居の存続幅を30年であるということを暗黙の前提にすることはできない，避けなければならないだろうと考えるわけです。では弥生時代の竪穴住居の耐用年数は何年なのかというとこれがまた難しい。

以上，土器一型式の存続幅と竪穴住居の耐用年数の問題がありますので，単位集団の問題を棚上げにせざるを得ないと思っているわけです。竪穴住居から出てくる土器が示す時期の幅が長くなるので，住居の存続期間を長くするか，住居の数を減らすしかなくなるということと，1棟の存続時間幅がわからない以上，一時期の同時併存住居の数を推定することは非常に難しい作業であることをまず確認したいと思います。

若林さんは，午前中に藤尾先生がおっしゃった累積的な集落分析を目指されているかと思いますし，私も横断的な状況の把握が難しい，それはペンディングしようと話を進めていく中で，若林さんの場合は人工的なものによって区切られたものではないんですが，自然地形の中である程度のまとまりをもつ基礎集団が存在するんじゃないかと。これは居住集団の表れと考えてもいいのですが，そういうものが一つの集落といわれる中にあるんだという指摘ですね。私も今回の歴博報告の中で後期の集落には区画集落（図30），区画村落という用語を用いて，特徴的な集落形態があるということを指摘しました。

図30　区画集落

具体的には佐賀県千塔山遺跡，三国の鼻遺跡，以来尺遺跡にそうした事例を指摘したわけですが，一つの一連の丘陵の内部を溝で区画して，人為的に居住集団を分断している状況があるということです。福岡では中期に基本的にみられない特徴です。後期に入ってからこうした現象が突然あらわれる。

こうした人工的な溝で区切られた集団こそが考古学的に現状で把握できる最小の居住集団ではないかと考えるに至ったわけです。このような居住集団の中身は，以来尺で後期前葉から末までの住居群をずっとトレースしているわけですが，非常に住居の数が多いという印象です。これを同時併存何棟と落としていったときに，2～3棟ではないよね，とまず言えると思います。上限がどのくらいになるのかはわからないですけれども。

一方，少し小規模な集落として三国の鼻遺跡は，存続幅は短いのですが同時併存住居を落としていけば2～3棟の規模の密集度にはなると考えられます。千塔山遺跡では中心部の大きな集団では住居数は多いですがC地区の集団などの住居数は非常に少ない。これはどういうことかというとおそらく人工的に区切られた単位，居住集団の規模にバリエーションがあるのではないか，ということですね。これをどう理解するのかというのが次のテーマになります。

私は今のところ，これが遺跡に現れた最小の単位である以上，これらがそれぞれ共通的な性格の集団であると仮定したわけです。もちろんいろいろな解釈が可能だとは思いますが，少なくともこれら一つ一つはいわゆる単位集団ではなかろうと，私としては主張したいと思います。

後期集落内にみられる集落の区画の規模には，かなり大きなものから小さなものまでありそうだということになると，単位集団は規模的に大家族的な集団というか，最小の親族集団ということだろうと思うので，10棟20棟という規模にはなり得ないとだろうと思っています。すると今お見せした区画単位，各分子，これらが単位集団であるという評価はまずできない。

集落資料の分析に単位集団というものを前提的に与えることについてはかなり慎重であらねばならないだろうというのが私の立場です。

若林

小澤さんの単位集団に対する立場は2000年から動いてきたという説明が冒頭にありましたが，単位集団論というセッションを設けた方が良いと主張したのは私で，セッションリーダーを小澤さんにお願いしたのは，遍歴の真ん中のところのお話を聞きたかったからです。まあ，実際的に単位集団が見えるか見えないかという問題は，あることだと思いますけれども，単位集団論という形で把握することに対して，同成社の本のなかでも否定的なことを書かれたと思います。少し抽象的な議論になってしまうかも知れませんが，今の小澤さんの立場でないとしても少し前の立場で，論理的に単位集団というものを説明していただけないでしょうか。つまり建物が数棟ある，ある規模の集落の中に見られるグループというのはですね，単位集団論であるいは世帯共同体論で説明しない方が良い，あるいは説明するべきでないという立場を一時的にせよとられた理由はどういうことになるのでしょうか。

小澤

結果的にいうと今までの単位集団論の帰結として農業経営体論といわれる集落理論がついて回っていることに疑問を感じたからです。農業経営体論の基本的な理解というのは，一つの地域の中に同じ親族組織の集団が居住していて，それらは一つの親族集団で統合されるという前提があったように思います。それに対して，人類学的な分析の方では部族社会の集団論の中でもう少し違った形での居住のあり方というのを1960年

図31　大阪府八尾南遺跡遺構配置図

代ぐらいから提示されています。

部族という大きなくくりの下に氏族というものがあって，氏族組織というのは一定の土地を占有的に利用するものではなく，入り乱れて居住していて相互が網の目のように結合していくという親族組織です。単位集団論の帰結としての農業経営体論にはその視点が欠けている。これが非常に問題だと考えているわけです。

具体的にいうと午前中に話があった区画墓，墳丘墓と列状墓に埋葬される，あるいはそれを祖先祭祀として共有する集団というのは，一つの地域に占拠している方々ではなくて，一つの地域の中にいくつかの墳丘墓なりを造営する母体となる組織があって，それが相互に入り乱れて組織の末端部が居住しているといった絵を描くべきではないかと考えています。

若林

私の理解する範囲では，血縁に対して地縁的なものとして集団をアプリオリにみるということはやめるべきであって，むしろ血縁とか出自関係でありますとかを前提としたかたち，つまり経営とかではなくて，それぞれの集団の関係性そのものが重要であって，経営の単位として認めることが本当にできるのかどうか，ということについての疑問と考えてもよろしいでしょうか。

小澤

前提として近隣集団同士が結合して一つの経営単位になるという結合の仕方以外のパターンも想定しておくべきだと思います。

若林

わかりました。では歴博の研究報告に書いた話を中心にしながら私の考えを話します。

その前に議論の参考として，単位集団論と関わる定義として住居数棟という話がありました。もちろん近藤義郎先生がはじめに単位集団を設定されたときに住居，倉庫，高床建物をプラスして考えられたわけですが，基本的には集団をどう考えるのかというときに，竪穴住居の数や配置が重要な問題として取り上げられてきたわけです。

例をあげたいと思います。八尾南遺跡（図31）では，ここにある遺構が完全に同じ時期に属するかどうかという問題は難しいですが，この中の大半のものはほぼ同時期と考えられる洪水砂によって埋没しています。ただし洪水の前にすでに廃絶されていたものがあったのかどうかは確認されていませんので，洪水時に同時に建っていたかどうかの保証はありません。堆積状態としては比較的近い，というふうに考えてもらった方が良いかと思います。

発掘時，周堤帯がはっきり遺っておりまして，盛り上がっていたので暗色層の上面で検出しまして竪穴住居を掘りました。つまり当時の地表面から調査できたわけです。ここに周堤帯をもつ竪穴住居が8棟あることがわかり，住居間距離もこれぐらい空いていました，この二つが同時併存していたかどうか疑問は残りますが，それぞれのブロックがそれぞれ間隔を置いて，こ

の範囲に3棟ぐらい教科書的な配置をしていると思ったわけです。

暗色層をめくってその下面で検出すると，建物にまとまりそうなものだけでもこれだけ出ている。すべて同時に存在していたとは限りませんが，下面で検出しているので特に時間的重複の可能性も高く同時存在としては半分ぐらい間引いて考える必要がある。とすると竪穴住居3棟以上，これ二つ隣接しているからといって同時に存在していないとは必ずしも限らない。それについて報告書では明言を避けていたと記憶しています。

だとすると3棟，ないしは4棟というのがあって，間にまだいくつか建物がある。掘立柱建物だから住居ではない，人が居住していないとはまったく言えない。1辺20mぐらいの領域には，住居が2～3棟だけというわけではなく，人間はもう少し住めていると言えます。丘陵上の集落のなかであればフラットな地表面が少なくなりますので，密度は下がってくるとは思いますけれども，八尾南は低位段丘の立地条件になりますので，もう少し建物の数を多くみてもよいのかな，と思います。

午前中の話で竪穴住居で集落景観を復原するという話がありましたが，竪穴住居の間に柱穴はたくさんあるはずなんですね。柱穴の時期を決めることや掘立柱建物のプランに復元することは難しいのですが，実際にはそういう空間にはもう少し建物があるんだということを想定して議論することもできると思います。実証的なレベルではそうではないかと考えています。

以上が竪穴住居を基調とする私の認識でして，私がフィールドとしている近畿地方は沖積地の遺跡がほとんどで，竪穴住居を綺麗に検出できることは稀です。ほとんど柱穴群として検出されるわけですね。私が基礎集団を思いついた根拠をしつこくお話したいと思います。

先ほどから規模の話が盛んに出てきます。もちろん規模は重要で住居が10棟超える住居群を，伝統的な単位集団という認識をするのはなかなか難しいと思いますが，単位集団，あるいは世帯共同体というのがあるとしたら，拡縮しうるのだとも言えるかもしれません。最大規模ではそれぐらいあることもあり得ると思います。ただそうではなくて規模が大きいという理由だけで単位集団ではないという意味で基礎集団を設定したわけではなくて，もっと別の要素があるよ，という話を確認したいと思います。

以前の論文［若林2001］に書きましたように瓜生堂遺跡とその近辺の遺跡では，柱穴，土坑，溝という生活に関係する遺構が見つかるゾーンと墓域はそれぞれの群をなしながら五つ展開している。一つの固まりというよりは五つの中規模トリニティの近接地点として大規模遺跡が形成される。それがこのモデルであります。こういうことをまずは考えてみた，ということです。

ではこのグループがいったい何なのか，というのが問題になってきます。これちょっと変遷を示していますが，今日はもう時間がないので個別の事例の話はやめたいと思います。

それらの集団は墓域をもっていると。墓域というのは方形周溝墓群なんですけれども，瓜生堂遺跡ですとこういう形で中期後半の周溝墓群が1ヶ所だけ，私がA群と呼んだなかだけでもたくさんのお墓があって，多数埋葬のものと単数埋葬が入り混じる状態です。これは藤井整さんが提唱されている理論でいますと，多数埋葬の墓には共同体の成員に満たないような幼児も乳幼児も葬られているということで，こういうものが階層が上の方のお墓であろうと想定されています。

結局，方形周溝墓群というのは内部に初めから緩やかかも知れませんが階層の上下差を含んで墓群を形成している。形成母体の集団はその中に階層差を含んでいることを考えざるを得なくなります。とすると単位集団が初めは現象的に住居数棟の空間をもって発掘されたとしても，意味としてはそれが実態という意味をもつ理由は，その内部に階層差を持たない最小の経営単位だと考えられたからだと思いますけれども，そうした理論は私が基礎集団と称している規模の径100～200m規模の集団の中には認めにくい。あるいはもっと複合したものを想定しなくてはいけなくなるということであります。

それを単位集団と呼ばない理由，単位集団の拡大・縮小したもの，あるいは世帯共同体の拡大したもの，という理屈の中でみなくて，別個のものとして名前をつけたいと思うわけです。平面規模は大塚遺跡一つ分とみているわけです。

それぞれの基礎集団に断片的な水路ですとか水田畦畔が見つかることが多い。ということは中規模な集団自身が経営の単位としても機能している。最小人間集団とは呼べない基礎集団自身が伝統的な水田稲作の経営単位として役割を果たしている，ということが言えるのではないかと思います。

しかしその内部には複合性があると考えられます。

複合性というのは，それが複合するときの単位は何かと言ったときに，それが単位集団なのかといったことは小澤さんが言ったように検証することはできない状態になっていると。

これは午後のセッションでも聞きたいと思っていることですけれども，例えば3年前の松山での考古学協会の大会の時に，田崎先生が文京遺跡の中のある地区において，住居2～3棟からなる塊が連続的にみえ，それが特殊な役割を果たしている例があると報告されました。

その時には単位集団とはおっしゃられませんでしたけれども，そういうものがこの中にもし見えれば議論は可能ですけれども今のところ資料的には難しいというのが現状であります。

基礎集団の下位にさらに集団があるのか，どのような性質を持つのか，残された課題と思っています。ただそれがわからないから基礎集団論という議論をしないというのではもったいないというのが私の理屈であります。基礎集団の性格をもっと外側から基礎集団そのものの関係性を整理，配置，墓がもつ内容を考えることによっていろいろな理解ができるのではないかというのが私のアイデアです。

小澤さんが九州北部の遺跡を墓群のあり方を出自集団とからめて説明されたのと同じアイデアだと思いますが，中村大介さんが方形周溝墓群の中にある供献土器に注目し，いろいろな共献の仕方を想定しています。ここに示したものは典型的ですが，穿孔した供献土器をたくさん持つものもあれば，埋葬主体は複数あるのにあまり土器を持たないもの，あるいは穿孔しないで供献土器をおいているものなど，いろいろなパターンがあります。

瓜生堂遺跡の中には3種類のそういう集団があります。亀井遺跡，亀井・城山遺跡にも2～3種類，鬼虎川にも2～3種類あります。その中の似た性格のもの，似たやり方のものというのは関係性をもっている可能性が強いのではないか。似たやり方をもつ集団というのは，出自，もしくは何らかの系譜関係をもつ集団ではないかと考えることができます。そうすると複合型集落を形成している，形成していない地域の遺跡の分布の仕方を考えると，こういうパターンが考えられるのではないか，というモデルを設定しています。

図32をみるとそこで黒く示しているのが複合型集落と呼んでいるゾーンです。線で示しているのが出自とか，系譜などが想定できるのであればその関係性を示しています。10km圏内に複数の複合型集落があります。これらの関係は一定程度の系列関係を持っている。それがA1類型，河内平野や近畿地方の平野部のほとんど，九州北部の大規模集落を作るような領域，にイメージできるのではないかと思います。

A2類型は平野の中で，同じような関係性はあるんだけれども一つしか複合型集落を作らない。この場合は基礎集団の関係というのは複数の出自集団がもしあったとしても単純な構造になってくる。この地域の中のそれぞれの集団の政治的な関係というのは，個々の一つの複合型集落の内部での関係に大きく作用を受けてしまう。ここでの力関係とここでの力関係が違う場合は，必ずしも等質的な力関係とはならない可能性がある。

もう一つはそうした複合型集落をまったく作らないゾーンもあるであろうということです。実際に大阪平野の中期後半ですけれども，このドットというのは遺跡ではなくて，私が基礎集団と認識されるところのドットを落としたものです。三角形が多くあるのは複合型集落が多くみられるゾーンになるわけですけれども，

図32　10km四方内での基礎集団配置と出自モデル

上町台地の付近は遺跡がもともと少ないですが，淀川の東岸，あるいは石川の流域は前期に多くの弥生集落ができますが，複合型集落は形成されません。

奈良盆地も同じで，真ん中と南側には複合型集落らしきものはありますが，上部や西部にはそういうものはない。すると一つの平野でも１類型やＢ類型といったものがモザイク状に入り組んだ状況にあって，この地域とこの地域ではそれぞれ分布構成の違うもの，それぞれで起こっていること，力関係といいますか，そこで起こる集団力学というものには違いがあるであろうと想定されます。

三角形で示したものは３体以上の埋葬主体をもつ墓を含む墓群のドットですけれども集落の複合性が高いゾーンでは非常に多くなって，河内潟の南部では非常に多いわけですが，遠ざかるにつれてそうしたものは少なくなってくる。階層化傾向を強く示すような墓というのは一つではなくて複数で出てくる。こういう集団関係というのは必ずしも綺麗なヒエラルキィを作っているわけではなくて，その時の状態状態によって集団が競合関係を持って，それを誇示するような階層化傾向を見せる墓群を作ると解釈できるのではないかと思います。

もちろん近畿地方においては特定個人墓や単独系譜の首長墓を見つけることはできます。そうすると非常に単純に考えると，複数の複合型集落が展開して，出自関係の複雑化を社会変化の基軸とする領域。単純な統合の支出関係がうかがえる領域，段丘や丘陵上でそういう核を作らないような地域というものが近畿地方のなかにもあって，そして列島内にもいろいろなかたちをもって存在して展開する。これは非常に大きくみると，A1 類型を作るのは今のところ，九州北部と近畿地方の中では本当はモザイクなのですが，？にしましたけど，石黒さんの言うのは私の A1 なのかどうなのかが私にとっては課題なんですけれどもそういう状態になる。

そのほかで長野県松原遺跡や折本石原遺跡，八日市地方遺跡，文京遺跡など大形の拠点集落，ないしは大規模集落，複合型集落，人によっては弥生都市という集落をもつ平野があるんだけれど，A1 としたものとは違うような構造の中にあるのではないか。これ拠点集落論になってしまうんです。後期の話は時間がないのでしません。

何でこんな話をするかというと，単位集団の話とは違うじゃないとかいわれそうですが，私の話が正しいかどうかはいろいろな人に検証してもらったり，ブラッシュアップしていく必要があるんですが，単位集団が検出不能な場合でも集団関係論はできるということなんです。

見えないものの関係を論じて一つの地域のモデルを使って弥生社会はこうである，ということではなくて，見えるものの関係性を論じることによってそれぞれの地域と時期の違いを描き出して，それによって全体として弥生社会はどうなのか，という議論をした方が有効ではないか，という議論です。

小澤さんの議論はネガティブだ，というわけではないんですが，単位集団が見えないから単位集団論をしないのではなくて，単位集団論よりも便利なものがあるから議論をやろうよ，という話なんです。

結局，結果としてはどういうことになるのかというと，その内部に階級関係を持たない最小の経営単位，単位集団，世帯共同体と，それに対峙する農業共同体，農業共同体と首長という関係だけで弥生社会の発展の度合いをはかっていくということではなくて，もう少し細かく，複雑なことが描き出せるのではないか，ということです。

何が言いたいかといいますと中間規模の社会集団というものをどういう風に定義していくのかということが我々にとって重要な課題になるのではないか。ただそのときにそれぞれの集団がどういう意味を持っているのか，どういう関係性を持っているのか，という点が問題になってきます。藤井さんや中村さんのお墓の分析を引用して定義つけてしまいましたけれども，そういう場合の集団の検討でありますとか，関係というのをどういう方法で決めることができるのか，あるいは類推することができるのかというのが一番の問題になるのではないかと考えています。

以上の二人の好き勝手の意見に対して，もっと伝統的な立場を理解する人，単位集団論についてを造詣の深い方にコメントをいただければという希望を持っております。恐縮ですが大久保徹也さんに単位集団論，あるいは世帯共同体論ができた経緯，あるいはそういうものの考え方の立場から二人の議論はどう見えるのか，何が問題なのかをご指摘いただければありがたいと思います。

大久保徹也

ご指名ですので伝統的・保守的な立場から短くコメントさせていただきます。若林さんのお話は基本的に，弥生文化論と変わらないだろうと。複合と言うことを

言われましたけれども，だいたい，共同体と単位集団という議論にしてもたまたま，最小単位に見えるものをいくつか指摘して，すべての集落に対してそうした関係が見えなければその先，議論をしないなんてことはやっていないわけですよね。

いくつか典型的にみえたら，そういうものの存在を前提にして論を組み立てていこうというものですから，当然見えないところがあってもいい。私が知る限り，近藤先生にしても岡山県南の上東遺跡あたりをそんなに徹底的に分節して，単位集団がいくつあるなんてことを示しておりません。すべての調査成果の中でそれが見えるか見えないかというのは，単位集団論が使えるか使えないかということとは関係がないんじゃないかと思っています。

それからお話の中にたびたび出てくる世帯共同体＝単位集団という形でつなげて使っていくのは概念的に基本的におかしいだろうと思います。世帯共同体という言い方を近藤先生は使っていません。基本的には竪穴ごとの機能の評価のところで，おそらく都出先生と近藤先生との超えがたい大きな差がありますので，その中で分けている，と思います。

それから小澤さんが大家族的な，ってことをおっしゃいました。たしかにニュアンスはあると思いますけれども，全体の弥生社会論，古墳社会論への変化の中でそれは評価すべきことであって，過度に血縁関係を強調するような議論を始めているのは1980年代の前方後円墳の時代からですよね。近藤先生の最後のお仕事です。それはご承知のように古墳時代を，私はそれを非常に古いやり方だと思いますけれども，親族関係が基軸になる社会とそうでない社会という形で国家段階を規定しようとした発想の中で，どうしてもそこからの要請で弥生社会の基軸に血縁関係，親族関係を過度に評価しようとしてその中で強調してしまったのであって，そもそもの50年代から60年代に単位集団という分析概念を出した段階ではあまり強調していないはずなんです。だからそれをもってこの概念は，こういう作業仮説を不可だとするのは少し無理があるのではないかと思います。その点では，単位集団という概念は前方後円墳の時代でも使い分けていると思います。単位集団という単語ではなくてその時は家族体というダイレクトな言い方で社会構成の議論をしているところはあると思います。

次に実態として単位集団のように見えるもののサイズに差があるというお話でしたけれども，どんな社会を分析しても例えば極端な話，奈良時代の戸籍をみたって一戸あたりの構成メンバーというのはてんでバラバラなんですよね。それをもって奈良時代にコアが存在しない，そういう分析は無効だとは言えないのと同じように，2～3棟から10棟内外までの差が最大あったとしてもそういうものを抽出することが無意味であるという話にはならないわけです。

最後に小澤さんの話の中で単位集団を懐疑的に扱う際に同時併存という点を厳格に捉えて，どこまで同時併存かわからないので難しい，という言い方をされましたけれども，それであればそのあと取り上げられた区画集落，村落も同じような論法で同時併存を厳格にした場合，どうなるのか，認定基準に甘い辛いの差が大きすぎるような印象を持ちました。

若林

ちょっと形勢不利になっておりますが人間集団の単位を考えるのか，避けられませんので総合討論の中で出てくると思います。このセッションはこれで終わりたいと思います。

参考文献

小林謙一 2004：『縄紋社会研究の新視点―炭素14年代の利用』六一書房
小林謙一 2009：「炭素14年代を使った弥生集団論」（『弥生文化の輪郭』弥生時代の考古学1，pp.208－224，同成社）
小澤佳憲 2008：「集落と集団1―九州―」（『集落からよむ弥生社会』弥生時代の考古学8，pp.17－35，同成社）
設楽博己 2006：「関東地方における弥生時代農耕集落の形成過程」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第133集，pp.109－153）
藤尾慎一郎 1988：「九州の甕棺」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第21集，pp.141－206）
藤田憲司 1984：「単位集団の居住領域―集落研究の基礎作業として―」（『考古学研究』31－2，pp.58－78）
若林邦彦 2001：「弥生時代大規模集落の評価」（『日本考古学』第12号，pp.35－54）

第3部　総合討論

司会・進行　石黒立人・若林邦彦

若林

まず，コメンテーターの方でまだ発言されておられない方からお願いします。小林謙一さんに住居の同時存在の件について縄文集落研究の立場からご発言願います。

【住居の同時併存について】

小林謙一（中央大学）

スライドを使って話をしたいと思います。縄文時代の集落論のなかで私が属している「横切り派」という名称は林謙作先生が縄文集落の研究史をまとめていく中で名付けられたもので，現在の縄文研究の中では少数派に属します。これから私が話す内容は縄文集落研究の中では必ずしも主流ではないということを初めにお断りしておきます。

主流となる縦切り派と単純に二分割されるわけではありませんが，細別型式で集落を分けていくと縄文中期の環状集落では環状が見えなくなってしまいます。実際には環状に見えているのに分けていくと見えなくなるのはおかしいという批判や，私たちが認識している集落というのは全体ではなく一部しか見えてないのだから，無理矢理分けても仕方がないという疑問も主流派（縦切り派）の研究者から寄せられるわけです。

縦切り派も横切り派も時間幅で横に切っている点は同じで，どのくらいの幅で切るのか，という幅の違いな訳です。細別型式による土器編年ができているのに集落論に反映されないのはおかしいと考えます。

ただ横切り派も人数は少ないのに一枚岩ではなくてバラバラなことを言っています。横に切っていった場合，極端な話一時期，1棟という事態も考えられるわけですし，またはそこまで切るべきだと考える研究者もいるわけです。すると結果的に集落というのは一時期1棟だから，研究者がみている縄文集落とは基本的に累積結果であって，途中途中は絶えず移動しているという，集落移動論に引きつけて考える立場も結構強いわけです。

いってみれば極端から極端です。三内丸山遺跡のように一時期100棟あって人口規模が千人という考え方と，一時期10棟ぐらいの集落が千年近く累積されて結果的に私たちがみているような形態になっている，という極端な二つの見方があって，この極端な立場を縦切り派と横切り派としてみている場合もあります。

いずれにしても土器型式によって集落を分けているわけですから皆さん横切り派なんですけれども，どのくらいに分けていくかというのが議論になっています。細別型式ごとに分けて加曽利E式とか勝坂期の集落を同定していきます。ただこの場合も，細別型式の存続幅よりも住居の耐用年数が基本的に短いことは，同一の土器型式に属する住居が複数，重複していることからも明らかです。

私たちは，重複住居や異なる住居から出土する土器が接合する遺構間接合を利用しながら，住居の相対的な順番が土器型式で分けるよりも分けられる場合もあります。

だから土器型式はなるべく細かく分けていくことと同時に，集落の中を細かく見て遺構ごとの相対的関係を明らかにする。さらには年代測定をおこなって三つの側面から同時併存住居を確認していく必要があると考えます。ではその三つについて詳しく見ていきます。

まず住居のライフサイクルという問題です。住居を建ててから廃絶するまでのさまざまな様相を把握して過程を見ていきます。たとえば同じ土器型式に属する住居A，B，Cがあったときに，三つが同時に存在したとは限りません。縄文の住居の炉によく見られる炉体土器は，上だけとか，下だけとか埋めるわけですが，いらない破片が他の住居に捨てられている例がよくあります。住居の跡地に吹上パターンとかいって捨てられているわけですが，それがくっつく場合があります。

同じ加曽利E式土器が使われている住居址でも炉体土器として使われた住居と，その破片が使われている住居というのは，その段階ですでに埋まっていて破片が捨てられたわけですから，明らかな時間差があるということがわかるわけですね。こうした組み合わせをきちんと把握していきます。

土器型式の幅より住居の耐用年数の方が短いと言いました。これがその例ですが，同じ加曽利E3式土器をもっている住居群が9回の建て替えをおこなっています。土器型式が同じだけど住居の時期が異なる例です。

この例では年代測定をおこなうことができまして，100年ぐらいの間に9回の建て替えをおこなったことがわかりましたので，単純に平均すると1棟あたり13.5年ということになります。したがって他の事例も含めて総合的に判断すると関東の縄文住居は平均10～15年で建てかわっていくのかなあ，という印象を持っていまして，土器一型式の存続幅よりも明らかに短いことがわかります。

時間幅の差はいろんな内容と関わってきます。縄文中期に属する東京都大橋遺跡では，住居出土土器30数点を年代測定して，年代をプロットしていったところ，年代値が集中するところとばらけているところのあることがわかりました。私が3～5期とよぶところに固まっているわけです。あまり時間差がないと思うわけです。10～20年の間に3～4期分が集まっている。さっき言った13.5年の耐用年数よりもさらに短い期間で住居が造られていることがわかります。

それに対して6～8期はばらけています。どのくらいばらけるかは確実にはわかりませんが，少なくともばらけてきている。切り合いのスパンが長くなるとか，13期には断絶期があるとか，どこかに移動していて戻ってきたとか回帰的なこともあるかと思いますが，少なくとも同じ集落の中での住居の作り替えのグルーピングをしたとしても年代をきちんと重ねていかないと質的な差があるかどうか判断はできません。

最後，三つ目として，居住システムを見ているわけですから，集落群のあり方といいますか，この場合は武蔵野台地の住居を集めて分けてみたわけですが，相対的な時期区分で言えば住居の数は12B期に明らかに大きなピークをもっていてもっとも住居が多い時期です。例えば加曽利E3式の真ん中のころに住居の数が多いという指摘は今村啓爾さんがすでにおこなっていますが，年代測定によって土器型式の存続幅をみてみますと，加曽利E3式は70～80年ぐらいの存続幅が長い時期に当たります。他の時期が30年ぐらいですから長いわけです。

これを評価すると，実線は存続幅を気にしないで数を埋めていった場合は12B期がもっとも数が多くなるわけですが，10年ごとに基準化して考えると，11C期（E2式後半）の方が同じ年代ごとにみれば住居の数が多いことがわかります。居住のピークがずれてくる。

相対編年と実年代では人口の増減とか居住の集中度とかがずれてしまうわけですからなるべく細かい土器型式で切っていく必要があるという点は変わらないわけです。それとともに重複関係とか，縄文の場合でしたら土器の接合を使いますが，今日の濵田さんのご発表では覆土の土の違いに注目されたように，対象によって基準があると思いますので，遺構の位置，入り口の方向，建物の形式などによって細かく分けていくことが肝要です。私はそれを集落編年と呼んでいる訳なんですけれどもフェイズ，細かな時期を分けていく必要があるわけです。

さらになるべく年代測定をおこなっていって耐用年数に起因する建て替えの間隔も重要ですし，我々が分けている範囲が何年ぐらいなのか，押さえていかないと，居住システムの動態の復元には迫っていけないと考えます。以上が私のコメントです。

若林

同時存在に関して，小林さんは，なるべく細かい土器型式で切ってフェーズを設定するという見解を示されました。小林さんの言うフェーズって何？という問題は出てくると思います。限りなく細かいということはよくわかりますけれども，完全に同時な景観でもありません。それに対して濵田さんが見いだしておられる細分は，小林さんのと同じなのか，埋没なのだから住居が機能している時期，ある景観を同時に反映していると考えてよいのでしょうか？妻木晩田で見るときのフェーズってなんなんやろうか，あるいはフェーズといえるのかどうか。

濵田

私のくくりはある一時期の集落景観を切り取ったものではありません。どのくらいの幅でみていくかという点と関わるのですが，短くて十数年，長くて40年ぐらいの幅の中で，あくまでも同時併存する可能性のある住居跡を拾い上げただけなので，ある一時期の組み合わせは見えてこないですね。小林さんの言うように同時機能住居や非同時存在住居が認定できれば絞り込みはできてくると考えるんですが，現状ではなかなか難しいと言うこともありまして，あくまでもある時間幅の中で最大何棟が同時併存する可能性があって，その中の組み合わせをいくつかのバリエーションで拾えるという程度のもの，という認識です。

若林

その部分は発表の時も慎重にされていて，フェーズ

ではなく結局は各時期の増減の差と言うことでお話いただいたと言うことで，やっぱりかなり切り詰めていってもそういう方法で評価していくべきだとお考えですか。

濵田

そうですね。さらに絞り込みできればとは考えているのですが，今私がおこなっている分析でいえることは，ある時間幅の中での累積結果を見ているに過ぎない。たとえば居住区の中にはたびたび拡張されている住居もあり，なかには中央土坑の位置を変えずに拡張している場合もあり，こうした住居は長い存続期間を想定することもできますので，もう少し別の観点から存続期間の長い住居や短い住居を抽出することができればさらなる議論を深めていけるとは考えていますが，正直そこまで踏み込めていないというのが現状です。

若林

わかりました。それは非常に難しい問題です。住居の同時存在については，演者ごとに一型式の存続幅を何年ぐらいと想定して立論しているのかを聞きたいという藤尾さんの希望も聞いているのですが，それは難しい質問ですので保留しておきます。遺構の共時的な存在をどのようにみるかについて発表がありましたが，会場から何かご質問などありますでしょうか。

田崎博之（愛媛大学）

同時併存の話というのは，結局，何を目指しているのかが一番の問題でしょう。例えば，濵田さんの分析は興味深いのですが，住居空間の専有が決して継続していないこと，つまり，そこに住む小集団が住居空間を継続的に占有するのではないことを読み取れます。土器編年なり遺構のあり方から時間を区切ったとき，何が明らかになるのか。それを明確に述べないと，単に同時併存が可能かどうかとか，土器型式が何年かとか，そんな些末な論議になってしまいます。

（会場の）皆さん方どうでしょうか？

若林

私はむしろその話をしたくて議論をはじめにしたんですが，小林さんが設定した，濵田さんのもそうしたニュアンスがあるとすると，時間で相対的に比べるとか，濵田さんが設定した時間で各地区の中の増減を調べるとか，いうやり方がとられます。結局，田崎さんがおっしゃったとおりで，一番細かく分けたものからどういう情報を引き出すのか，それは何なのかという問題になるのかな，と個人的には思います。

それでいくともう一度濵田さんに振って申し訳ないんですが，妻木晩田では各地区の話がありましたけれども，どういう点がああいう方法によって導き出されたのか，セールスポイントになるとお考えですか。

濵田

こういった分析をしようと思った一つのきっかけは，広域を調査している妻木晩田では，居住域の変遷と墓域の変遷を同時に検討できるということでして，居住域の動態が，墓域の動きとどのように絡んでくるのかを具体的にみる一つの基礎作業と考えています。

明らかにできたと思っていることの一つが，私が設定した６～７期に居住域の数が大きく減少していることです。ただし７期に関しては仙谷地区で墳丘墓の造営がまだおこなわれていますので，複数の集団を結びつける紐帯というのが，それなりに存在しながら居住域が減っていっていること，集落規模が縮小している傾向が読み取れる。

従来は，今回の８期と９期をⅥ－２期（庄内後半）という形でひとくくりにしておりましたので，仙谷地区で造墓活動が終わると松尾頭地区に移動していき，集落規模が再び拡大すると理解されていたのですが，８期を設定することで，その間遺跡内に墳丘墓が見あたらないという状況が見えてきています。

この間に居住域の数は微増しているわけですが，まだ７期とさほどかわらない規模で推移している。それが再び９期になると居住域の数が急増して５期や６期と見た目には変わらない規模の集落になっていることがわかります。

ただしそれまでは海岸線を意識した位置に立地していたお墓が集落のかなり奥まった位置に移動したり，お墓の規模が小さくなって，群を構成しないとか，お墓のあり方がそれまでとは大きくかわっているので，６期以降，７期，８期を経て９期になると一時的に集落の規模は回復しますが，見た目には同じであっても質的にはかなり様子の違う集落像が描けてくるのではないかと思います。

したがいましてただ同時併存の住居を絞り込みたいのではなく，ある一定の時間幅の中で住居跡や居住域の増減を確認するための手続きとしてこういった作業を試みたのが，今日の話なのかなと自分では思っております。

若林

弥生集落の中でできるだけ時期を切っていったときにどうなるのか，現状を知ることができ，よくわかりました。どういうところに生かせそうか，興味深いお

話でした。

石黒

今の関連でいうとたしかに，時期を区切っていくと短い時間幅の中で様相が見えてくるということですけど，そうした場合に累積というか，若林さんがやられた基礎集団というのは結構，存続幅が長いですよね。例えば基礎集団は時期を細分していったときに何を予想しうるかというか，そういうことは考えない方がいいというのか。

若林

心外でして，それ以前の大規模集落論に比べたらものすごく細かくしているんです。それまでは中期全体とか前期～後期を一緒にして，豆谷さんには申し訳ないのですが唐古とか瓜生堂とかみんなそうで，そういう形で評価してきたんですよね。今の編年で誰もが切れる最低土器型式でやったらどうなるかということで出てきたのが基礎集団な訳です。

もちろん濵田さんが言うように細分していくことは大事だと思います。ただ埋積の土壌とかで切れる環境というのは，見つけていかなければなりませんけど，必ずしも潤沢にあるわけではないし，それを広い範囲で比べられる遺跡や遺跡群はそんなに多くはないと思います。

しないというわけではないですが私が分析した河内平野では，生駒西麓の土器はものすごく細かく切れるんですよね。だからできたんです。河内平野の細分精度で唐古や池上＝曽根，安満，玉津田中に適用できるのかというと，私は土器だとしんどいと思います。なぜかというと近畿の弥生中期土器は，様式的にやってますし，それしかできませんからセットで時期を割り出しているんですよね。土器の一つの属性だけでは割り出すということは難しい土器編年は体系がくまれています。

すると柱穴から一片の土器片が出るだけで，土器を類推することは難しいという状況になります。生駒西麓型土器なら強引に型式学的な属性を当てはめてとりあえず時期を仮定的に決めることが可能になります。ですから難しいし，あれでもできてる方だと石黒さんには理解してほしいと思います。

だから田崎さんや濵田さんがおっしゃられるように土器以外の別の方法も考えなければならないと思います。もっと切るべきやとはもちろん思っております。

石黒

若林さんを別に批判するつもりでいったわけではなくて，やっぱり細分できるかどうかは遺跡によるので，妻木晩田はたしかに可能な遺跡であるのでできるところはやるべきだし，できないところはできないなかで考えるしかないんで，それはそれでいいんじゃないですか？という趣旨です。

【大形独立建物について】

若林

消化不良かも知れませんが，次の話題に行きたいと思います。豆谷さんには設楽さんと小澤さんの統合原理のセッションのところでコメントいただく予定でしたが時間の関係でできませんでしたので，ここで，豆谷さんにコメントをお願いします。たぶん建物関係のことでお話いただけるのではないかと思います。

豆谷和之（田原本町役場）

その前に若林さんに確認したいことがあります。若林さんの言っている複合型集落というのは大規模拠点集落と，遺構・遺物という現象面では同じことですよね。例えば中に特殊な遺物の集中がみられるとか，大型建物という施設があるとかを否定しているわけではない。若林さんが言っているのは基礎集団という概念をもって今まで大規模拠点集落と言われていたものを細かくみていこうと言うような考え方であって，現象面では私が大規模拠点集落と呼んでいるものと複合型集落というのは，イコールで結びつけられるのですよね。

若林

イコールの場合もあるし，そうでない場合もあると言うことです。複合型集落という考え方は，基礎集団の分布だけで，あるいは中小の集団の分布だけで集落をみていくという方法がもし確立して，究極までいくことができるならば，最後はなくなるのかも知れないと思います。つまりそういう集団の複合ゾーンですから，最後はなくなるかも知れない。

複合型集落という名称をつけたということは，諸刃の刃でそういう考え方の中では失敗であるかも知れないと一方では思っています。ただ，小澤さんの言う統合原理が唐古について，豆谷さんがそういう話をされるかも知れませんけど，周りの近接するところにはあまり小集落もない場合は複合型集落という名称が使えていくのだろうと思っています。河内平野では難しくなる時期もあると。

豆谷

私は若林さんとは違って大和でやっていることもあって，大規模拠点集落を高く評価したい。大規模拠点集落のまわりにある環壕とか大型建物とか小規模集落にはない施設が，複数集団（元もと唐古・鍵遺跡内部が複数の集団に分かれるということは藤田三郎先生がいっておられたことです）であっても統合している。だからそれは一つであるという見方をします。

例えば若林さんの言う基礎集団，大阪平野で居住域，墓域，生産域がセットなる遺跡を見つけ出されているわけですけれども，果たして第三者が検証した時にあの答えが出せるのか。若林さんは墓域と居住域がセットになると言うが，どうやってセットになると実証できるのか。例えば土器が半分割れて墓域と居住域から出てきたとか，それこそ先ほどから議論されている同時間性の問題とかが，生じるのではないですか。

初めて若林さんが基礎集団という概念をもたれたときは，たしか都市論を潰そうとされていましたが，近頃は親族関係の方に接近し始めておられるように思うんですけど，接近したら矛盾は生じませんか。ただ，私と若林さんが目指しているものの根本は一緒なんだろうとは思っています。決して私は小澤さんとか若林さんのように論理的な人間ではございません。しかし，ちょっと恐ろしいなと思うのは，演繹的なものを発掘現場に持ち込む人たちが近畿にはたくさんいる。

資料を見ていただきたいんですけれども，大型建物とは何かを言うことをわかっていただくために用意した図１です。人の胴周りを凌駕するような柱，これこそが私は大型建物であると。単に梁間が２～３ｍしかないのに一生懸命柱穴捜してきて，桁方向にのばして床面積が50㎡を超えましたからこれが大型建物です，というのはちゃんちゃらおかしいと思います。

特に近畿の，帰納的に調査している人間ではない，演繹的にこうでなければならないと思って調査している人は，やたらめったら環壕集落の中央部で中心的な施設を探そうとする。私にはちょっと…理解できません。

例えば今日の設楽先生の話で，祖霊祭祀に関連する施設として，独立棟持柱付建物の話をされましたけど，これが一人歩きしますと，また一生懸命独立棟持柱建物を探そうとする人が一杯出てくるんじゃないかと。そしてその汚染されたデータをさらに研究者が解釈すると余計に間違った話に進むのではないかと私は危惧するわけです。

例えば滋賀県伊勢遺跡（資料№4）ですが，レジュメ第１図とレジュメ第２図の図面はまったく同じものです。第１図には無数の小さな穴があって，大形建物を囲むように柵がでていたのが，いつの間にか方形区画と言うことで外側に回るようになり，なぜか小さい柱穴が消えています。 どうなんでしょうか。よく柵で囲んだ方形区画とか言いますけど。そりゃ，斎王宮とか飛鳥京ぐらいの掘方なら，同意できますけど，こんな小さいものを一生懸命つないで，果たして柵と言えるのか。

ですから若林さんが複合型集落の概念を持ち込み，首長による単一構造という環濠集落モデルを否定しようとした意図はよくわかります。環壕集落の中央でそんなものを捜さなければいけないと思って，どんどん柱穴をねつ造するような，そういうことが起こりうる可能性は出てくる。

図１　唐古・鍵遺跡第93次の大型建物跡の北西隅柱

図2　西日本の大型建物跡

レジュメ№4第3図の加茂遺跡の大型建物ですが，切り合う竪穴住居の灰穴炉と柱穴の区別が困難です。柱間の間隔は，3.5mと離れている。図2で九州型，中国型，近畿型と私が呼ぶ大型建物を示しています。設楽さんが言うように九州型はたしかに梁間多間型です。一方，近畿の梁間は1間か2間です。大型建物の柱間は大体1.5～2.8mぐらいで，非常に狭いものなんですね。ところが加茂遺跡は梁間多間型のうえに柱間が3.5mもある。間に添え柱みたいなものがあると言うんですけれども，近畿の類型には明らかに乗ってこない建物になります。類例がないものをどんどん認めていって必ず後から出てくるだろうとか，そういう話は考古学の方法的におかしいのではないかと思います。

今日の祖霊祭祀の話なんですが，小澤さんや設楽さんが演繹的に話をどんどん進めていただくのは結構なんですけれども，じゃあ独立棟持柱のない大型建物はどう理解すればよいのか。論文の中では設楽さんが，そうでない建物の存在についてちゃんと触れているのは存じておりますが，それはどうするのか。あるいは近畿の方では決して墓域の方からこうした大型建物は出てきません。そういうものはどう考えていくのか。そういったところに私は問題点があるような気がします。

偉い先生が言っているから出さなければいけない現場は不幸です。現場を見学に行った掘り屋の半分ぐらいが，首をかしげなければならないようなものは，偽物だと私は思います。誰が見ても唐古・鍵遺跡の大型建物の柱のように，おぅっ！と思うものこそが本物であって，解釈が必要なものはいかがなものかと思います。ちょっと警鐘を鳴らしてみました。（本場の人間ならではの発言。それを模倣したものが地方にあるとしたら，それは一生懸命探さないと見つからないのではないか？）

若林

設楽さん，事実認識を含めて発言お願いします。

設楽

豆谷さん，どうもありがとうございます。実は一生懸命捜すとありもしないものをねつ造まがいなことをしてしまうのがたしかに怖いことですが，実は静岡県登呂遺跡が復原修復されましてそこに独立棟持柱建物が立っています。これがそうなのかと思うようなものがあります。おぐろ遺跡の建物はほぼ確実なんですが，この建物の構造とよく似ているから登呂遺跡もそうなんだと復元してしまったものなんですね。私が配った一覧表には加えておりますが備考欄に根拠は説明しておきました。

一生懸命捜して大形建物を設定するべきではない，遺跡を調査するべきではないという豆谷さんの指摘は重々承知しています。伊勢遺跡は他の遺跡と非常に異なっていますよね。方形区画化されているかどうかはともかくとして，それを中心にして同心円状に建物が配列されていること。梁間が非常に広いということですが，柱痕の遺っているものもあるんじゃなかったですかね。遺っているものの中に梁間の広いものがあると思われます。伊勢遺跡は桑原さんの資料の中にもありましたように非常に面積の広い遺跡のようですので，

一つの集落の中に８棟の大形建物があってぐるりと並ぶ。非常に異例ではありますが，それはそれで意味があるのかな，と感じています。

私の発表の中で独立棟持柱建物を祖先祭祀の一つの役割と位置づけたわけですが，短い時間の発表で論証不足でしたので後で補足したいと思います。

【統合原理】

若林

統合原理について小澤さん，お願いします。

小澤

九州型の屋内棟持柱をもつ掘立柱建物ですが博多湾沿岸地域だけで典型的に見られるものです。それ以外の地域では鳥栖市柚比本村と浮羽市日永遺跡の他，１～２例だったと記憶しています。そのほかの集落でも中心に大きな建物をもつパターンはあるのですが，いろいろな構造のものがあります。壱岐の原の辻遺跡では集落の最も高いところに３間×４間の建物があってもう１棟の建物とＬ字形をなして建っていて祭祀空間として位置づけられています。吉野ヶ里には総柱の建物があります。

集落の中心にあってなんらかの祭祀を行っている。私はそれを祖霊祭祀が行われていたと理解していますが，そういった建物の典型的な構造と，それ以外でも集落の中心にあって大形の建物の場合は積極的に評価していってもいいのかな，と考えています。個人的にはそのあたり，柔軟に考えています。

若林

豆谷さんに質問です。人の背丈よりも大きな柱を使って建てる建物がすごいということ，それを大形建物と呼ぼうということはわかりますが，大形建物とは何なのか，という議論はどのようにしたらよいのでしょうか。そういう建物をもつ唐古遺跡，その地区というのは，どのようにしたらその大形建物があるという意味を説明できるのでしょうか。あれは比較的古い段階に出ていますよね，それを含めて何ですが，唐古・鍵遺跡の個別事例，ということになってしまいますけど豆谷さんの方から何か説明あるでしょうか。

豆谷

大型建物は決して唐古だけではなく，大和弥生社会に普遍的な建物だと思います。森岡秀人さんはたぶん部族社会という視点から，奈良盆地では唐古みたいな中心的な集落にしかないと考えておられますが，私は大和において環壕を有する七つ程の大規模拠点集落は全てにそれぞれ大型建物をもっていると考えています。清水風遺跡出土の土器に大型建物の周りで盾と戈をもつ人が踊っている絵が描かれています。よく出来すぎている話なんですけど，唐古・鍵遺跡第93次の大型建物の大きな柱がでた北西隅の柱穴に接した同時期の井戸から，朱塗りの盾と戈がでています。おそらくどの大規模拠点集落でも大型建物の前で，収穫が終わったら踊ったりしていたんじゃないかなと考えています。

同じように，日常はクラでお祭りの時だけ男と女の木偶を持ち込んで祖霊祭祀をとり行っているという解釈も可能でしょう。ただ私にはそこまで精神世界を解釈する能力はなくて，質量的に超絶的な巨大柱をもつ建物こそがすごいんだと言っているわけです。

若林

大きい柱だけれども唐古だけにしかないものではないという発言を聞いただけでも意味がありました。他の集落遺跡に行ってもあり得るものだという過程でみることが出来るという話はすごく重要なポイントであると思います。少し前まではあの大形建物をそんな風には見ていなかったと思いますので。どういう風に実証するのかは難しい問題ではありますけれども，そういう意味で設楽さんや小澤さんがおっしゃっておられる統合原理は，特定の特殊なところだけで働いているわけではなくて，平野の中のいくつかの中で働いているという可能性があるという意味で豆谷さんがおっしゃっておられるのかなと思います。

設楽

豆谷さんへの質問として考えていたことをすでにお答えいただいて，環壕のなかの方形区画，豆谷さんの論文，大変興味深く読ませていただいたのですが，近畿地方の研究者はどのようにお考えなのか，ちょっとお聞かせ願えないでしょうか。たとえば森岡秀人さんのように積極的に評価される方もいらっしゃいますし。

若林

桑原さんどうでしょうか。

桑原

私も大形建物の重要性は認識しているつもりですが，方形区画はあまり重視していないというか，事実認定が難しいので，まだ検討すべき点が多いと思っています。

若林

会場には田崎博之さんと安藤広道さんにもコメンテーターとしてお越しいただいております。まず田崎さんにセッション全体でも個別のテーマでもコメント

をいただければと思います。

【集落構造と集落構成】

田崎

質問という形でコメントしたく思います。先月，兵庫県立考古博物館でおこなわれた埋蔵文化財研究会の時にも感じたことですが，一つの集落のユニットをどういう風に捉えられているかがわかりませんでした。これは，空間分析をやっていくときの分析単位をどのように設定するかという問題です。基礎集団や単位集団があったとしても，それはそれでよいのですが，そうした単位で構成されている集落イメージをどのように考えられているのか。これを質問してみたいと思います。

次に，集落構造といいながら，集落構成の議論しかなかったのは残念です。これは先ほどの集落の構成単位の話とも絡んできます。「構造」という言葉を単純にいえば，幾つかの要素（単位）があって，要素（単位）がどのような相互関係を持っているのかを明らかにしてはじめて「構造」と言えるはずです。そうした集落の構成単位の相互関係がいかなるものかを，実際の遺物や遺構の中から考えていくべきです。

関係性という点で考えやすいのは生産と供給の関係。土器とか石器の生産と供給の話だろうと思います。それを論議する場合，一つの方法として，生産と供給をめぐるいろいろなサブシステム，サブユニットを抽象化させたモデルで考えながら，それを武器にして時期ごとに考えていく。そうしたアプローチも可能でしょう。

もう一つは生産関係の中で，昔，研究会があったような気がしますが，「型式が集団を表す」という大前提で皆さんの論議が進んでいます。しかし，本当にそれはいえるのか？では，その集団ってどんなものなのか？という問いかけが欲しく思います。

例えば，昔，佐原真先生が言っておられたような，女性を介して技術が継承されていくという話を考えながら論議していくのと，ある程度の専業をイメージして論議するのとでは，結論はまったく違ってきます。単純に「型式は集団を表す」という前提で今まで来ているのだけど，それじゃもうすまない研究状況になっていると思います。

さらにいえば，最初に戻って土器一型式をどれくらいに見積もるのかという話とも，当然連動するわけです。例えば，一型式150年だったら女性を介しての技術伝承があり得るのか？あり得ないとしたら代わりにどういうことが考えられるのだろうか。こういう話につながっていくと思います。

どうも論議が現状の追認という部分で止まっていて，これから先の弥生集落論をどのように展開していくのか，方向性，目的，これを最後には総括していただきたいと思います。

石黒

10年前にも同じような話を聞いたような気がします。進歩していないのかという話ですけれども，要は何を明らかにしたいのかをいえということですので，私の場合は遺跡をどう考えるのかということと，遺跡は単独では存在しないのでその周辺を含めて，さらにいえば諸関係の広がりというのは，ここまで広がってここで切れるのかと，いうなかで，要は弥生を中間的なところでみたいと思ってやっているわけです。

九州は念頭にないといいましたけれども気にはしているわけです。ただ目前の課題とは直結していないということです。たとえば大きな論理の中でやるんだとすれば関係してくるんでしょうけれども。今回のシンポのメインテーマと私の個人レベルのズレでもあります。

柴田さんとは話が盛り上がって意見も通ったので，そうした人がいればいいのかな，というところです。

柴田

僕は集落を考えるとき，そのユニットはどういうものだろうということを考えます。2006年に松山でおこなわれた日本考古学協会の時に考え始めたわけですが，今日の濵田さんの発表で，田崎さんの質問の延長にもなるんだろうと思いますが，一段目を切り取ったわけ

ではないとはいってますが，おそらく基礎的な構成単位をそこに見つけ出そうとしているんじゃないかなと思っています。濵田さんが論文中で単位集団と表現しているものがユニットの一つの最小の単位にあたると思っております。

ただそういう単位自体も想像できないぐらいの遺跡の密集度合いの中ではやはりもう少し大きな単位を探し出さなければいけないということもあって，今皆さんが悩みつつもやっているのかなあ，というイメージを持っています。

文京遺跡の場合，異なる技術体系を持った土器作りが協業しているか，専門に作るかしながら供給していると田崎さんが言っておられます。それは専門集団なのか，それともユニット単位でおこなわれているのか。ユニットが単位集団を表しているのか。

私は土器作りが出自に関連してて，集団がそれぞれ作っていると考えています。逆にああいうところ（文京遺跡）の土器作りはそうした状況をよく表しており，ユニットごとに出自などに関連した集団差が表れていると思います。

田崎

柴田さんが言う文京遺跡のユニットの実体が僕自身わからないのがよい例ではあるのですが，聞きたいのは生産や供給を論議するとき，どのような単位を設定しているのかという点です。これはいろんなサイズがあると思います。例えば若林さんの言っている基礎集団，それはそれでよいのですが，その基礎集団がどういう風に結びついているのかを明らかにすべきでしょう。そうした論議を進めるためには，皆さん方がどういう単位を分析の単位としているのか，その単位の具体的な姿とはどういうものなのかということを教えてほしく思います。

また，質問がわかりづらかったかも知れませんが，濵田さんの場合だったら，例えば居住空間の継承性は大きな問題ですよね。そういったことから，構成単位の性格に迫っていけるのではないかと思います。昔から言われていることですが，単位集団自体の内実は全然論議されていません。しないまま親族集団とか，世帯共同体とかいう話にすり替えてきた経緯があります。集落のユニットそして構成単位はこうしたもので，その内実はここまで言えるのだ，という論議をしていかないと，先に進まないのではと思います。

そして，それがあって初めて生産や供給の相互関係を明らかにでき，社会関係も論議できる。生産関係は労働編成と関わっているわけですからね。小澤さん，どうですか。

小澤

頭の中では普段考えているけどなかなか文章化できないことをこれからお話します。見方によってはかなり危険なこととは思うんですが，今思っている部分をお話します。

まず集落という概念ですが，若林さんとも何回か話をしたことがあるんですが，そもそも集落の外縁というものをきちっとラインが引けない場合の方がむしろ多いのではないかと考えています。集落の中にいくつかユニットがあると，私は後期になって顕在化する区画という言い方をしていますけど，若林さんが基礎集団という言い方をされているものに似ていますけど，そういうものが中枢域には密集している。逆に言うと密集しているから中枢域と捉えるわけですが，周辺にいけばいくほど散在化していく。

あたかも東京駅から長野に向かっていくときに都会が続いていてあるときから家がまばらになり，そして田園風景の中に家が点在するという状況があると思うのですが，そういったものに近いのではないかと捉えているわけです。

そういった状況の中でどこまでが一つの集落域なのか，どこで線が引けるのかというのは結構難しい問題なんですね。小郡の丘陵上の集落群を全体で捉える方はまだいないのですが，須玖丘陵上の遺跡群を全体で捉える方がいらっしゃるんですね。私は丘陵上にある一つの集落域と墓域のセットが完結すると思っています。

そのユニット同士の関係は基本的には私の力ではまだ実証できない段階にあると思っています。ああいう極端な集住というか集合的なあり方というのは，中期の場合はたまたま表現されたものであって，より立地に適さない地域へと広がっていけばいくほど散在化する。ですから須玖の丘陵上のユニット群同士の関係と，博多遺跡群と藤崎・西新遺跡群の同士の関係の違いはなかなか実証できないと思います。

そういうのを頑張って実証しようとしたところで隈・西小田遺跡の形成過程を持ち出したわけですが，隈・西小田遺跡の範囲は私が示した図 18 のほかにあと 5 つほど，居住域があるわけです。それらは列状墓で結ばれてはいません。なおかつ第 4 地点と写植が打ってある上の丘陵に中期後半の鏡を数面もつ墓があります。ですからそちらにも中核的な存在があるということな

んですよね。

それとこちらのレジュメに示した丘陵上の遺跡群との関係は，レジュメ図3に示した丘陵上のユニット同士の関係よりは希薄であることに相違ないと思います。ただしそれが隣接している状況が弥生中期の一般的なあり方だと思います。

じゃあ，どうしてそういう状況が現れるのかというので想定したのが，パワーポイントでお見せした氏族集団の図です。氏族の分節がそれぞれ近しいところに居住していて，ある場合には一つの集落を構成しているように見える。でありながら相互の関係よりは，親族的な関係でいくとかなり離れた集落のユニットとかなり近しい関係があったりすると。

隈・西小田遺跡の場合は，近しいユニット同士の関係が密になっていますから，おそらくこれは一つの氏族の分節と理解していいのではないかと個人的には思っています。その場合にも元もと関係なかったと考えています。前期末に進出した段階ではそれぞれに墓を作っていますし，元もとここに進出してきた集団は，どこから来たのかわからない人間同士ですから，進出当初は関係なかったと思うんですよね。同じ丘陵上に進出して近しい関係を模索する中で，親族集団同士を融合させて共通の祖先を祭り上げて一つの氏族として組み直しているんだと。

かなり社会組織論的な話で空中戦になっているんで怖いんですが，このような理解をするとなると，弥生社会は氏族分節が存在しながら相互に網の目のように結びつきつつも相互に結合する相手をコロコロ変えることができる組織なんだろうと。こういう状況が中期です。

隣接する集落ユニット，そういう居住集団同士の関係というのは，隣接していれば必ず関係があるのかどうかはまったく別問題で，ないかもしれないし，あるかもしれないし，それはもう実証できない場合が非常に多いと思います。

後期になると一つの環壕のなかにくくられた内部を分割するようになるという意味で，非常に凝集性が高くなると，いうところが中期と後期の明確に異なる点です。後期の場合は確実に相互に密な関係を維持しているんだろうと。中期と後期では集団の結合論理が変わっていると考えます。

というわけで分析単位は居住域と墓域のセット関係が原則的に中期にはあると。それ同士の関係というのはさまざまなパターンがあるが，後期になると中期の結合関係は大きく変わるというのが私の理解です。

田崎

村という形でイメージできるのだろうか？

小澤

用語はちょっと。

田崎

イメージでいいからちょっと教えてもらえませんか。

小澤

中に住んでいる人同士が基本的に血縁関係にあるリネージ分節という表現になると思いますが，曾爺さんぐらいを共有している集団とその傍系親族がガサガサと集まってきているイメージなんですね。それが二世代の深度であれば住居1棟2棟ぐらいの構成員になるし，4世代5世代になると10棟，20棟集まってもおかしくないと思います。こんな空中戦して怖いんですけど。

田崎

集落遺跡の住居群も構成単位であるわけですが，近接する住居域と墓域のセットも構成単位の一つですよ。ここでは集落のユニット，云々というのはちょっと置いておきましょう。構成単位間の相互関係がわからないといっているけれども，それを考える手掛かりはあるのではないか。例えば，石器や土器の出土量とか，あるいは自然遺物などの食物残滓から考えていくこともできるのではないか。例えば，九州の弥生前期だと貯蔵穴に食物残滓が廃棄されていることがあります。そうした考古学資料がもつ様々な情報を取りこむことで，小澤さんの言う住居域＋墓域のセットの内実も論議できるのではないかと思います。是非それをやっていただきたいと思います。

若林

私もそれについてはいろいろと思うところがありまして，仮にユニットとしますと，小澤さんが見つけている規模のユニット，僕が見つけている規模のユニットですが，小澤さんと私がなぜそのようなことを言うかというと，九州北部と近畿の特に大阪平野では墓が一緒に見つかり，非常にわかりやすく検出されるからなんです。豆谷さんは唐古は既に幾つかの集団に分かれていると，そんなことは既に指摘しているといいましたが，基礎集団が動くときに墓域も一緒に動く。だからそういうユニットがあるんだということをいう。地形の単位だけで分かれているというのなら，それは必ずしもそうはならない。しかし居住域が動くときに墓域も一緒に動くという，一番大きな居住域が形成さ

れているところでは一番たくさんのお墓が形成される。動きが見えるからそれは一つのセットと考えて有機的に意味のある，少なくとも考古学的には墓をつくる集団ということを少なくともいえるということで話を進めたいわけです。

小澤さんも甕棺墓がどういう風に続いているのか，それぞれの住居群にどういう風に続いているのかというのが，それを一つに大きく括る根拠になっていると思います。

お墓でユニットの関係がわかる地域の研究者はそれを利用しながら話をする。一方では私が先ほどA1とかA2とか言いましたけど，方形周溝墓がたくさんあるとかないとかいうことではなくて，実はたくさんのお墓をつくる地域は弥生時代の平野の中でそれほど多いわけではない。そういうところで我々はどうすればよいのかという問題，あるいは我々の言っていることは受け入れにくいという素地があるのではないかというのをすごく感じます。

じゃあそれをどうしたらよいのか，結局私は田崎さんのおっしゃられたことにすごく納得するわけです。我々は墓との関係でユニットを抽出した。じゃあユニットの中のことをせんと，そのユニットを普遍化できません。それをやらんとほかの地域ではほとんどの弥生時代の遺跡のある地域では中規模の居住域と墓とのセットが必ずしも認められるわけではない。そうすると中側の関係性をやる必要があるという指摘はごもっともという感じがします。

弁解する余地が出てくるのかなあ，という個人的には感じています。ただなぜ一方では墓をつくる集団が居住域と結びつく地域と結びつかない地域があるのかという点については，別のレベルで考えた方がよいのではないかとも思うわけです。司会者の感想で申し訳ないんですけれども。

今，ユニットの質の問題になっているんですけれども，それをやらないと集落構造のことは集落とはいえなくなってしまいますので。集落と言われている一つの遺跡の構造ですね，分析することはできなくなってきているんですけれども。この件に関して発言するのは難しいかもしれませんけどどなたか。

ではもう一人のコメンテーターである安藤広道さんに全体を通じての感想とご指摘をお願いしたいと思います。

安藤（慶應義塾大学）

まず祖先祭祀の話で，小澤さんが全然血縁関係のない人たちが一つのまとまりをつくるんだという話をされていましたが，設楽先生が先ほど補足をしたいとおっしゃっていたことがその点と深く関係すると思いますので，先にそれをお願いしたほうがいいと思います。私は全然違う話をしますので。

設楽

ありがとうございます。解釈先行の話になりますが，豆谷さんのレジュメ№3の右下に神奈川県中里遺跡の図面があります。小田原市にある足柄平野という三角平野に立地する遺跡で海岸から1kmぐらいはいったところの，沖積低地の微高地上の村です。弥生中期の半ば，Ⅲ期でして，それ以前にはまったく何もないと言っていいぐらい周りに遺跡がないんですね。突然この遺跡が現れる。土器型式では2型式ぐらいありますので分解できるんでしょうが，全体で100棟ほどの住居跡が見つかっています。

それ以前の村はどういうあり方をしていたかというと，海岸から20kmぐらいはいったところにある台地上にすごく小さな村が点在していました。未だに晩期末や弥生前期の住居は見つかっていないんですけれども，土坑などが見つかっている。これはここだけに限ったことではなくて関東・中部高地の晩期から前期の集落は非常に小さくなる傾向が見受けられます。

それでも住居数棟からなる環状集落がみられ，小さな村を形成するものもある。晩期から弥生前期にかけての村は再葬墓を営んでいます。再葬墓自体はたくさん壺を入れますので，そこそこの人数はいたのに集落はほとんど見られない。この現象をいかに考えればよいのかという点で，この中里遺跡は非常に有効な資料だと思います。

中里遺跡の内部を見てみますと，ちょうど真ん中のあたりに独立棟持柱建物が存在しているわけですね。その左と右に丸で囲んであるのが竪穴住居なんですが，これをよく目を凝らして心眼を働かせてみますと，円形になっている単位が幾つか抽出できます。

小澤さんのいう区画内の分割単位，あるいは若林さんのいう基礎集団，その一つ一つが抽出できるのではないか。じゃあ，これは何かと言いますと，先ほど台地の上に点在していた一つの小さな村が寄り集まって形成されていったと考えているわけです。台地の上に分散化している集落というのはかつて大きな集落だったんですね。とんでもなく遡ってしまいますけど縄文中期から後期にかけて存在した環状集落が分解したもの，分散化したものなんです。その生き残りの連中だ

ろうと。おそらく血縁的なつながりを非常に強く持つ集団であって散在している。それが寄り集まっているんだと。その中心に独立建物があるということは，かつての再葬墓の役割をしていた。再葬墓は一つの土坑の中にたくさん人骨を納めたりして，祖先祭祀的な役割が非常に強いのです。ですからそれが独立建物として存在していることは集落の中心に祖先祭祀の場を改めて設けたことになるのではないかと考えるわけです。

したがいまして一つ一つの単位，まあ基礎集団といったものの内実が中里遺跡を分析する場合に非常によい素材ではないかと考えています。

【集落内関係】

若林

ありがとうございます。では安藤さん，次いきましょうか。

安藤

歴博の研究報告149集は，近年の弥生時代の集落遺跡研究において多くの成果発表を行っている比較的若い世代が中心となって，現在の集落遺跡研究の趨勢をまとめたものと評価できます。

そこでは，現在までに蓄積された膨大な量の考古学資料を丹念に整理したうえで，各地域の集落遺跡の時空間的動態がモデル化されていまして，個々の地域における，具体的な弥生時代の集落遺跡の最新の研究成果を知るうえで，とても有意義なものであると考えています。

しかし，その一方で，私個人の弥生時代の集落遺跡研究の視座からすると，必ずしも，もろ手を挙げて賛成できない問題点が多々みられるのも確かです。そうした問題は，個別具体的な遺物，遺構の捉え方から，歴史哲学的な側面にまで及んでおり，本音を言えばその一つ一つにコメントをしたいのですが，それではいくら時間があっても足りませんので，ここでは，なかでも根本的な問題となる，歴史観に関わる問題点についてコメントをしておきたいと思います。

149集の諸論文を読んで，まず気になったのは，集落という，人々の基本的な生活の舞台，つまり人間の生の生産・再生産が行われる中心的な舞台の研究でありながら，その生を支える部分，例えば食糧生産のあり方であるとか，生活必需品の製作・流通・消費といった側面が，そこで展開されている議論に，必ずしも有機的に結びついていないのではないか，という点でした。人口や自然環境を含めた物質的世界全体のなかで，人間の生の生産・再生産のあり方，そしてその変化を捉えていこうとする視点が希薄だということです。もちろん，石黒さんの論文のように，そうした側面を踏まえた議論を展開している方もいらっしゃいますが，全体的に言うと，それが意外なほどに少ないように思いました。

149集の諸論文は，集落遺跡の具体的な時空間的動態の把握と，そのモデル化に主眼を置いた研究が中心になっているわけですから，まずはその点をはっきりさせようという姿勢はわかります。それでもいくつかの研究においては，そのモデルに基づき，集団の統合原理や，人々の基礎的な社会の単位の抽出，そしてそれらと親族組織との関係等についても議論されているわけですから，そうしたなかで，人々の生の生産・再生産という側面が，議論の中心に入ってこないのは，やはり奇異に感じたということです。

では，どうして人間の生の生産・再生産に関わる議論が欠落してしまうのかと言うと，私は，歴史を含めた世界全体を理解するための基本的視座，歴史哲学，世界観といったものの議論が充分でないからだろうと考えたわけです。人間の生の生産・再生産を議論に組み込み，歴史を全体論的に捉えるための，いわばメタセオリーの議論が不足していることが問題なのではないかということです。失礼な言い方のようにも聞こえるかも知れませんが，何もこれは，149集に論文を書かれた方々だけではなくて，近年の日本列島の先史時代研究全体において問題にすべきことだとも思っています。

この点につきまして，私自身がメタセオリーの基盤としております，マルクス主義的唯物史観を例にとっ

て，少し細かく説明したいと思います。

現在，日本の考古学において，マルクス主義的唯物史観そのものが深く論じられることは少なくなっているように思いますが，それでもマルクス主義を批判する研究者は依然多いですし，一方で，マルクス主義で使われてきた言葉を普通に用いている研究者も少なくありません。そうしたなかで，私は，そこでのマルクス主義的唯物史観に関わる議論が，多くの場合，大きな誤解を含んでいること，そしてマルクスやエンゲルス，その後のマルクス主義的な考古学者，歴史学者が提示した，共同体や都市，国家といった諸概念の議論に止まっていることを残念に思っていました。ですから，ここではまず，私の考えるマルクス主義的唯物史観の基本的な歴史の見方をお話ししたうえで，149 集に対するコメントに移りたいと思います。

マルクス主義は，よく経済決定論と言われますが，これは完全な誤解です。よく聞かれる，下部構造が上部構造を決定するとか，生産力と生産関係の矛盾が歴史を動かす唯一の原動力などというのも，とんでもない間違いです。そんなことはマルクスもエンゲルスも主張しておりません。この誤解を解くと，マルクス主義から学ぶべきより根本的なところが見えてきます。それを短く表現すれば，人間の生の生産と再生産を基軸とした，歴史を含む世界の，弁証法に基づく全体論的な理解の仕方ということになると思っています。こうした全体論的な視点に基づいていたが故に，マルクス主義は，これまでの歴史哲学や世界観の大きな流れを形成してきたわけですし，現在に至ってもポスト構造主義をはじめ，現代思想の基盤のひとつになっているのだと考えています。

マルクスやエンゲルスが言っていることを少し引用しておきますと，マルクスは，『ドイツイデオロギー』のなかで，歴史にとっての第一前提として，次のような説明をしています。

「歴史を創ることができるためには，人間たちが生活できていなければならないという前提である。生活しているからには，何はおいても最低限，飲食，住居，被服，その他若干のものがそこに含まれている。それゆえ，第一の歴史的行為は，これらの欲求を充足させる手段を創出すること，つまり，物質的生活そのものの生産である。」

また，エンゲルスは，唯物史観の根本を次のように判りやすく説明しています。

「唯物史観によれば，歴史における究極的な規定的契機は現実的な生の生産と再生産である。それ以上のことは，マルクスも私もかつて主張したためしがない。しかるに，もし経済的契機が唯一の規定的契機だというようにねじまげられてしまうと，先の提言は無内容な，抽象的で馬鹿げた空文句になってしまう。経済的状態は土台ではあるが，上層建築のさまざまな契機，階級闘争の政治的諸形態やその結果，つまり，勝利した階級によってその戦勝後に制定される制度や憲法など，法の諸形式や当事者たちの頭脳における現実の階級闘争の反射，政治的・法律的・哲学的な諸理論，宗教的直観とそれを教義体系にまとめあげたもの，こういったものが，歴史的闘争の途上，発展に影響を及ぼし，多くの場合，とりわけそれの形態を規定する。これらすべての契機の一つの相互作用なのであって，ここにおいては結局のところ，無数の偶然事を通じて，経済の運動が必然的なものとして，自己を貫徹するのである。」

マルクスやエンゲルスの唯物史観の根本が，人間の生の生産，再生産にあるということは，これでよく判ると思うのですが，ここでキーワードになっているのが，相互作用という言葉や無数の偶然事を通じてという言葉です。

相互作用というのは，弁証法の核となる考え方であり，エンゲルスも『反デューリング論』のなかで，「原因と結果という観念は個々の場合に適用するときにしか妥当しないものであって，個々の場合を全世界との総体的連関のもとで考察する段になると，両者はたちまち結び合い，普遍的な相互作用という映像に解消してしまう」と言っています。

これを考古学に引きつけて話をすると，例えば，考古学や歴史学において，気候の変動がある社会・経済的な変化をもたらしたという説明をしたとします。縄文時代で言えば，後期の寒冷化が人口の減少を引き起こしたと言われることなどがその例になります。つまり，気候の変化が原因となって，結果として人口や生活の変化が生じたという説明です。しかし，よく考えてみると，気候の変化は，生活の変化の大きな要因であるかも知れませんが，一方で，人々の生活のあり方が気候の変化に対して柔軟性を持っていれば，大きな変化は生じないわけですから，人々の食糧の獲得・生産のあり方，人口と潜在的な環境収容量との関係といったような，その時点での人間の生活そのものも，変化の原因のひとつであることに違いはありません。また，それだけではなくて，気候の変化によって生息地や個

体数が変化したり，種子の生産量が変化したりといった，食料資源としての個々の動物や植物の生態も，原因のひとつと言えるはずです。さらに，気候変動の原因を追究していけば，太陽黒点などの天体現象を含むさらに大きなレベルの原因を指摘することもできます。通常，気候の変化という原因とその結果として説明されることも，実際には全世界が介在する複雑な相互作用によって生じているのであって，それをひとつの原因と結果という因果律で説明するというのは，その一部分を切り取って説明したに過ぎないことになるわけです。それどころか，気候の変化の度合いと人びとの生活の変化の度合いの関係は，あくまで相対的なものですので，気候の変化を唯一の原因とするような説明は，その支配的要因のひとつを指摘したことにはなっていても，実は重要な点をあまり解明していないというふうにも言えるわけです。

ただ，すべてを相互作用と言うことで全世界に広げていってしまうと，どんな小さな要因も全世界に関わることになってしまいます。それはそれで逆に何も説明したことにはならない。この点に対し，マルクス主義的唯物史観では，実際に人間の世界の動きに関わる諸要因には強弱があって，全世界におよぶ諸要因の複合全体の運動を規定しているものがあると考えます。それが歴史を作ることができるためには人間たちが生活していなければならないということ，つまり人間の生の生産と再生産がおこなわれていなければならないということになるわけです。

世界の個々の事象は偶然なことが多いのですが，結局のところ人間が歴史を作っていっている以上，全体としては人間の生の生産と再生産という根本的な部分が最終審級となって，その方向性を規定していると言えばいいでしょうか。人間が生きること，生きるためには生産をしなければならないこと，生産をするには，生産手段や生産関係の生産，再生産をしていかなければならないこと，これが歴史の土台となるということです。マルクス主義的唯物史観は，人間の生の生産と再生産を，歴史を究極的に規定するものとして位置づけたが故に，弁証法によって全世界に広がっていく全体論を展開していても，無数の相互作用の網の目によって形成される世界に秩序を見出すことができた。物質的生産を根本的な規定要因としたうえで，政治，宗教，イデオロギーと言った観念の世界までを全体として理解することができた。これがマルクス主義の考え方だろうと思います。

もちろん，マルクスのこうした世界の了解の仕方にも批判はあるわけですが，それはひとまず置いておいて，こうしたマルクスの世界の了解の仕方は，先史考古学における解釈の世界の構築にあたっても，なお多くの示唆を与えてくれると思っています。我々は日常的に部分的な因果関係による説明に慣れていて，そうした説明で満足しがちですが，相互作用に基づいた説明のほうが，事象をより多角的に捉えることができ，その記述を厚いものにしていけることは間違いありません。また，生きた人間を対象としているという当たり前のことを，常に意識した議論が可能になります。

そうした観点から，今回の報告の諸論文を見てみますと，最初に述べましたように，集落の変化の背景に人の生の生産，再生産という観点が組み込まれていないことを，どうしても問題にしたくなるということです。加えて，集落や社会の構造やその変化を説明する際に，部分的，限定的な因果関係による説明が中心になっている点が気になってしまうというわけです。

最近，弥生時代の集落遺跡研究においては，溝口孝司さんや田中良之さんの提示した，複数のクランから構成される集落のモデルというものが注目されていることもあり，リネージやクランといった言葉によって，集落や集落のまとまりのあり方を説明することが一つのトレンドになっているように思います。149集の諸論文も同様です。しかし，親族関係をある事象の説明に組み込むにしても，親族組織や集落群のあり方が，人々の食糧や生活必需品の生産や交換，生の再生産の根本である異性の移動や交換などと深く結びついていることは間違いないわけですから，親族関係のあり方から説明をするだけでは，やはり事象の部分を捉えただけということになってしまいます。例として挙げさせていただいて申し訳ないのですが，例えば祖霊祭祀の累積的な効果が拠点的な集落の形成の要因になっていたという小澤さんの説明に対しても，継続的な大規模集落の形成理由の説明としては不充分だと反論したくなってきます。

マルクス主義的唯物史観の考え方からすると，小澤さんのように祖霊祭祀の累積と居住地の固定化の関係に注目するとしても，そのことによって人間の生の生産と再生産に何らかの制限が加わることがあったのかという点を問題にすることになります。集落に人口が集中すればそれだけ食料が必要になりますので，必然的に遠いところにも耕地を造らなければならなくなり経済効率は下がります。つまり，祖霊祭祀の累積に対

しては，祖霊祭祀の場に居住域が固定されるということと，人間の生の生産と再生産に対する制限の拡大との間に生じる矛盾が，未だ構造維持の閾値を越えていない状況を示すものとして理解することになるはずです。そして，そうした問題意識のもとで，人口や食糧生産のあり方，生活に必要な諸道具の生産や交換といった側面を議論に組み込んでいくための，具体的な考古学資料に基づく分析を進めていくことになるわけです。

149 集の諸論文の中には，他にもこうした観点から反論したい点がいくつもありました。折角，集落遺跡の膨大なデータを用いて精緻な分析をしているわけですから，メタセオリーとしての歴史を含む世界の理解の仕方をしっかりと認識したうえでの議論が必要ではないか。以上が，149 集を読んで私が最も強く感じた点になります。

若林

勉強します，という感じですけれども。

小澤

おっしゃるとおりだと思います。私が祖霊祭祀という考えを持ち出したのは，拠点集落というのはいろいろな研究者が，どうしてそれが拠点集落といえるのかという観点からずっと説明してきたと思います。物資の流通拠点であったりとか，特殊品の生産拠点であったりとか，そういう性格づけをずっとしてきたわけですけれども，なぜそこが物資の流通拠点や特殊品の生産拠点として成立したのか，という点についての説明はない。あまり難しい，原材料が近いというそんな説明だけではやっぱり弱いと思います。

別にほかの近くにあってもよいのだけれども，実は私も拠点集落の成立については説明していないのです。これはあえてしていません。なぜそこが拠点集落として選ばれたのかというのは，なかなか私の現状の説明体系の中では難しい問題だと思っています。ただし物資の集中が一度始まるとそこが拠点となって効果が拡大する，集中する，持続するという動きが必ずあったから拠点集落になっているわけですよね。

その背景にどういう論理があったのかというのを祖霊祭祀という形で説明しようと試みているわけです。確かにご指摘のように生産や流通はどうなるのかという問題が必ず出てくると思いますし，それは今後組み込んでいかなければならない重要な課題だと思います。ただし一つの案として祖霊祭祀がたまたまそこに固定化したことによる親族組織の結節点としてその集落が成立すると言う動きは，物資の流通の集中点となった。あるいは生産組織が集中するようになった背景として重要視したいというのが私の立場です。生産の話は今後，組み込めればいいなと思っております。

若林

私からも何か言わないといけないと思いますので…。まったくご指摘の通りなんです。どうして集落論を書いているときに生産のことが直接的に分析対象としてあまり出てこないのか，という問題ですね。河内平野遺跡群の増大で分析した各集団の石器組成についての話というのは等質的な生産活動という論拠で使ったりしていますが，比較的に断片的になってしまうんです。

それはなぜかというとこれまでの弥生時代の研究，特に近畿地方でやっていますとそういう研究成果にやっぱり依存してしまう。私の基礎集団論とか複合型集落，複合型ゾーンとか言っても，同時に酒井先生の拠点集落論も結局は成り立つんです。流通の中心となる点のところの構造を違う形で評価していて，全体の人間関係に変えていこうとしているだけのことであって，そのゾーンの内容を酒井先生の拠点集落論で読み替えても，酒井先生の書いた全体のネットワークの線は基本的に消えません。結局は酒井先生の論の上に載っている，それを変更しないでやっていることを自分でも大いに自覚しているわけです。

その部分について自分は根本的な変更をしているんではないんだなと非常に自覚的なものとしてあります。ただ，だからといってそのままでいいのかというとそうでない部分があるので，じゃあ，どこから変えるのか，といった時にはここのところ集落の分析をやっているポイントから変えていくという戦略，を現状としてはとらざるを得ない状況になっていると。

まさに安藤さんの指摘は的を射ていて，トータルなアイデアから出発しているのではなくて，システムそのものの問題には気づいているんだけれども，システムの他の部分については継承しつつ，重要な部分の構造を変えることによって全体を変えようと試みている。私なんかそうだし，ここのところよくおこなわれている近畿地方の方形周溝墓の研究などにも同じような傾向があると思いますが，そういう状態に今のところあると。

我々はどういうところから突破できるのか。安藤さんの今日の話は，最初からトータリティをもてという話だったと思いますが，しかし個人の能力という問題と，これまでの自身の成果を見たときに，非常に難しい状態にあると思います。どうしたらよいのかわから

ないのですが，安藤さんがおっしゃるように依存しながらそれを変えていこうとしている状態だと思います。

どうして藤尾さんに，こういう会の開催を提案したかというと，どこに問題があるのかは私には整理できませんでしたが，このメンバーでやっているときに暗黙の了解や暗黙の共通認識，あるいは基盤というものがあって，それを前提としながら議論していく。だけどどうも全体としてそれは，前の世代や異なる地域の人たちから見れば，先ほど豆谷さんがおっしゃられていたように，それぞれの考古学に携わっている職業的な立場も含めて，私たちの共同研究がどういう位置にあるのか，ということについて，私には強い不安感があったからだと思います。安藤さんの話はその不安感の根本を非常にうまく説明していただいたと，自分では思います。

どういうトータリティを我々が獲得していくのかもっとも難しい問題だと思います。ただ，豆谷さんは演繹的であってはいけないと言いましたが，私は人文科学，社会科学の中では考古学はやっぱり帰納的な部分だと思います。

安藤さんの話はメタセオリーを使わなければいけないというものでした。これは永遠の課題になると思いますが，メタセオリーを使わなければいけないけれどもメタセオリーに対する刺激でなければならないというのも我々のもう一つの立場だと思います。

発掘調査の情報からどのようにメタセオリーを少し揺らすことができるのか，メタセオリー間の関係をどういう風にすればよいのか。メタセオリーというのは一つではなくていろいろありますから。そういう問題を集落とか弥生遺跡研究の中でどういう風にしたらよいのか，というのが自分の課題なのかなと思っています。

個人的にはメタセオリーを使わなければならないといわれると反発が起きる。メタセオリーを揺さぶりたいと思っている。だけど揺さぶれない自分もあるし，という環境ですね。これをどうしたらよいのか，だから僕はやっぱりそういう意味では，さっき田崎さんの指摘のように中からやらなければ仕方ないだろうと，一方では感じます。答えになっているかどうかわかりませんけど，そういう感想を持ちました。

安藤

私は，何かありもののメタセオリーを使えと言っているのではありません。そうではなくて，歴史の復元を行っている以上，メタセオリーに相当するものは必ずあるのであって，これを自覚することが大切だと言っているわけです。自覚ですね。歴史の見方は，自分自身の経験や知識の蓄積の中で形成されていきます。それを自覚し，内省的，反省的に見つめ直さないと，我々の常識的な世界の理解の仕方が，体系性をもたないままメタセオリーの役割を果たしてしまう。ですから，まず，自身の歴史の見方を自覚し，洗練させていくべきだろうと申し上げた次第です。

少し個別の話になりますが，若林さんの論文にも大きな疑問点がありまして，それは何かというと，若林さんは弥生後期において平準化という言葉を使っているのですが，今日の津村さんの報告にもありましたように，後期は集落の立地にしても形態にしてもむしろ多様化しているという側面があるわけですね。

若林さんは，山や丘陵に上がっていく大規模な集落も，低地部の複合型集落と同等に扱ったうえで，集落群が単純な構造を持つようになるとおっしゃっていますが，集落の立地や分布と大いに関わる，食料の生産や道具の生産という観点を含めないで表面的な構造を抽出し，平準化という評価をくだすことが，果たして研究の方向として正しいのか，ここに疑問点があるわけです。先ほどのコメントでは，祖霊祭祀を例として取り上げましましたが，若林さんの議論も，全体の一側面を切り取ったものになっている点で，同様の批判が当てはまると思っています。

若林

ありがとうございます。もう私が反論する必要もないと思います。どうしましょう，皆さん，かなりいいたいことをいっているという感じですが。

大久保

安藤さんのお話に久々に昔聞いたいろいろな用語が出てきたんですけれども，原理的には安藤さんが指摘されたとおり，マルクス主義の使い方なんか，もう一度見直す必要があるとは思いますが，それでも意地の悪い言い方をすればエンゲルスにしてもマルクスにしても歴史叙述にこけた。確かに原理的にはそうなんですけれども彼らは人類史を書けなかった。というのは厳然たる事実ですから，そこのところをどうしようかな，というのが僕の立場ではあるんです。今の安藤さんの話は非常に刺激的な印象をもちました。

ちょっと一言言わせていただきたいのは，安藤さんも批判されましたけれども，それとは違う形で祖先祭祀や墳墓の評価についてなのですが，非常に簡単に埋葬という行為とそれに伴う儀礼的な側面を，祖先祭祀

に置換してしまう。そういう発想法というのは大丈夫なんだろうかと。

極端な話をすれば弥生時代だけしか研究しないのであればそれでもまあ，いいかと思うんですが，たとえば古墳時代，それから古代に向けての日本列島社会の変化，そのなかでいろんな政治システムを作っていくときに，埋葬という行為をいかに加工していくかというところで大きく社会変化を追っていこうという観点に立った場合，簡単に埋葬儀礼を祖先祭祀という言葉で言い換えてしまうと，今度は古墳時代以降の社会をまったく語れなくなってしまう，というところに危機感を感じます。

今日使われた個別の埋葬儀礼なりなんなり，私たちが墳墓から読み取ることができるのは，まず絶対いえるのは社会に新たに発生した亡骸をどう処理するかということですよね。そこが原点となってそれ以上でもそれ以下でもない。

発生した亡骸を社会的に取り扱う行為の中で既にもう存在しない，想像上の過去のメンバーに対する眼差しまでを向けるかというのはまた別問題であって，それをまったく同一視するのは日本の近代思想，近代社会の中で培われて，それからまだ抜けられない我々の常識なんじゃないかと。

集落のところの単位集団論の中で近藤先生がすっと血縁関係に置き換えてしまったということを批判されましたけれども，僕もそれはその通りだと思います。それはやっぱり我々が息をしているような20世紀の論理というのが，実は近代の常識，日本の近代社会，家制度を基礎としたような社会構成を作っていこうという中で，1世紀かかって作り上げてきた論理の中に我々はどっぷりつかってしまって，そのなかで常識化してきた話だと思うんですよ。

それを越えようと思ったら，特に重要な祖先祭祀のようにイデオロギーとしてすごく強力なツールを社会がいつ獲得したのか。それを一つの歴史的な所産としてきちんと捉えないと，長期的に弥生時代以降，以前の社会変化を見ていく上では，少々つらいことになるのではないかと。

たしかにあると思うんですよ，統合原理として個別の埋葬行為をさも想像上のメンバー，過去という時代においたメンバーに対する働きかけと同一視してしまうようなイデオロギーをつくる時代も確かにあると思います。でも本当に弥生時代の社会をそのように見た方がいいのかどうか。

僕は古墳時代はそういうことはしていないと思います。本当に社会的な装置として本格的にそれを作動させるのは飛鳥時代以降ではないかと思っています。発展段階論的に捉える必要もないのに，その前にあってもいいんだけれども自明の前提として祖先祭祀という風に議論してしまうと，長いスパンで社会変化を追うときにつらいことになるんじゃないか，という危惧を感じております。

設楽

祖先祭祀の話を私もしたので一言言わせていただきます。埋葬儀礼がすべて祖先祭祀とイクウォールではもちろんございません。社会人類学の側から祖先祭祀は，やはり死と親族組織と世代深度，供養とが一体化して初めて成立するものであるといわれています。要は考古学的にそれをどう捉えていくかだと思います。

一つの実践は『考古学研究』の最新号に書きましたのでご参照ください。

小澤

私が祖先祭祀といっているのは基本的に溝口先生の墓域の形成過程の分析結果に基づいています。特に列状墓と区画墓の相互関係については列状墓に葬られる被葬者が区画墓の方を向きながら挿入される例が非常に多いということ。それから区画墓の中心主体の小さいマウンドが存在していたと想定した場合，そこに次の世代の後継者を差し込むように挿入する事例が非常に多いこと，そういったことなんかは明らかにその，先代に埋葬された人間を非常に強く意識していると思っていると理解していいと私も思っています。

そういう側面から区画墓と列状墓で執り行われた埋葬時の儀礼，というのが非常に祖先を強く意識した儀礼と理解していいという立論のもとに述べているということだけフォローさせてください。

若林

話も尽きませんし何かまとまったことがあるわけでもありません。時間もないのでこれで終わりたいと思いますが，大変申し訳ないことにせっかく韓国の研究者の方，来ていただいているのに今日のシンポではコメントをいただくことができませんでした。大変申し訳ないことでお許しください。ただこんな空中戦を日本でやっているよという話を韓国に持ち帰られてどういう風に思われるのか，一抹の興味がありますので，いずれまたお話を伺えればなと個人的には思います。まとまりませんがこれで総合討論を終わりたいと思います。ありがとうございました。

藤尾

二日間にわたり皆さん，どうもありがとうございました。韓国の先生のお話がありましたが，先ほどお昼に行くときに少し感想をうかがいましたら，今日の午前中の話だけでも大変刺激になって，今後，韓国で自分たちが掘っていくときに適用していきたいというふうにおっしゃられておりましたので，そういう意味ではお役に立てたかな，と思っております。

今回の二日間にわたる議論につきましては記録を録っていますので，起こしながら，皆さんからいただいたご批判や課題を含めまして，壇上の皆さんにフィードバックいたしまして，手を入れてもらったものを，来年3月締め切りの『国立歴史民俗博物館研究報告』通常号に投稿したいという営業方針を持っておりますので，また楽しみにしておいてください。

最後に会場の運営を含めお世話いただきました同志社大学の若林さんをはじめスタッフの方々にお礼を申し上げて，二日間にわたる研究集会を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

同志社大学寒梅館シンポジウム会場

会場入り口

韓国の青銅器時代報告に聞き入る参加者

藤尾慎一郎（国立歴史民俗博物館研究部）
李 昌熙（総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻）

（2010年3月29日受付，2010年7月27日審査終了）